C・OS・M・OS 4

（第四編　誕生）

照　伝光

主な登場人物等

第一編（男と女）のあらまし　1
第二編（コンピュータ）のあらまし　3
第三編（アンドロイド）のあらすじ　5
第七十五章　百地三太夫（承前）　7
第七十六章　ＰＣ９８２１（承前）　19
第七十七章　サーチ船長（承前）　31
第七十八章　合流　51
第七十九章　更なる合流　75
第八十章　金環日食　87
第八十一章　改心　97
第八十二章　限界城　123
第八十三章　戦闘用アンドロイドの誕生の経緯　147
第八十四章　体外離脱　167
第八十五章　対抗策　179
第八十六章　束の間の通信　189
第八十七章　大統領就任　207

第八十八章　禁断の多次元エコー　217
第八十九章　ノロ化　239
第九十章　戦闘用アンドロイド五右衛門　253
第九十一章　命を繋ぐこと　267
第九十二章　出産　285
第九十三章　オニヒトデ　301
第九十四章　ビートルタンク　327
第九十五章　分身の術　355
第九十六章　数字　375
第九十七章　変身の術　391
第九十八章　二次元エコー　403
第九十九章　六次元の世界の事件　429
第百章　憲法改正　441
第百一章　ＭＹ２８とＭＡ６０の誕生　451
第百二章　酸素攻撃　471
第百三章　大統領救出作戦　495
第百四章　カブトワリ　509

第百五章　四貫目対五右衛門　533
第百六章　限界城の限界　549
第百七章　巻物　563
第百八章　性発生手術　579
第百九章　決着　609
第百十章　紫花粉症　635
第百十一章　パンダ　655
第百十二章　決裂　675
第百十三章　アンドロイドだけの地球　697

主な登場人物等

ホーリー・サーチ・ミリン

男の軍隊と女の軍隊に別れて戦っていたが、やがて結ばれる。ホーリーはフォルダーの古き良き友人。ミリンはホーリーとサーチの娘。

キャミ・ミト

キャミは地球連邦政府の大統領だったが、Ｒｖ２６にその地位を譲る。ミトはキャミの夫であり有能な軍師。

住職・リンメイ

僧侶である住職と考古学者であるリンメイは精神面と科学的見地でみんなを支援する。お互い引かれるものがあって結ばれる。

ノロ

ホーリーの古い友人。ブラックシャークを建造したり、地球と同じ環境に近いノロの惑星

を造った天才。

フォルダー
宇宙海賊でブラックシャークの艦長。ホーリーの古い友人であり、ノロの親友。

イリ
ブラックシャークの乗務員でノロをひたすら愛する。

Ｒｖ２６
アンドロイド。人間以上に人間的なアンドロイドに成長する。

ＭＹ２８・ＭＡ６０
ノロの惑星のアンドロイドで、アンドロイドでありながら夫婦である。やがて子供を授かる。

四貫目・お松
忍者の生き残りでキャミたちの護衛にあたる。

カーン・ツー
　カーンの息子だが、初めはキャミたちに敵対するが改心してＲｖ２６に仕える。

大僧正・最長
　六次元の生命体で双子の兄弟のような存在。

五右衛門
　戦闘用アンドロイドのリーダー。

当主
　限界城の主。五次元の生命体。

瞬示・真美（しゅんじ・まさみ）
　偶然な出来事から超能力を持つ。誕生日はもちろん生まれた時間まで同じ双子のような幼馴染みということになっているが、正体は六次元の生命体。

一太郎・花子

瞬示と真美の友人。無言通信という画期的なシステムを発明して人間同士の通信に革命をもたらす。システムの中枢である言語処理プログラムがコンピュータやアンドロイドに多大な影響を与える。

時間島

黄色の時間島と緑の時間島の二種類があって、共に時空間を自由に移動できる異次元の移動装置。その形は一定していない。

時空間移動装置

直径五メートルほどの球体で、小型のタイムマシン。

「」

通常の会話を表す。

【】

次元通信で行われる会話を表す。

〔〕

無言通信で行われる会話を表す。

第一編（男と女）のあらまし

摩周湖で突然起こった出来事で瞬示と真美は時間島で西暦の世界から永久の世界に時空間移動した。そこは完成第十二コロニーという星で男と女の戦闘に巻き込まれるが、時間島に包まれて摩周湖から少し離れた海辺の民宿に時空間移動する。

完成第十二コロニーでは女の軍隊と男の軍隊の将軍が休戦してふたりの時空間移動の分析を始める。女の軍隊はサーチを、男の軍隊はホーリーを摩周湖に派遣した。

ふたりは民宿で生命永遠保持手術が開発されたことを知ったあと永久の世界の自分たちの家の近くの御陵で巨大土偶と戦う。戦闘でできた洞窟で時間が揺れる時、震を体験する。その洞窟は巨大土偶の胎内で外に出るとそこは自分達の西暦の世界の御陵だった。家に向かうが真美は玄関でもうひとりの真美に出会うと突然消える。瞬示は御陵から摩周湖の上空に移動して時間島の中で真美と再会する。眼下の摩周湖でふたりの過去が再現されて時間島によって因果の清算が行われたあと黄金城に移動する。城主の明智光秀が忍者を乗せた大凧を時間島に向かわせるが呑みこまれる。

ふたりは民宿に戻ってケンタの車で摩周クレーターに向かう。そこでホーリーと再会するが、時間島に誘われるまま京都の古寺に時空間移動して黄金城から消えた忍者に出会うと月の生命

永遠保持機構でも忍者に遭遇する。一方ふたりを追いかけて古寺にホーリーとサーチが現れると続いて女の、更に男の追跡隊が現れる。瞬示達は時間島で前線第四コロニーに逃れるが、追跡隊の時空間移動装置がバリアーに体当たりを繰り返すので、時間島がコロニー全体を包み込んで月の近くに星ごと時空間移動する。

誰もいない月の生命永遠保持機構でサーチは女が起こしたクーデターの話をする。サーチは残されていたデータからリンメイが生体内生命永遠保持手術を開発したこと、その手術で生まれた胎児が遮光器土偶に変態したあと巨大土偶に成長して生命永遠保持センターを攻撃して壊滅させたこと、そしてミトの脱出作戦が成功して女たちが完成コロニーに逃れたことを知る。ホーリーとサーチは生命永遠保持手術の効果を失ったことを自覚する。

瞬示と真美がミトが戦った摩周クレーターで巨大土偶を発見するが溶けて消えたあとに時間島が現れる。男の軍隊と女の軍隊の戦うすべてのコロニーがある空間に時間島によって集められる。ふたりが「Ｃ・ＯＳ・Ｍ・ＯＳ」の意味を理解すると停戦を訴える。第四コロニーで停戦会議が開かれるが各コロニーの男と女は協力して負傷者の治療に当たっていた。

第二編（コンピュータ）のあらまし

月の生命永遠保持機構で死んだ胎児が摩周クレーターに向かった。そこでミトやホーリーたちが遮光器土偶と埴輪の鳥を発見するが時空間移動装置は緑の時間島に吸いこまれて宇宙戦艦も強制的に西暦の世界に時空間移動させられる。

無言通信システムを完成させた一太郎が摩周村診療所でこのシステムを狙う集団に襲われるが時空間移動装置が現れてミト達に救出される。しかし時空間移動装置は時間移動できなくなって永久の世界に戻れなくなるが、西暦の世界に幼い瞬示と真美がいることが分かってミト達は宇宙戦艦内で生命永遠保持手術に必要な設備を製造して手術を受ける。

瞬示と真美の緑の時間島が宇宙から御陵に到着する。ふたりが人間ではないことが判明したとき御陵に異変が起こる。時空間移動装置の時間移動機能が復活してミトたちは永久の世界に戻る。

先に永久の世界に戻った宇宙戦艦のコンピュータから前線第四コロニーの中央コンピュータが無言通信システムの言語処理プログラムを取りいれて巨大コンピュータに進化して明確な意思を持つとキャミに地球の明渡しを要求する。

ミトとホーリーの攻撃で巨大コンピュータが無限後退に陥ったのでキャミが攻撃を仕掛けた

とき、巨大コンピュータが無言通信システムの弱点を突いてノイズを流す。ホーリーとカーンの活躍で攻撃を防ぐがカーンは死亡しホーリーが重傷を負う。ホーリーはブラックシャークに救助されるが、ブラックシャークの中央コンピュータが巨大コンピュータとの勝負を申し出る。

宇宙の地平線上の鍵穴星にブラックシャークが宇宙戦艦とともに時空間移動するが、巨大コンピュータに宇宙戦艦が宇宙の地平線に追いつめられる。住職が論戦を仕掛けると巨大コンピュータが暴走する。その影響で鍵穴星付近の空間がねじれて宇宙の地平線から強力なエネルギーが押しよせる。

ブラックシャークの被害は軽微だったが、宇宙戦艦が壊滅的な被害を受ける。巨大コンピュータは大きさが分からないほどのニューロコンピュータに進化して自らを神と名乗ってブラックシャークの前に立ちふさがる。瞬示と真美の超能力を持ってしても倒せないニューロコンピュータをブラックシャークが最終兵器である多次元エコーで撃破する。

第三編（アンドロイド）のあらすじ

巨大コンピュータに勝利したフォルダーはノロの惑星の居酒屋でホーリーに語る。

あるコロニーの工場で強制労働させられていたノロの隠れ家でブラックシャークの建造や惑星の地球化という壮大な構想を聞いたフォルダーはブラックシャークの船長就任に同意する。隠れ家が見つかると時空間移動装置でノロの惑星へ逃げる。ブラックシャークが完成するとノロひとりで試運転に出かけるが次の日に中央コンピュータ室でノロの死体が発見される。

カーン・ツーがキャミを人質にすると瞬示と真美がキャミを救出してノロの惑星へ移動する。ふたりが冷凍保存されたノロの遺体に興味を持ったとき、地球では食料を巡って人間同士の殺し合いが始まる。地球に向かったフォルダーがＲｖ２６に地球の明渡しを迫るとＲｖ２６は人間の自立支援を開始する。

フォルダーとイリがノロの遺体を調べると人形だったのでノロの行動を洗い直す。

ブラックシャークの試運転で恐竜時代に時空間移動したノロは生物の進化を確認しながら時間移動していたが、西暦の世界に横滑りして瞬示と真美の誕生を目の当たりにしてから御陵近くの古本屋で幼い瞬示と真美と出会う。一変した店の外ではふたりと巨大土偶が戦っていたが、ノロは戦闘で生じた穴に突っ込むと摩周クレーターに出る。そこから移動する細長い時間島を

追うとすべての完成コロニーが集められた前線第四コロニーに到着する。そこで住職の「C・OS・M・OS」という話を盗み聞きする。

ブラックシャークが摩周湖で時空間移動装置を回収すると宇宙の地平線を挟んで六次元の世界と三次元の世界が共存する鍵穴星に向かう。その時空間移動装置を宇宙の地平線に投げこむと膨大なエネルギーが押し寄せてブラックシャークは強制的にリンメイが生体内生命永遠保持手術をする時代の月に時空間移動させられる。月の生命永遠保持機構に向かう光線を分析すると六次元の生命体が生体内生命永遠保持手術に介入したことが分かる。

地球では最長の説法でアンドロイドが子供を造ることに関心を持つが、ノロがその意義を説明するとアンドロイドのMY28とMA60は悲嘆する。ノロは惑星の家に戻ると地下室にいた瞬示と真美と最長からもらった本のことについて話し合う。

ノロと最長の対談が始まるとノロの想像力が最長を圧倒する。最長は自分たちの六次元の世界が巨大土偶に征服されつつあることを告白してノロを招待する。

地球ではアンドロイドに生殖機能を認める人間やアンドロイドと、それに反対する人間やアンドロイドとの間に戦いが始まるが、ブラックシャークはノロを追って六次元の世界へ次元移動すると瞬示と真美が緑の時間島でノロを救出する。

数々の事件が交錯して総括されるとノロ、イリ、瞬示、真美はブラックシャークでアンドロイドの地球に降り立つ。Rv26との再会後新たなノロの惑星を探す旅に出る。

第七十五章　百地三太夫（承前）

【時・空】永久０２９７年３月３０日　大統領府
永久紀元前４００年頃　伊賀の三太夫の屋敷

【人】キャミ　ミト　四貫目　お松　三太夫　Ｒｖ２６

＊＊＊

第三編第七十二章「次元移動」の冒頭部分の承前。すなわちＲｖ２６がミリン、ケンタ、四貫目、お松とともに地球からノロの惑星へ時空間移動装置で脱出する直前の大統領府での激戦の場面。

＊＊＊

「ここはワタシがなんとか食い止めます。大統領とミトは時空間移動装置で安全な時空間に避難してください」
Ｒｖ２６が再三再四、注進する。
「分かった」
ミトの返答にキャミが異議を唱えようとしたとき四貫目がひれ伏す。
「今は命を永らえるとき。我らがお守りします」

ミトがキャミを無視して四貫目に顔をあげるよう促す。
「今の地球に安全な場所はない」
「承知しております」
Ｒｖ２６が大声で促す。
「急いで！」
両脇にライフルレーザーを抱えたＲｖ２６が大統領執務室の窓際で孤軍奮闘する。至近距離で爆発音がすると頑丈なはずの大統領府が震える。
「逃亡先は我が故郷、伊賀の里でござる。もちろんこの時空の伊賀ではない」
「四貫目、任せます」
返答したのはキャミだった。
「早く！」
Ｒｖ２６がライフルレーザーのエネルギーカートリッジを交換しながら叫ぶ。そのとき、お松が大統領執務室に入ってくる。
「時空間移動装置を確保しました」
「いくぞ！」
お松に先導されてキャミとミトがドアに向かう。ミトの声がＲｖ２６に届く。
「すまない。Ｒｖ２６」

「ワタシは大丈夫！」
再びライフルレーザーを両脇に抱えるとＲｖ２６は窓際に戻って乱射する。一呼吸置いて振り返るが、すでにミトたちの姿はなかった。

永久紀元前４００年頃

＊＊＊

混乱の永久０２９７年から時空間移動したキャミはモニターに映るのどかな田園風景に緊張感をすべて解放する。操縦席のお松がそんなキャミに説明を始める。
「この時空は戦国時代と呼ばれたころ」
ミトもモニターを見つめながらお松に確認する。
「永久紀元前４００年頃の世界だな」
「私は歴史が苦手です。でも諸大名が覇権のために熾烈な戦争をしていた時代ということぐらいは承知してます」
「我らは諸大名の要請を受けて諜報活動をするのが仕事でした」
「忍者の任務のことですね」
「この時代の有力者は織田信長、明智光秀、豊臣秀吉です」
「それで」

「甲賀の忍者もそうですが、我らは伊賀忍者の頭領百地三太夫の命令で、ある者は信長に、ある者は光秀に、ある者は秀吉に仕えました」

キャミが驚きの表情を隠さずに四貫目に問いただす。

「なんと理不尽な」

「ごもっとも。しかし、最終的には一番強い者に仕えますが、これは我らが生きながらえる便法」

ミトがうなり声を上げて四貫目を見上げる。

「ひとりで何十人、いや何百人分の優れた能力を持つ忍者を育て上げるのは至難の業だ。伊賀の里の繁栄と存続を維持するにはそれ以外の方法はない。いわばリスク分散だな」

「さすが。ミト殿の深い読みにはいつもながら感服致します」

「話を続けてくれ」

「話は逸れますが、このころ、伊賀者でもない、甲賀者でもない、摩訶不思議な忍者が現れました」

「どういうこと」

すぐさまキャミが反応する。しかし、四貫目は不思議な忍者とは異なる話をする。

「信長が一番優勢だったので、三太夫は忍者を信長に集中しつつありましたが、部下の明智光秀の奇襲で信長が暗殺されたとき、甲賀の忍者が光秀の元に集まり加勢しました」

「それまで、伊賀も甲賀も分散して模様眺めしていた状況が一変したのか」
「そうです……しかも光秀は伊賀者を切って甲賀者だけを採用しました。当然三太夫は慌てました」
ミトが唸る。キャミは言葉を発することなく四貫目を促す。
「仕方なく、我らは秀吉に仕えることになりました。秀吉は過去に拘りません。そんな状況になったとき、皆さんもご存知のあの御陵に不思議なことが起こったのです」
珍しく四貫目が興奮を抑えることなく言葉を続ける。
「何が起こったのですか」
キャミが身を乗り出す。
「不思議な声が聞こえてきました」
「どんな」
「男と女の声で頭の中に直接飛びこんできました」
「まさか例の黙示的な言葉……『子供が生まれる前に死んでいく』『何万、何億、何兆と死んでいく』『永遠に生きるために死んでいく』『子供のいない永遠の世界』『男女のいない永遠の世界』では？」
「そのとおり、瞬示と真美の声でした。さて、それでは百地三太夫の屋敷に空間移動します。そして三太夫に匿ってくれるように交渉します」

ミトが両手を広げる。
「四貫目」
コントロールパネルに手を延ばしていたお松の手が止まる。
「すまないがもう一基、時空間移動装置をこの近辺に用立てしてくれないか」
「時空間移動装置を手に入れるのは非常に困難です」
「なんとかならないか」
「分かりました」
四貫目は目を閉じて大きく頷きながら念を押す。
「ただし、我らがここに時空間移動したことは誰にも漏らさないように」
キャミが四貫目を直視する。お松がコントロールパネルに触れるとその横のモニターに「すべてのデータ消去」という文字が現れる。そして懐から巻物を取り出すとコントロールパネルにかざす。
「それは何だ」
ミトが巻物を指差す。
「メモリーのようなものですが、私しか内部のデータを取り出せません。私が死ねばデータも消滅します」
「そうか」

ここでキャミが四貫目に頭を下げる。
「四貫目。苦労ばかり掛けてごめんなさい」
「何をおっしゃる。キャミ殿は我らの命の恩人。常に命を捨てる覚悟でおりまする。お松！全消去」
「了解」
お松が四貫目に目線で頷いてから操縦レバーを引く。

＊＊＊

真っ黒な時空間移動装置が百地三太夫の屋敷の庭に現れる。すぐさま黒装束の忍者が時空間移動装置を取りまく。その回転が停止したとき大柄な百地三太夫が外廊下に音もなく姿を見せる。そして驚くこともなく無言で忍者に鋭い眼光を向ける。忍者は背中の忍剣に手をかけたまま時空間移動装置から離れて中腰に、そしてヒザを突く。時空間移動装置のドアが跳ね上がると四貫目が現れる。三太夫は髪の毛がない段差のある頭を四貫目に向ける。
「頭領！訳あってこの方々を連れてきた。預かってはもらえぬか」
「いきなり何を言う！まず大坂城から大凧で舞い上がってきんとん雲に消えた後の永きに渡ってのすべてを報告せよ」
「承知しておりまする」

四貫目は落ち着いて三太夫の視線を追う。その先は四貫目の後ろにいるキャミとミトだった。
「頭領はこの黒い大玉やこの方々に驚かれぬようだが、なぜでござる」
「むろん。関ヶ原での四貫目の戦いぶりの報告を受けておる」
すぐに合点した四貫目が一方的に頭領を促す。
「まずはこの方々に部屋を」
三太夫は返事もせず四貫目に近づく。そして威厳だけを頼りに頷く。この時点で四貫目は三太夫より有利なポジションを手に入れた。キャミとミトが名前を告げて礼をすると丁重に屋敷内に案内される。四貫目と三太夫は玄関横の板の間に入ると腰を落とす。
「頭領、大坂城以来ですな」
この感慨ひとしおの一言で三太夫は四貫目に一目置く。そのとき、音もなく入ってきた「くノ一」がお茶を置いていく。先に口を付けたのは三太夫だった。
「明智の大凧作戦に加わったあと、お前は何をしていた」
四貫目がしたりと視線を下げてから三太夫を見上げる。
「月に降り立ちました」
「月に？」
「あの月にも人がおりまする」
「気でも狂ったか！」

「この四貫目を信ずるか否かは頭領のお気持ち次第」

報告で聞いてはいたが、時空間移動装置を目の当たりにした頭領の気迫は弱い。しかし、四貫目は強引に攻めようとはしない。あくまでも四貫目は三太夫を頭領として崇める。

「我らの時代より遙か七百年も先の時代の話。頭領ほどの者でもにわかに信じがたい事実でございまする」

さすがの三太夫の呼吸が乱れ始める。

「あの黒くて丸い物。人はこの中に入るとこの伊賀から京へ、あるいは大坂へ、そして過去の世界はおろか先の世界へも自由に移動できまする」

大声で否定しようという気持ちを辛うじて抑えてから三太夫はか細い声を上げる。

「それはどのような忍法だ？」

四貫目は三太夫に敬意を払うことを忘れない。なぜなら立場が逆だったら自分はとっくの昔に平常心を失っていただろうと思ったからだ。

「科学という忍法です」

「カガク？」

「その時代では忍者はおりませぬ。すべての人が科学という忍法を体得しておりまする」

三太夫の質問を待つことなく四貫目は自らの体験を披露する。もちろん実体験に基づいているから口調は滑らかだ。さすがの三太夫も話の内容はともかく四貫目に猜疑心を持つことはな

かった。しかし、四貫目は永遠の生命を獲得できる生命永遠保持手術のことは一切口にしなかった。四貫目の茶はすでに冷え切っていた。

「そうならば、あの方々は要人じゃ。しかし、あの大きな女は毛唐か？」

「もっと遠方の人間です。我らが命の恩人と慕う方です」

「お前とお松だけが生き残ったのか。他の者たちもこの伊賀では屈指の使い手だった」

「面目ない」

「電磁忍剣とやらを見せてくれ」

「ここでは危のうございまする」

四貫目が傍らの忍剣を手にして立ち上がると揃って庭に出る。

「あの木を切ってもよろしまするか？」

三太夫がその大木を見て驚くと、ただ頷く。四貫目が腰に忍剣を差すとすぐさま引き抜き一振りする。一瞬強烈な光が流れると同時に大木の根本付近が斜めにずれて大きな音をたてて倒れる。すぐさま屋敷から忍者が飛び出してくる。

「狼狽えるな」

そういう三太夫が一番取り乱していた。しかし、木の葉が乱舞する中で四貫目は忍剣を鞘に収めてひれ伏す。

「お騒がせ致した」

少し遅れてキャミとミトも屋敷から飛び出してきて倒れた大木と四貫目そして三太夫を順番に見つめる。

「心配には及びませぬ」

四貫目が片ヒザを突いた身体を少しだけキャミにずらして三太夫を正面に見すえる。

「この方々を丁重にお預かりくださりますよう、お願い申しあげまする。それではご免！」

四貫目は立ち上がるとお松が待つ時空間移動装置に駆けこむ。ドアが閉まると回転が始まり黒からグレーにそして目映い白に変わると消滅する。

＊＊＊

しかし、永久０２９７年の地球に戻って事態が落ち着いたときを見計らってキャミとミトを伊賀から連れ戻そうと考えていた四貫目に意外な事件が降りかかる。それは激しい戦闘でＲｖ２６が負傷し、ミリンやケンタに危機が迫ったことだった。四貫目は伊賀には戻らずＲｖ２６、お松、ミリン、ケンタ、と共にノロの惑星に時空間移動装置で地球を脱出した。そしてＲｖ２６の大手術が行われた。

第三編は六次元の世界に向かったノロやブラックシャークの話で終了した。次の章では手術後のＲｖ２６を中心に展開する。

第七十六章　ＰＣ９８２１（承前）

【時】永久０２９７年３月３１日

【空】ノロの惑星

【人】フォルダー　イリ　Ｒｖ２６　ＭＡ６０

＊＊＊

第三編第七二章「次元移動」の承前。ノロの惑星でＲｖ２６の大手術が終わった直後の状況。

＊＊＊

「あとは工場長とＭＡ６０にすべてを任せる」

「分かったわ」

イリはフォルダーに微笑み返すとそのままの笑顔でＭＡ６０を見つめる。

「あなたは優秀な医者だわ。Ｒｖ２６のことは工場長じゃなくあなたに任せます」

「ワタシにはイリやフォルダーの考えが理解できません。手術は終了しましたが、Ｒｖ２６の体型に大きな変化が起こっています。マザーボードを入れ替えたということは、何を意味するのですか」

イリはただふーと息を吐いてからＭＡ６０の肩を軽く叩く。
「あなたは立派な人間だわ。姿はもちろんのこと言葉、いえ、思考そのものも人間、いえ、人間以上だわ」
「そんなことはありません。今、イリが言おうとしていること、フォルダーの考えていること、そのニュアンスが理解できません」
「イリ。行くぞ」
フォルダーの催促にイリは意を決したように背筋を伸ばして背中をＭＡ６０に向けるとフォルダーと並んでアンドロイド整備工場の出口に向かう。
「あなたはいずれアンドロイドの、そして人間の名医になるわ」
「教えてください。ワタシはいったい何をすればいいのですか」
「フォルダーと私はノロを捜しにゆきます。そのノロがあなた方アンドロイドに希望を託しました」
「ノロ……。アンドロイドにとって、神様……」
ＭＡ６０の目から涙があふれる。
「ノロの教えがあったから、ワタシたちは自分の存在を意識できるようになりました。それにＭＹ２８とワタシはノロに特別な身体をいただいて新たな一歩を踏みだそうとしています」
ＭＡ６０が目頭を押さえて顔をあげたその視界にイリとフォルダーの後ろ姿はなかった。

「イリ！」

切ない呼び声を発したあとＭＡ６０は輝いたトーンに変える。

「分かりました。ノロが戻るまで頑張ります」

ＭＡ６０の決意に応えるように大きな震動が伝わってくる。ブラックシャークがノロの惑星から未知の世界に向かったのだ。

ＭＡ６０は手術室に向かう。ドアをくぐり抜けるとイリがよくしたように背筋をまっすぐに伸ばしてアンドロイド専用の手術台に向かう。白衣に身を包んだアンドロイドのスタッフに向かって毅然とした声をあげる。

「術後の確認をします。あれ……Ｒｖ２６は？」

「それが……」

「どこへ行ったの」

目の前の手術台にはとても小柄な、しかしそれなりに太めのアンドロイドが仰向けに寝ている。

「ノロ？」

まるでノロが眠っているように横たわっている。

「冗談はやめなさい。誰がノロの人形をこんなところに……」

スタッフのひとりがＭＡ６０の言葉を遮る。

「ノロではありません。Ｒｖ２６です」

真剣な視線にＭＡ６０は身を引くとスタッフとＲｖ２６を交互に見つめる。やがて視線は手術台に固定される。丸い光の輪がＲｖ２６の頭部で輝いている。かなり縮小したＲｖ２６の身体がピクッとケイレンするとあちこちから白い蒸気があがる。

「これは？」

ＭＡ６０の表情がキッと引き締まったあと、何ともいえない笑顔に変わる。

「消毒液の準備を」

そばにいたアンドロイドが高純度の鉱油を入れた容器を用意すると、ＭＡ６０が両手をつける。

＊＊＊

スタッフに支えられてＲｖ２６は手術台から降りながら自分の身体がずいぶん軽くなったような感覚に首をひねる。慎重に歩き出すと歩幅に違和感を覚える。微笑むＭＡ６０との距離がドンドン離れていく。しかもＭＡ６０の目線を高く感じる。

「ワタシの身体はいったいどうなった！」

ＭＡ６０がくるりと振り返るとＲｖ２６が追いつくのを待つ。腕を挙げたり首を傾げてはため息をつくＲｖ２６を黙って見下げる。再びＲｖ２６が大声を出す。

「誰がワタシの身体を変えたのだ！」
「ワタシです」
Ｒｖ２６はすぐ横にいるＭＡ６０に気付かないというより背の高いＭＡ６０の顔が視界に入っていない。
「ワタシです」
声の主を捜しながら、更に大きな声を出す。
「ＭＡ６０！身長も体重も三分の一になっている！」
「ダイエットに成功しました」
「ダイエット？でもメタボ体型になっているぞ。いったい……」
Ｒｖ２６がＭＡ６０に連れられて手術室奥の姿見の鏡の前に立つとがく然とする。
「それはその身体の設計者に尋ねるべき質問です」
「設計者？……それはひょっとして……」
Ｒｖ２６の言葉を遮ってＭＡ６０が頷く。
「恐らく、そうでしょう。でも素晴らしいわ」
たじろいだもののさすがＲｖ２６だ。すぐに適切な言葉を探しだす。
「難しい言葉だが、この姿は『不遜』ではないかと思う」
一方、ＭＡ６０はさっぱりと返答する。

「いいえ『名誉』だと思います。ご不満なら元のボロボロの器に戻しましょうか？でも今の身体は大変お似合いだわ」

やっとＲｖ２６が鏡の中にＭＡ６０を見つけて反問する。

「その意図は？」

ＭＡ６０が首を横に振る。仕方なくＲｖ２６は言葉を閉じる。アンドロイド同士の会話の継続にこれ以上の必要性を見出せなかったからだ。年齢を重ねたＲｖ２６の思考はまるで老獪な人間に近かった。ふたりは手術台がある場所に戻り始める

「ワタシの身体に改造命令を出したのは誰だ」

冷静さを取り戻したＲｖ２６がていねいにＭＡ６０に尋ねる。

「フォルダーです。そしてワタシがあなたを改造しました。でもその身体はフォルダーの設計ではありません」

「それはすでに承知している」

「そうでしたね。原因はノロが造ったＰＣ９８２１というチップセットです」

「ＰＣ９８２１？」

Ｒｖ２６はＭＡ６０に告げることなく自らの記憶メモリーから最後の記録を取り出して地球から脱出したときの状況を確認する。その記録映像が手術室天井下の浮遊透過スクリーンに映しだされるがＭＡ６０は無視する。

「Ｒｖ２６、もう一度手術台に戻って安静にしてください」
Ｒｖ２６は手術台に上ろうとするが高すぎて上れない。足をバタバタさせる姿を見てＭＡ６０が思わず声をあげて笑ってしまう。周りのスタッフもつられて笑い出す。
「手伝ってあげて」
スタッフがＲｖ２６の両足を持ち上げると手術台に寝かせる。
「Ｒｖ２６、情報を転送します。準備は？」
「ＯＫ」
「すべてのプログラムを停止してＣＰＵを一旦リセットしてください」
「なぜ？」
仰向きになったＲｖ２６は首だけを安静のポジションにせずにＭＡ６０を睨む。
「データの量はしれていますが、その内容が重いのです。なんならワタシがリセットしましょうか」
諦めたＲｖ２６は大の字になる。自らリセットしたらしくＲｖ２６の全身がだらんとする。やがて力の抜けた指先がまっすぐに伸びると手首、次に腕そして肩に力が入る。そして全身がシャキッとする。Ｒｖ２６が完全に再起動したことを確かめるとＭＡ６０の両耳が赤く輝く。ＭＡ６０自らＲｖ２６にデータを直送する。Ｒｖ２６の身体が電気ショックを受けたように激しくケイレンする。

「ウウッ、ウウ！」
「ここはなんとか堪えて。Ｒｖ２６」
頑丈なはずの手術台のきしむ音が続いたあとＲｖ２６は再び動かなくなる。ＭＡ６０はＲｖ２６の右手首を軽く掴む。その姿は人間の脈を測る医師のようにも見える。しばらくするとＲｖ２６の左手が逆にＭＡ６０の手首を握る。
「よく理解できた。安心してくれ」
Ｒｖ２６は両耳を赤く輝かしながら、初めてＭＡ６０に微笑む。
「ダイエットの程度に不満は残るが、この新しい身体をなんとか受け入れるよう努力する」
ＭＡ６０は頷いた後、スタッフに命令する。
「時空間移動装置格納庫室に連絡して地球に移動する準備をするよう伝えなさい」
「地球へ？」
手術台から飛び下りたＲｖ２６がＭＡ６０を見上げる。
「ホーリーたちがホワイトシャークで地球に向かっています。ワタシと一緒にホワイトシャークへ行きましょう」
「地球！そうだった。今、地球は大変なことになっている」
「フォルダーはホーリーをホワイトシャークの船長に任命して地球に向かわせました」
「ブラックシャークは？」

「ノロを捜すために六次元の世界に出発しました」
Ｒｖ２６が素直に驚く。
「ワタシが改造されている間に起こったデータを！」
急にＭＡ６０の両耳が赤く輝いて激しく点滅するとそれに呼応するようにＲｖ２６の両耳も赤く点滅する。ＭＡ６０からデータを分析するとＲｖ２６が大きく頷く。
「これ以上のデータはないのか？」
「ありません」
「もう少し早く改造が終わっていたら、ブラックシャークでワタシも六次元の世界に向かっていたのか」
頷くＭＡ６０にＲｖ２６が無念そうな表情を浮かべる。
「フォルダーも残念がっていました」
「とにかく、ホワイトシャークへ行かなければならない」
ＭＡ６０がＲｖ２６に相づちを打つ。
「船長がホーリーなら、なおさらでしょ？」
Ｒｖ２６が背伸びをしてなんとかＭＡ６０の手を握る。
「ワタシを復活させていただいてありがとう。でも、なぜワタシの身体をあの……」
ＭＡ６０がＲｖ２６の言葉を制して、逆にＲｖ２６の手首を強く握ると半ば引きずるように

時空間移動装置に向かう。

「急がなければ」

第七十七章　サーチ船長（承前）

第七十七章　サーチ船長（承前）

【時】永久０２９７年４月１日

【空】地球上空（ホワイトシャーク）

【人】ホーリー　サーチ　ミリン　ケンタ　住職
リンメイ　四貫目　お松　ＭＹ２８

＊＊＊

同じく第三編第七二章「次元移動」の承前。フォルダーがホーリーをホワイトシャークの船長に任命した。そしてサーチ、住職、四貫目、ミリンたちがノロの惑星から混乱の地球に向かった直後の出来事。

＊＊＊

月の近くにホワイトシャークが現れる。

「ケンタとミリンの報告どおり内戦状態になっているとすれば、厄介なことだ。どちらの肩を持つ訳にもいかない」

ホーリーの言葉にサーチが重ねる。
「人間を応援する訳にもいかないし、かといってアンドロイドを応援する訳にもいかないわね」
「それに本船にはブラックシャークのような中央コンピュータが搭載されていない」
そう言ってからホーリーが少し間を置く。そして珍しく力のない声を発する。
「サーチ」
「どうしたの」
サーチが心配そうにホーリーを見つめる。
「俺は……俺は副船長や副司令官なら力を発揮できるが、トップになるとダメなんだ」
「こんな重大な局面で何てことを言うの！」
いきなりサーチの平手がホーリーの顔面を捉える。
「お母さん！」
ミリンが割って入る。ハッとしてホーリーは頬に手を当てながらミリンを見つめるとサーチも掌を引いてミリンを見つめる。
「ごめんなさい」
頭を下げることなく弱々しく謝るサーチをホーリーが引きよせる。
「サーチ」
ホーリーは真剣な表情でサーチを力一杯抱きしめて耳元で囁く。

「サーチこそが船長にふさわしい」
「何を企んでいるの」
「よく聞いてくれ」
ホーリーはサーチから身体を離すと一気にしゃべる。
「月の生命永遠保持機構でリンメイの遮光器土偶に関する研究データを追跡したときのこと覚えているか（第一編第二十一章「無言の胎児」）」
「ええ」
「俺は助手に徹することでずいぶん役に立っただろ？」
「確かにそうだったわ」
「カーンと宇宙戦艦で巨大コンピュータと戦ったときもそうだった（第二編第四十四章「突破」）」
「艦長カーンを全面的に支えて作戦を成功させたわね」
サーチは目を閉じてホーリーの言葉を反すうすると抱き返す。囁くのではなくはっきりとした声を出す。
「あなたって本当は優しい人なのね！」
ホーリーはサーチの意外な言葉に驚く。そのときケンタの制止を無視して再びミリンが割り込む。

「お母さんはお父さんのことを、独りよがりで勝手なことばかりする男だと言ってたのに、おかしいわ」

サーチが驚いてホーリーから離れるとミリンに視線を移すが、苦笑するホーリーに視線を戻す。

――この男は本当に優しい

サーチは今まで「なぜ気が付かなかったのか」と虚ろになる。男と女の休戦中に初めてホーリーと出会ってテントの中で一緒にコーヒーを飲んだこと（第一編第三章「休戦」）を鮮明に思い出す。

「サーチ」

ホーリーの呼び声で、サーチは心地のいい夢から覚めたように手の甲で目頭を拭う。

「私に……」

サーチは強制的に自分自身を現実に引き戻す。

「私に……船長を？」

同じ言葉を繰り返す。そのときホーリーがＭＹ２８に命令する。

「月の北極に移動しろ」

「了解！」

ＭＹ２８の返事が艦橋に響く。

「今から、サーチがホワイトシャークの船長だ」
ＭＹ２８や周りの海賊やアンドロイドが頷くが、天井から異議を唱える声がする。
「フォルダーの許可を得なければなりません」
驚いてホーリーが顔をあげる。
「堅いことを言うな。サーチは俺の妻だ」
「妻という階級はワタシにはインプットされていません。柔軟に思考しろと言われても、それはワタシの思考能力を超えています」
「船長の俺がこの船の最高責任者なんだろ？」
「もちろんです」
「それじゃ、命令を聞け」
「それは……」
中央コンピュータが沈黙する。
「お父さん」
たまりかねてミリンがサーチを横目で見つめながらホーリーに近づく。当のサーチはすでに自分が船長になることに戸惑いを感じていない。なぜなら、これから起こる困難に対して自分が立ち向かうには夫であるホーリーが最も頼りになるということ以上に、ことがアンドロイドの出産の是非で地球上の人間とアンドロイドが混じり合って戦争している現状に対するホーリ

ーの考え方が当を得ていると確信したからだ。
「ミリン、これからのこと、俺の考えにかかっているんだ」
そしてホーリーはミリンからサーチに視線を移す。
「そうだろ？サーチ」
ホーリーの半ば強制的な言葉にサーチがにこやかに応える。
「あなたの考えていること、十分理解したわ。でも月へ行って生命永遠保持手術を行った施設に行く暇はないわ。中央コンピュータ！船長命令です。すぐ地球に向かいなさい」
ミリンがひっくり返るように驚く。
「やっと分かってくれたか」
ホーリーにサーチが頷いたとき、艦橋に背の低い男が入ってくる。誰もがその姿を見て驚く。すぐミリンが反応する。
「ノロ！」
その男は立ち止まって丸いメガネの縁に手を当てながら大きな口を横真一文字に広げる。ミリンがその男に向かって走り出すとその男を強く抱きしめる。
「わあ！やめてください」
「ノロ！」
「ワタシはノロではありせん」

「ミリン！それはノロじゃないわ」
その男の弁解に応じたのはサーチだった。
『それ』って？」
「人間でもアンドロイドでもない。中央コンピュータの端末よ」
ミリンが驚いて腕の力を抜く。やっとミリンから解放されたノロそっくりの端末機が胸を張って自己紹介を始める。
「サーチ、いえ船長の指摘どおりワタシはホワイトシャークの中央コンピュータの端末機です。勘違いしてもらって困るのはワタシがノロに似ているのではなく、ノロがワタシに似ているのです」
「えー！」
ホーリー以外の全員が驚く。
「ワタシはブラックシャークの中央コンピュータの端末機と違って下戸です」
今度はホーリーも一緒になって誰もあ然として声も出せない。しかし、ホーリーはブラックシャークの中央コンピュータ、正確に言えば端末機と酒を酌み交わした経験から、今後に備えて心の準備が必要だと考えてノロそっくりのホワイトシャークの端末機の行動を読みとる。
――ホワイトシャークの中央コンピュータもその端末機もただ者じゃないな
そのホーリーの気持ちが通じたのか、サーチが問いかける。

「チューちゃん、ホワイトシャークの中央コンピュータも量子コンピュータなの？」
「もちろん！」
　ミリンがチューちゃんに尋ねる。
「チューちゃんはどんな仕事をしているの？」
「その前に『チューちゃん』と呼ぶのはやめてください」
「どうして？」
「その名前はブラックシャークの中央コンピュータの、正確に言うとイリが付けた中央コンピュータのあだ名です」
「だったら名乗りなさい」
　ミリンの言葉にチューちゃんがためらいの表情を見せる。
「名前はありません。でもワタシには型番があります」
「型番？」
「えーと、なんだっけ。……思い出しました。確か……です」
「えっ、何て言ったの？もう一度言って。ゆっくりと」
　ミリンが胸のポケットから電子メモを取り出すと録音する体勢をとる。
「『ＣＨＵＣＨＡＮ２ＧＯＵ』です」
「チューちゃん２号？」

「いえ、違います。『C、H、U、C、H、A、N、2、G、O、U』です」
「やっぱり、チューちゃん2号だわ」
「そのように読まれると屈辱を感じます」
「そうかなあ。名誉なことじゃないか」
ホーリーが慰めるでもなく真顔でチューちゃんを見つめる。
「チューちゃんなんて軽すぎます」
「いいじゃないの。愛称よ。それに……」
ミリンが電子メモを見ながら言葉を繋ぐ。
「……名前を呼ぶときにいちいち『ＣＨＵＣＨＡＮ２ＧＯＵ』なんて言えないわ」
大きな笑い声が艦橋に広がる。
「チューちゃんでいいじゃないか」
ホーリーがなだめるとサーチが立ち上がって宣言する。
「皆さん、ミリンやホーリーの言うように『チューちゃん』でいいじゃないの。どう？」
誰もが声を合わせて合唱する。
「賛成！」
「そんな。これは多数決の横暴です」
「船長命令よ」

サーチの言葉にホーリーも立ち上がると大声をあげる。
「決まり！」

＊＊＊

月から地球に進路を変更したホワイトシャークの艦橋でサーチが次の行動を模索するため、船長席で目を閉じて思案する。まぶたの中で地球を想像しながらホーリーが海賊やアンドロイドたちに尋ねる。
「ブラックシャークとの違いは中央コンピュータ以外にほかには？」
操縦席にいるＭＹ２８が応える。
「多次元エコーが装備されていません」
「そうだった。人間とアンドロイドの戦争なら多次元エコーでアンドロイドだけを攻撃できるんだが」
サーチが目を開ける。
「それは、人間に大義があって、アンドロイドに大義がない場合だわ」
「そうするとホワイトシャークに多次元エコーがあってもなくても、どうでもいいことになる」
ホーリーの言葉を受けてサーチが立ち上がると号令する。
「キャミとミトを探します。捜索の準備に取りかかりなさい」

ホワイトシャークの中央コンピュータが地球上のすべての電波を補足する。同じくケンタとミリンが手分けして無言通信でキャミとミトを呼び続ける。しかし、反応はない。
「地球からの攻撃は？」
「ありません」
「高感度センサーで大統領府の様子を調べてみては？」
副船長のホーリーが船長サーチに進言する。
「すぐ実行しなさい」
メイン浮遊透過スクリーンに大統領府の無残な姿が映しだされる。サーチもホーリーも誰もが息を止める。大統領府が激しい戦闘に巻き込まれたのは明らかだ。しかし今は静寂の世界に包まれている。
「ほかの主要施設の現状も把握しておいた方がいいのでは」
ホーリーの言葉が終わらないうちに、大統領府の周りの施設が次々とメイン浮遊透過スクリーンに映しだされる。数多くの死体が全員の視線に閉鎖を求める。
「激しい戦闘があったんだわ。でも今は静かだわ」
ただひとりミリンがメイン浮遊透過スクリーンを直視して明るい声を出す。
「和解したのなら、大歓迎だわ」
サーチはミリンの前向きな言葉で残酷な画面に悲しみを消すためのピリオドを打ちこむと次

にすべきことを考える。
「しかし、人間もアンドロイドもどこにいるんだ？」
ホーリーの疑問を無視してサーチの命令が飛ぶ。
「命令を忘れたの！キャミを探しなさい」
「でも、うーん、そうだ！壮大寺上空に移動しよう」
サーチはホーリーの判断に感謝しながら艦橋全体の反応を待つ。
「了解！」

＊＊＊

ホワイトシャークが壮大寺の遙か上空に到達する。
「生体反応は？」
「ありません」
「壮大寺をメイン浮遊透過スクリーンに投影しろ」
ホーリーがサーチの代わりに命令する。メイン浮遊透過スクリーンを見て住職が悲痛な声をあげる。
「何！」
住職の全身がガクガクと震える。リンメイはメイン浮遊透過スクリーンから顔を背ける。サ

ーチもホーリーもミリンもケンタも五郎も……誰も言葉を発することができない。
メイン浮遊透過スクリーンには焼け焦げた数えきれない多数の柱が映っている。そしてあちらこちらから灰色の煙が立ち込め、むなしい白い煙が空に向かって伸びている。
「ミリン、あれからどれくらいの時間が経ったの？」
「あれから？」
「Ｒｖ２６と一緒に地球を脱出してから、どれくらいの時間が……」
サーチが尋ね直す。
「えーと」
ミリンが腕時計を見ながら必死で思い出そうとする。ミリンに代わってケンタが答える。
「一日も経っていない」
「チューちゃん、壮大寺が火災を起こしてからどれくらいの時間が経ったのか調べて」
ホーリーはサーチの機敏な対応に感心する。
「十時間前と言うのが正しいなら、その半日前ぐらいに火災が発生したから、ほぼ一日前になるわ。そうすると二十二時間前だわ」
サーチが頼もしそうにミリンを見つめる。
「壮大寺の出火は約二十二時間前です。消火活動の痕跡がまったくありません」
「壮大寺は木造だから、一瞬のうちに火が回ったのか。焼死者は？」

ホーリーがメイン浮遊透過スクリーンを注意深く見つめる。
「いません」
サーチがフーッと息を吐き出してから命令する。
「壮大寺の周辺を投影しなさい」
壮大寺から下る参道の映像に変わる。急な坂道の参道の両側には数えきれないほどの土産物屋があるが、延焼を免れて無事だ。しかし、人影はまったくない。
「わずか一日足らずの間に何が起こったのかしら」
ミリンが首を傾げるとケンタも同調する。
「生体反応はないし、キャミやミトからの無言通信の返信もない」
ホーリーがあきらめたような言葉をサーチに投げる。しかし、サーチはホーリーの言葉をがっちりと止める。
「いつから弱虫になったの！」
ホーリーが驚いてサーチを見つめる。サーチは言葉の勢いとはまったく正反対の落胆の表情を浮かべるとうつむく。
「どうした？」
サーチの目から涙がこぼれる。
「母さん！」

ミリンもサーチをじっと見つめる。サーチはすぐさま首を振って顔をあげる。
「至急、人間を捜すのよ！中央コンピュータ！人間を捜しなさい」
「生体反応の精度を上げるのでしたら高度を下げる必要があります」
「任せます。あらゆる手段を使って人間を探しなさい」
「サーチ」
ホーリーがサーチに詰めよる。
「副船長」
サーチはあえてホーリーを「副船長」と呼ぶ。
「人間は人間を殺します」
サーチは涙を流しながらも冷静に言葉を続ける。
「でも、アンドロイドはアンドロイドを殺さない」
ホーリーは一瞬たじろくがすぐさま反論する。
「Ｒｖ２６はアンドロイドに攻撃されてひどい傷を負ったぞ」
「でも殺されなかったわ」
「手加減したとでも」
「そこまでは分からない。でも、人間が人間を数えきれないほど殺したことは紛れもない事実だけれど、本来アンドロイドがアンドロイドを殺すということはないはず」

「サーチ。いや船長！何を言いたい？」
「アンドロイドは人間も動物も殺さなかった。でも、人間が殺すことを教えてしまった」
ホーリーが目を閉じて思い出したように言葉を発する。
「確かに！とにかくキャミとミトを探そう」
「そうだわ。でもどこにいるのかしら。誰か心当たりは？」
ここで初めて四貫目が表情を引き締めて低い声で発言する。
「これだけ探しても見つからないのであれば、まだ伊賀にいるのかもしれません」
お松が驚いて四貫目を見つめる。しかし、口を開いたのはサーチだった。
「伊賀？四貫目！どういうこと！説明しなさい」
続くホーリーの言葉もサーチと似たり寄ったりだ。
「船長！落ち着いてください。四貫目！説明しろ」
ホーリーより先に興奮を押さえることに成功したサーチがなんとか一言発する。
「ひょっとして伊賀は四貫目のふるさと？」
サーチは急に存在感が増した四貫目をじっと見つめる。
「この困難な事件が起こって大統領府付近で起きた激しい戦闘に巻き込まれたとき、我らはキャミとミトとともに伊賀の里に時空間移動しました」
応えたのはお松だった。

「時空間移動！ということは？」
ホーリーがお松に詰めよるとサーチが促す。
「その伊賀の里の時空間座標は？」
「あれを」
四貫目がお松を促すと、お松が懐から巻物を取り出す。四貫目がその巻物を口に咥えて両手を合わせるとすべての指を絡ませてから目を閉じる。そして絡んだ指を解きほごすと左手人差し指で空中に「忍」の字を切る。すぐさまメイン浮遊透過スクリーンに複雑な数字が現れる。
「これは！これは時空間座標です」
ＭＹ２８が解説すると中央コンピュータが肯定する。
「これは永久紀元前４００年頃の伊賀の里と呼ばれる時空間座標を示しています」
「ＭＹ２８、この時空間へ移動しなさい」
「待ってください」
お松が大きな声をあげるとサーチがけげんそうに見つめる。
「我らは確かにキャミ様をお連れしましたが、我らの元頭領百地三太夫が果たして約束を守っているのか、心配です」
「こんな重大なことを、なぜもっと早く報告しなかったの！」
サーチが再び興奮する。

「船長！冷静に！」
ホーリーがサーチを制する。
「何か事情があってのことに違いない」
「四貫目、お松、説明しなさい」
サーチが厳しい視線を四貫目とお松に向ける。
「それはミトから完全な口封じを依頼されたため」
「四貫目！俺たちは仲間じゃないか！」
ホーリーにサーチが追従する。
「しかもあらゆる苦楽を共にした戦友だわ」
「まこと、そのとおりでござる。しかし、情報は意外なところで漏れるもの」
四貫目とお松がひれ伏すと天井から声がする。
「機密は気密性が高いほど機密性が高まります」
全員、首を傾げながら「ハー？」という声を上げる。

第七十七章　サーチ船長（承前）

第七十八章　合流

【時】永久０２９７年４月２日

【空】ホワイトシャーク

【人】ホーリー　サーチ　Ｒｖ２６　ＭＡ６０　ＭＹ２８
四貫目　お松　住職　リンメイ　ミリン　ケンタ

＊＊＊

「そうだったのか」
ひれ伏していた四貫目とお松がサーチとホーリーに少しだけ額を上げる。
「申し訳ありません」
再びふたりが深々と頭を下げる。
「キャミに対する忠義心、よく分かりました。それに軽々しく誰にでも言うことでないことも」
そのとき警報が鳴るが、すぐ切れる。
「中央コンピュータ！どうした」
ホーリーが怒鳴る。
「時空間移動装置格納室へ行けば分かります。その適任者はＭＹ２８です」

「侵入者か？」
「侵入者ではありません。ホワイトシャークの時空間座標を正確に知っている者の仕業です。つまり、仲間です」
「あまり驚かさないで」
「正体がしれない者の侵入は絶対に阻止しますから、安心してください」
サーチが船長席に座ったままＭＹ２８に指示する。
「時空間移動装置格納室に行って確認しなさい」
ＭＹ２８が頷くと艦橋を出る。

＊＊＊

時空間移動装置からＭＡ６０が降り立つとＭＹ２８が周囲の目をはばかることなくしっかり抱きしめて接吻する。そのとき「トン」という音がする。Ｒｖ２６が飛び降りたが気付く者はいない。Ｒｖ２６が「ゴホン」と咳払いするとＭＹ２８が驚いてＭＡ６０を乱暴に突き放す。
「ノロ！」
突きとばされたＭＡ６０がＭＹ２８に近づいて左右に首を大きく振る。
「Ｒｖ２６です」
「えー！」

ＭＡ６０の耳がほんの一瞬赤く輝くと同時にＭＹ２８の耳が反応する。
「そうだったのか」
ＭＹ２８は納得するとＲｖ２６に右手を下ろして握手を求める。Ｒｖ２６は背伸びしてＭＹ２８の手を握る。
「艦橋に案内します。サーチ船長がお待ちかねです」
「サーチ？船長はホーリーではないのか」
「ホーリーは副船長です」
「そうか。ホーリーに一番ふさわしいポジションだ」
今度はＭＹ２８の耳が赤く輝く。Ｒｖ２６の耳が反応すると歩き始めるＭＹ２８の背中に声をかける。
「今のワタシの任務がよく理解できた。ＭＹ２８、頼みがある」
ＭＹ２８が振り向くとかなり距離を置いてＲｖ２６が短い脚を忙しく回転させている。
「もう少しゆっくりと歩いてくれないか」
ゆっくりとした歩調に変えたＭＹ２８がまっすぐ前を向いて呟く。
「ワタシが説明する前に全員Ｒｖ２６を見て大混乱するだろう。どうすればいいのか」
そのとき、通路の天井から中央コンピュータの声がする。
「見物（みもの）ですね」

Ｒｖ２６はもちろんのことＭＹ２８とＭＡ６０が天井を見上げる。
「誰がこんな悪い冗談を仕組んだ？」
「多分、フォルダーでしょう」
中央コンピュータの返答にＭＡ６０が場違いの声をあげて否定する。
「決して冗談でやったのではないわ」

＊＊＊

艦橋のドアが開く。
「英雄のご登場だ」
すでにＲｖ２６の到着情報が艦橋に知らされている中、ホーリーがドアに近づきながら叫ぶ。サーチも船長席を蹴ってあとを追う。ＭＹ２８とＭＡ６０が入ってくるがＭＹ２８以上に大柄なはずのＲｖ２６の姿がない。
「Ｒｖ２６は？」
ＭＹ２８もＭＡ６０も無言のままホーリーとサーチに近づく。やっとホーリーがその後ろにいる小柄な人物に気付いて声をかける。
「チューちゃん。Ｒｖ２６は？」
その人物ではなく、天井から中央コンピュータの声がする。

「船長、並びに副船長、驚かないでください。そこにいるのは『チューちゃん』ではありません。Ｒｖ２６です」
「えー！」
艦橋に驚きの声が反響する。その大音声に驚いたのかＲｖ２６がつまずいて転んでしまう。ミリンがサーチ、ホーリー、ＭＹ２８、ＭＡ６０の間をすり抜けてＲｖ２６に駆けよる。
「ノロ！」
なんとか立ち上がろうとするＲｖ２６に手を貸す。
「ありがとう」
「大丈夫？」
そばまで来たケンタと一緒にミリンがＲｖ２６をゆっくりと抱き起こす。
「ありがとう、ミリン、ケンタ」
Ｒｖ２６が頭を下げると再びミリンが叫ぶ。
「ノロ！」
「いいえ。ワタシはＲｖ２６です」
混乱の声が艦橋を包む。それが怒濤のざわめきに変化してからやっと落ち着いたあと、束の間の静寂が生まれる。その瞬間を有効利用したのはＲｖ２６だった。
「ノロを追って六次元の世界にフォルダーとイリがブラックシャークで旅立ちました。その旅

にワタシは間に合わなかったどころか脱皮して小さくなったようです」
ノロそのものの姿をしたＲｖ２６がノロそのものの声を出すと周りをゆっくりと見渡す。
驚きとため息が混じり合ってはいるが、視線は一本にまとまっている。
「このノロがＲｖ２６だとすると……」
ホーリーが言葉の間（あいだ）に視線の間（ま）を置く。くるっと顔を天井に向けると言葉を丸める。
「おい、双子の兄？いや弟？がやって来たぞ。あいさつは？」
「表現に唐突さがありますが、理解はできます。しかし、ワタシとは根本的に違います」
Ｒｖ２６も天井を見上げて表情を緩ませる。
「そのとおり。ワタシは端末ではない。自律している。要するにワタシは中央コンピュータと一体化していない」
ホーリーの顔から見る見るうちに血の気が退いて病人のように青白くなる。そんなホーリーや周りを無視して中央コンピュータがＲｖ２６に同意の念を持って応じる。
「同期を取ろう。そのように設計されているはずだ」
「それができればホーリーが言ったようにワレラは兄弟に近づく」
Ｒｖ２６が天井を見つめたままニヤッと笑う。その表情はノロ本人そのもので思わずミリンが叫ぶ。
「やっぱり、ノロだわ」

そんなミリンを住職が制する。
「人間は見た目で騙されることがある。視覚だけに頼ることは危険じゃ」
Ｒｖ２６が住職に頷くと天井に向かって強い言葉を発する。
「兄弟の契りを結びたい」
Ｒｖ２６が片ひざを着いて天井を見上げる。その行為が全員に違和感を与える。
「確かにこの雰囲気はノロとは違う」
ホーリーの見解に賛同する声が広がるとミリンの透きとおった声がその場に居合わす者すべての耳を貫く。
「ノロ！メガネはどうしたの」
まだＲｖ２６をノロだと思っているミリンに中央コンピュータが同調する。
「そう言えばメガネをかけていない。ノロはもちろん、ワタシの端末もブラックシャークの中央コンピュータの端末もメガネを掛けているのに。どうなっているんだ」
「メガネ？メガネがなくてもよく見えるぞ。近眼のノロはともかく、なぜ端末がメガネを掛けているんだ？」
「確かにコンピュータの端末が人間の姿をしているからといってメガネまで掛ける必要はないわ」
サーチの言葉が全員に納得感を与えたあと、初めは控えめな笑い声を出していたミリンが急

に腹の底から大笑いする。
「なぜ！」
ミリンがＲｖ２６を抱きしめるとＲｖ２６の頭が真っ赤になる。艦橋に充満していた緊張感が一気に解凍する。

＊＊＊

「訳が分からないわ。誰でもいいから説明して。冗談にしては度がひどすぎるわ」
サーチの頬が膨らむ。
「そんなに奇妙なことじゃありません」
中央コンピュータの言い訳気味の言葉にＲｖ２６が反論する。
「メガネは必要ない」
「なぜ、そんな身体になったんだ」
「それが分かるのならワタシ自身、混乱しない」
「誰が改造したんだ」
「ＭＡ６０だ」
「ちょっと待ってください」
ＭＹ２８が立ち上がってホーリーに詰めよる。

「ＭＡ６０に直接聞くべきでしょうが、ワタシはホワイトシャークに乗船する直前にＭＡ６０がフォルダーから受けた命令を覚えています」
サーチがＭＹ２８を促す。
「フォルダーはあるチップセットをＲｖ２６に埋め込むよう執拗なまでにＭＡ６０に命令しました」
「あるチップセット？」
「ＰＣ９８２１です」
「どんなチップセットなの」
応じたのは中央コンピュータだった。
「前にも説明したとおり、そのチップセットはワタシの端末にも埋め込まれています」
今度はミリンが口を開く。
「そのチップセットを埋め込むとノロと同じ身体になるの？」
苦笑すら漏れない雰囲気が短く流れるとミリンに中央コンピュータが同調する。
「おっしゃるとおりです」
意外な答えに視線が天井に集中する。
「ワタシの端末もブラックシャークの端末もバージョンはほぼ同じものですが、Ｒｖ２６に埋め込まれたチップセットが同じバージョンなのかは不明です。最低メガネに関する取扱につい

てはバージョンが異なるはずです」
多分に冗談を含んだ中央コンピュータの説明に誰も笑うことはなかった。ただひたすらに次の説明をじっと息をこらして待つ全員に向かって中央コンピュータが場違いの軽い咳払いをする。
「ゴホン」
たまりかねたホーリーが、サーチの無言の制止を無視して低い声を出す。
「チップセットを生のアンドロイドに埋め込むのと端末に埋め込む違いは……」
サーチがホーリーに注意する。
「質問は控えるように。中央コンピュータ、説明を継続しなさい」
しかし、サーチの声はきつい。
「分かりました。でもホーリーの質問は当を得ています。端末は所詮端末です。端末は中央コンピュータの管轄を超えて行動することはできません。しかし、Ｒｖ２６は自由に行動することができます」
「当たり前だ」
すぐさまＲｖ２６が応ずる。ホーリーは天井とＲｖ２６とサーチを順番に見つめると手を挙げる。サーチはやむを得ないという表情をしてからホーリーに頷いてみせる。
「ＰＣ９８２１のチップは端末に埋め込むのと、アンドロイドに埋め込んだ場合とでは、効果

は当然異なるということなんだろう？」
「おっしゃるとおりです」
「もう一度問う。その違いとは？」
ホーリーがたたみかける。
「人間にチップセットを埋め込むことはできません」
「待ってくれ。チューちゃんは一太郎という人間を知っているか」
「一太郎のデータは持ちあわせています。無言通信システムを開発した天才です」
「彼は人間の脳にチップセットを埋め込んで無言通信を可能にした」
「いいえ。そうではありません」
「！」
ホーリーは自分の意見が否定されたことに絶句する。
「一太郎はチップセットではなくチップを人間の脳に埋め込んだのです」
中央コンピュータがまるでホーリーと会話を楽しむような声をあげる。
「確かにそうだ。一太郎が人間の脳に埋め込んだのはチップセット、つまりマザーボードと呼ばれるほどのものではなかった」
「そうです。人間は元々脳というマザーボードを持っています」
ホーリーは感心と不快感を同時に持つが、他の誰もが素直に天井に視線を集中したとき、艦

橋の緊張した雰囲気を破るように人影が現れる。しかし、誰も気が付かない。

「ゴホン」

天井からではなくドア付近から咳払いが聞こえる。そこにはやはりノロそのものの姿をした中央コンピュータの端末が立っている。そしてゆっくりとＲｖ２６に近づく。まるでノロがふたりいるように見える。ただし、メガネのあるなしで区別はつく。

「Ｒｖ２６」

端末が呼びかける。そして自己紹介を先取りするかのように続ける。

「チューちゃんと呼んでくれ」

「懐かしい名前だ」

Ｒｖ２６が応答すると周りから親しみのこもった笑い声がおこる。

「同期を取ってもいいか」

中央コンピュータの端末とＲｖ２６が、というよりは、双子のノロが向かい合っているといった方がピッタリする。Ｒｖ２６は黙って肩から数本のケーブルを伸ばす。チューちゃんも同じ数だけのケーブルを肩から伸ばすとお互い肩にあるソケットに接続される。

コンピュータとアンドロイドの厳密な儀式が始まる。つまり耳を輝かせるような単純なデータ転送ではない。ほんの一瞬ふたりの両耳が激しく赤く点滅したあと顔が真っ赤になる。周りにいる者までも赤く見える。

チューちゃんもＲｖ２６も微動だりせずに立ちつくす。Ｒｖ２６の顔から赤味が消えても両耳が激しく点滅している。一方、天井のクリスタルスピーカーが赤から橙色、そして黄色、緑、青、紫と変化すると一気に虹色に輝き出す。そのとき端末のチューちゃんの全身から湯気のような白い煙がわきだつ。ケーブルからはバチバチという音をたてて針のような青い光を発する。

チューちゃんが片ひざを着くと同時にＲｖ２６が一歩身体を引く。ふたりを繋いでいたケーブルがブツッという音をたてて切れる。チューちゃんはそのまま前のめりになってうつむけに倒れこむとＲｖ２６がもんどり打ってドンという音とともに仰向けに倒れる。ふたりの熱気にそばにいる者がたまらず離れる。

ホーリーが正三角形の赤いマークが描かれている壁に向かって走り出すと埋め込まれた消火カートリッジを引き出す。そしてまずチューちゃんに消化剤を吹きつける。ホーリーの行動に素速く反応したケンタが別の壁から消火カートリッジを手にするとＲｖ２６に吹きつける。天井のクリスタルスピーカーだけが虹色に輝いたままで、端末とＲｖ２６に吹きつけられた白い泡も虹色に輝く。

ジュージューという音が艦橋を包む一方湯気が立ち込めて視界が制限される。その中で泡だらけのＲｖ２６がゆっくりと立ち上がると、同じく泡に包まれてうつむけになって倒れているチューちゃんに近づく。

「冷却ボンベはないのか」

Ｒｖ２６がチューちゃんからホーリーを、そしてサーチを見つめる。動いたのはＭＹ２８だった。着ている衣服の胸辺りを両手で引きちぎると大きな胸を開いてそのままチューちゃんのそばに近寄る。その胸の中から白い冷気が端末に向かって吹きつけられる。

「十分だ」

Ｒｖ２６がＭＹ２８を制すると泡を取り除いてチューちゃんを抱き起こす。

「チューちゃん、大丈夫か」

「ウウ……」

チューちゃんの目が開くとＲｖ２６が微笑む。

「ノロ！」

チューちゃんが叫ぶ。

「ワタシはＲｖ２６だ」

「そ……そうだった」

チューちゃんが自力で立ち上がる。

「Ｒｖ２６……。アナタはノロそのものじゃないか」

同時に天井から声がする。

「今の言葉は端末ではなく、ワタシの言葉です」

＊＊＊

「決してフォルダーが冗談で言ったのではありません」
「なぜ、そう言えるの？」
真顔のサーチの質問にＭＡ６０が一瞬たじろくが、背筋を伸ばして応答する。
「フォルダーはノロ探索のために改造したＲｖ２６とともに六次元の世界にブラックシャークで次元移動しようとしていました。むしろＲｖ２６をノロそっくりのアンドロイドに改造して六次元の生命体に挑もうとしたのではないでしょうか」
「そんな稚拙なやり方で六次元の生命体を騙すことはできないわ」
ＭＡ６０はサーチに返す言葉を失う。先ほどまで大混乱のホワイトシャークの艦橋に沈黙が漂う。やっとホーリーが声をあげる。
「ブラックシャークの消息は？」
ＭＡ６０がうなだれるように応える。
「分かりません」
再び、重い沈黙が艦橋を支配する。しばらくするとホーリーが大きな声をあげて笑い出す。
「ノロとフォルダーなら、なんとかするさ。いずれ俺たちの前に現れて六次元の世界での手柄話をするはずだ」
ホーリーの言葉で艦橋の緊張感がほぐれる。そして中央コンピュータの声が響く。

「そのあと、『俺たちが留守している間にお前らは何をしていたんだ』と笑い飛ばすでしょう」
重苦しい艦橋に大きな笑い声が広がる。
「そうね。私たちも手柄話ができるように頑張らなければ。それに心強い助っ人さんも仲間に加わったし……」
「フォルダーはＲｖ２６を信頼しきっていたのか」
「それはそうでしょう。Ｒｖ２６はホーリー副船長の戦友よ」
「親友のホーリーの話をフォルダーは真剣に受けとめていたのじゃ」
住職と一緒になってホーリーはノロそっくりに改造されたＲｖ２６をしげしげと見つめ直す。
「ノロには失礼ですが、ワタシはこの身体に強い違和感を覚えます」
「どういう風に？」
サーチが興味深くＲｖ２６の返事を待つ。
「まず、一所懸命歩いているのに、思ったほど進んでいない」
ミリンがＲｖ２６の短くなった脚を見てクスクス笑う。
「失礼よ、ミリン」
「ごめんなさい」
しかし、ミリンはなおも笑いながらＲｖ２６に頭を下げる。Ｒｖ２６は不機嫌な表情をする

ことなく、ミリンに向かって言葉を続ける。
「それに動作が緩慢なのです。蚊に刺されることはありませんが、腕に止まった蚊が油断しても死ぬことはないでしょう」
「のろまなノロだからな」
ホーリーの言葉にミリンが不快感を示す。
「お父さん、失礼だわ」
「俺の意見ではない。イリがいつも言っていたセリフだ」
「それにしても、ブラックシャークの中央コンピュータの端末といい、ホワイトシャークの中央コンピュータの端末といい、そしてＲｖ２６も含めて、みんなノロそのものだわ」
「そんなことはありません。端末がそういう形をしているだけです」
ホワイトシャークの中央コンピュータが異議を申し立てる。
「ノロの悪ふざけなのかしら」
リンメイが口を挟むとすかさずホーリーが応ずる。
「アイツは自分が男前だと思っていたからなあ」
ミリンがたまらず腹を抱えて大笑いする。さすがにケンタがミリンの口をふさぎながらＲｖ２６を気遣う。Ｒｖ２６とケンタの視線が合う。
「誤解しないで欲しい。ワタシは今の身体に違和感があるだけです」

ミリンの笑い声が消えると、誰もが頷いてＲｖ２６を見つめる。
「フォルダーはノロ探索にワタシを必要としてこのような身体に改造するようＭＡ６０に命令したのなら、ワタシに六次元の世界に来いと言ってるのでは？」
サーチが深く息を吸いこむと断定する。
「当初はそうだったのでしょう。フォルダーは確信を持ってＭＡ６０にＲｖ２６を改造させたはずだわ。でも間に合わなかった」
「どこにフォルダーの意図があったかだ」
ホーリーが太い腕を組んで目を閉じる。全員考え込むが唸るような低い声をあげるだけで言葉にならない。
「ノロの身代わりにＲｖ２６を利用しようとした……。いやそれならブラックシャークの中央コンピュータの端末を使えば済む」
「どういうこと？」
サーチがホーリーを睨み付ける。
「ふと浮かんだ想像だ。最長がノロを六次元の世界に招待したことを覚えているか？」
ホーリーがサーチに身体を向けると、ＭＡ６０が応える。
「覚えています。それにフォルダーは最後の最後までＲｖ２６の改造手術の完了を待ち望んでいたことも確かでした」

「分からん。ノロの身代わりにＲｖ２６を改造したとは思えない。いったいフォルダーは何を考えていたのだろう」
「結局Ｒｖ２６を同行させて六次元の世界で何をしようと考えていたのか分からないのね」
サーチが念を押す。
「想像を超えている」
ホーリーが頷くと軽率な自分の発想を悔いる。
「いいかな」
住職が遠慮気味に発言を求める。サーチが首を縦に振る。
「六次元の世界に連れて行く、行かないかは別問題で、とにかくＲｖ２６を大改造しなければならなかったのじゃ」
住職がサーチに会釈したあとＲｖ２６とＭＡ６０を交互に見つめる。
「聞くところによれば、Ｒｖ２６はずいぶんと旧式のアンドロイドじゃ。Ｒｖ２６には失礼じゃが、廃棄処分でもよかったのかも知れん。しかし、フォルダーは大改造を命じた。その意図はアンドロイドとしてのＲｖ２６の豊富な経験じゃ」
「聞くところによれば……」
ホーリーが住職の真似をしながら言葉を繋ぐ。
「元の体型を思い出してくれ」

誰もが大柄で屈強なＲｖ２６の昔の姿を思い出す。
「Ｒｖ２６は元々戦闘用アンドロイドとして製造された可能性が非常に高い」
「そうかしら」
サーチが目を丸くする。しかし、頷く者もいる。
「それはそれとして問題はＲｖ２６に埋め込まれたチップセットがどういうものかだということじゃ」
「その正式名称はＰＣ９８２１といい、非常に特殊なものであることだけは理解できます」
ＭＡ６０の発言にサーチが身を乗り出す。
「その特殊性とは？」
「イリがフォルダーに『誰の許可を得てＲｖ２６にＰＣ９８２１のチップをＲｖ２６に埋め込むの！』と詰問したことを覚えています」
『『誰の許可？』といっても、その『誰』は明らかにノロだ」
ホーリーがＭＡ６０にあきれた表情を向ける。
「もちろん、そうです。とにかく、イリとフォルダーはＰＣ９８２１の詳細を知っていたことだけは確かです。ワタシも限られた時間でこのチップのことを調査しようとノロの惑星の中央コンピュータにアクセスしましたが、拒否されました」
そのとき、咳払いをする声が天井から響く。おもむろにホワイトシャークの中央コンピュー

タがしゃべり出す。
「極秘情報ですが、この際公開しましょう」
「えー」
「本当に？」
全員、天井のクリスタルスピーカーに注目する。
「意外なことですが、ＰＣ９８２１のチップセットには色々なバリエーションがあります。その数は五十種類もあります。ＰＣ９８２１は元々はＰＣ９８０１いうチップセットの改良型です。ＥシリーズやＦシリーズやＶシリーズ、Ｘシリーズ、Ｕシリーズ……それにＣＰＵも２８６シリーズ、３８６シリーズ、４８６シリーズ、５８６シリーズ……と改良されて複雑な体系、いえ、体系を形成すると言うよりはノロの気まぐれで様々な形式のマザーボードが製造されました。恐らくイリもフォルダーもすべてのバリエーションを理解していなかったと思われます。ちなみにブラックシャークの中央コンピュータの端末は旧式のＰＣ９８０１Ｆ２というチップセットを内蔵しています。ワタシの端末には比較的最新型のＰＣ９８２１Ａｐというチップが埋め込まれています」
全員、ポカーンと口を開けたまま天井を見つめる。しばらくしてから、辛うじてホーリーが泡を吹きながら声をあげる。
「中央コンピュータの端末はアンドロイドなのか」

「そうです。ただし、汎用性はありません」
「どういう意味？」
サーチが口元をハンカチで拭いながら尋ねる。
「特殊任務があるためです」
「特殊任務？」
「言っていいのかなあ。相談しようにもノロはいないし……」
「何をためらっているの！早く答えなさい」
サーチが汗でボトボトになったハンカチを握りしめると雫が床に落ちる。
「やはり、お伝えするのは、はばかります」
サーチが天井のクリスタルスピーカーを睨み付ける。ホーリーも首をさすりながら天井に向かって声を出す。
「分かった。特殊任務の中に守秘義務という任務もあるらしいな。それじゃ、そのチップを埋め込むとどうなるんだ？」
「お答えします」
ホーリーの質問に一部の者が首をゆっくりと回転させる。天井を見上げ続けていたので疲れてきたのだ。中には床を見つめて目を閉じて神経を耳に集中している者もいる。
「もうお気付きになっている方もおられるようですが……」

中央コンピュータが軽く咳払いをする。
「まず、外形がノロそっくりになります」
頷きとどよめきが交差する。
「そして……生殖……あっ！これはダメだ！」
「どうした！」
ホーリーが叫ぶ。
「守秘義務倫理法に抵触します」
「守秘義務倫理法？」
合唱のような声が天井に向かう。
「これも言えません」
きっぱりとした中央コンピュータの声が返ってくる。ずーっと黙っていたＲｖ２６が納得したようにふんふんと頷きながら発言する。
「フォルダーはどうせ大改造するなら、一番最新型のチップセットがいいと考えたのでしょう。それがノロに似ていようといまいとどちらでもよかったのでは」
住職が大きくて手を打つ。
「わしが言いたかったことじゃ」

第七十九章　更なる合流

【時】永久０２９７年４月２日

【空】ホワイトシャーク

【人】ホーリー　サーチ　四貫目　お松　住職　リンメイ　ミリン　ケンタ

＊＊＊

「キャミのポジション、信じられないわ」

「あれほど、アンドロイドに同情していたのに」

ホーリーが同調すると住職が待ったをかける。

「どちらのポジションが正しいのかは難しい問題じゃ。それにキャミが今もそのポジションを保持しているのかどうかは不明じゃ」

「とにかく時空間移動して伊賀の里に向かいます」

「落ち着け」

今度はホーリーがサーチより先に冷静さを取り戻した。

「ホワイトシャークで伊賀の里へ時空間移動するのは派手すぎる。まずは四貫目とお松を派遣すべきだ」

「分かったわ。副船長の提案どおり四貫目、お松とともにキャミとミトを救出しなさい」
四貫目とお松は片ひざを着くと艦橋から時空間移動装置格納庫に向かう。
住職が頼もしそうに四貫目とお松の背中を見つめてからサーチに進言する。
「キャミのポジションをどうこう言う前にわしらのポジションを確認しておかなければならんの。いざという時、ホワイトシャークにいる人間やアンドロイドが全員同じポジションを取るとは限らんぞ」
サーチはけげんそうに住職を見つめるが発言しない。
「前にも言ったが、ノロの惑星の人間は別としてじゃ、混乱した地球に介入するわしらは永遠の命を持っておる。そのわしらが伝える言葉は、今の人間から見ると非常に特殊な見解だと思うだろうし、一方半永久的な命を持つアンドロイドにとっては違和感がないかも知れん」
「ニュアンスとしては分かりますが、もう少し掘り下げて説明してくれませんか」
ホーリーが住職に注文する。
「ニュアンス。そうか、大体のところは理解できるというのじゃな。ホーリー以外の者はどうじゃ」
「わたしにはよく分からないわ」
即座にミリンがクレームを付ける。
「分かった。じっくりと聞いてもらいたい」

住職は磨きあげた頭をポンと平手で叩くとミリンに身体を向ける。
「いつまでも若いままのわしら、そして生命永遠保持手術が可能な設備を持つホワイトシャークから発信するメッセージはいずれ、人間たちに複雑な感情を醸成することになるのじゃ」
住職がミリンに微笑みかける。
『『醸成』ってどういうことなんですか。住職の言葉は時々難しい単語が挟まることがあるわ。それとも私の教養が低いのかしら」
すかさずサーチがたしなめようと席を立つが、住職がミリンに頭を下げる。
「相済まんことじゃった。有限の命を持つ人間にとって、いずれわしらの存在に疑問を持ち始める。わしらは歳をとらんのじゃ。いつぞや、わしらは自分たちそっくりのロボットを作って……あれはいつだったかのう」
「あれは西暦の世界、一太郎の世界でのこと（第二編第三四章「盗聴」）でしたわ。徐々に歳をとったようにメイキャップしたロボットを使って、私たちが永遠の命を保持していることを悟られないようにしましたわ」
「そうじゃったのう。いずれにしてもじゃ、現状をなんとかしようと奔走……『奔走』って分かるか？ミリン」
「はい、分かります」
「奔走、つまり努力しようとすればするほど時間の経過と共に永遠の命を持つわしらの存在に

気付いて複雑な感情を抱くようになるのじゃ。偉大な指導者だった仏陀にしろイエスにしろ、最後は死んだ。もちろん復活ということもあるが、わしらは死なぬ」

「よく分かりました」

ミリンが軽く頭を下げる。

「人間のために、そしてアンドロイドのためにと数々の助言を積みあげればあげるほど、彼らはその助言の根底に興味を持ち始めるはずじゃ」

「住職が言いたいこと、分かったぞ」

ホーリーが場違いの大きな声を張りあげたとき、サーチがたしなめる。

「ホーリー、黙って住職の説明を聞きましょ。これは船長命令よ」

「分かった。住職、続けてください」

「いや、皆さんの反応も重要じゃ。ホーリー、いや、誰でも、それにいつでも口を挟んでくだされ」

しかし、サーチは事務的に住職を促す。

「続けてください」

「ふむ」

住職がくるっと身体を回転させてサーチを見つめる。

「船長、覚えているかのう？」

「……？」

サーチは視線を外さず住職に首を傾げる。

『もう二度と生命永遠保持手術を受けません』とホーリーと一緒に誓ったことを」

サーチとホーリーが同時にハッとする。月の生命永遠保持機構で生命永遠保持手術の効果を失ったことに気が付いて旗艦セント・テラの展望室で宣言した言葉を思い出す（第一編第二十四章「婚約」）。ふたりはその後結婚してミリンをもうけたのだった。

「覚えているわ。そのあと一太郎の世界で必要に迫られて生命永遠保持手術を受けて再び永遠の命を持った（第二編第三四章「盗聴」）」

ホーリーは言い訳するのではなく現状を肯定する。

「どうじゃ。もう一度永遠の命を捨てることができるかのう？」

住職がサーチに迫ったとき、リンメイが住職に静かに問いかける。

「あなたは？」

住職は表情を変えることなくリンメイに即答する。

「捨てなければならぬ」

リンメイが絶句する。いや、リンメイだけではない。数々の想いが艦橋を駆け巡ったあと、

「じっくりと住職の話を聞きましょう」と言ったサーチ自身が辛うじて終止符を打つ。

「住職、よく分かりました」

そのとき、ミリンが大きな声をあげる。
「やっぱり私には何が何だかよく分からないわ」
ケンタが即座に同調する。
「もっと詳しい説明をお願いします」
住職がニタッと笑うとケンタに近づいて肩を叩く。
「ケンタ、人間はな……」
ミリンがケンタに寄りそって住職を見つめる。
「人間は永遠の命を持つと子供を造ることができなくなるのじゃ」
ケンタとミリンが大きく頷く。
「じゃが、誰もが永遠の命を求める」
「みんな、生命永遠保持手術を要求するのかしら？」
ミリンが住職に尋ねるが、返答したのはホーリーだった。
「表向き、月の生命永遠保持機構の手術装置は使い物にならないことになっているし、手術をする医者も男と女の戦争で全員死亡したことになっている」
リンメイが付け加える。
「それに、地球の生命永遠保持センターはすべて巨大土偶に破壊されてしまったわ」
「しかし、いずれ歳をとらないわしらに気付くときがやってくる。そうじゃろ？」

サーチがため息をつく。
「私たちはできるだけ速やかに地球の治安を確保してノロの惑星に、いえ、できれば六次元の世界に行ってノロと合流しなければならないわ」
「結論が出たようじゃ」
ホーリーはサーチを抱きしめたい衝動を抑えて言葉を吐き出す。
「住職、船長の言うとおり長居は無用だ。なんとか地球の治安を確保したら、すぐノロ探索に向かったブラックシャークに追いつかなければならない。それが可能かどうかは別にして」
艦橋にいる人間もアンドロイドも大きく首を縦に振る。住職も頷きながらもその雰囲気を断つ。
「話を元に戻すぞ」
艦橋の空気が再び張り詰める。
「地球の混乱のもう一方の当事者であるアンドロイドのことを考えてみる」
すべての視線が住職に集中する。
「ＭＹ２８の話によれば、つまりノロが考えたアンドロイドの生きざまを考慮すれば、彼らのすべてではないようだが、子孫の繁栄より永遠の命を欲しがる人間とはまったく逆に自ら命を放棄してまでも子供を欲しがっておるのじゃ。有限の存在に過ぎない人間から見るとまこと奇妙なことじゃ」

艦橋にいる海賊のうち、生身の人間の気持ちが揺れ動いて空気をかきまぜる。しかし、同じ艦橋にいるアンドロイドの視線は動ずることなく住職に固定されている。

「ただし、すべての人間が永遠の命を欲しがっているのではないように、すべてのアンドロイドがそう考え、願っているのではないのじゃ。ここに複雑な戦争が起こった原因があるのじゃ」

ミリンとケンタだけが全身で頷く。

「同じ人間なのに、同じアンドロイドなのにそれぞれの思考になぜ格差が起こるのか。分かるかな？」

「個性があるからだわ」

住職が満足そうにミリンに頷く。

「そうじゃ、個性が絡まるからじゃ。今やアンドロイドも個性を持っておる。この重要な個性を十分考慮してわしらは今の地球の現状に対処しなければならんのじゃ」

住職が身体をピッタリと寄せ合うケンタとミリンに近づく。

「今後、地球を導く者は本当の意味での若いリーダーが必要じゃ。分かるか？」

ケンタとミリンがキョトンとして改めて若々しい住職を穴が開くほど見つめる。

「ケンタ、ミリン、いずれ君たちふたりが地球という船の船長になるのじゃ」

びっくり仰天のケンタは絡まった腕を振りほどこうとするが、ミリンは逆にケンタにしがみつく。サーチもホーリーも言葉が出ないほど驚いて目元だけを住職とケンタやミリンに移動さ

せる。リンメイは住職の手を取ってミリンに笑顔を向ける。Ｒｖ２６は敬意を払う仕草をしてケンタとミリンを見つめる。

しばらく続いた沈黙の中で最初に声をあげたのはミリンだった。

「やっと、住職のおっしゃる意味が分かりました」

ケンタが悲鳴を上げるような眼差しで至近距離のミリンの瞳にピントをあわせる。

「当然、住職も一緒よね」

「それは無理というものじゃ」

「どうして！」

思わずミリンが叫ぶ。そしてケンタに催促するように強く言葉を続ける。

「住職も若いわ」

「これは世を忍ぶ仮の姿じゃ」

「どう見ても若いわ」

住職が苦笑いする。

「根本的なことがまだ理解できていないようじゃな」

住職は笑ったままサーチを、そしてホーリーを、そしてリンメイを順番に見つめる。

「わしの話はこれで終わりじゃ」

「とにかく、大統領府に向かいます」

第七十九章　更なる合流

第七十九章　更なる合流

第八十章　金環日食

第七十五章から前章までのあらすじ

キャミとミトは四貫目の計らいで永久紀元前４００年頃の伊賀の里の三太夫に匿ってもらう。サーチが船長に就任したホワイトシャークに気心の知れた仲間が合流すると地球の混乱に驚く。その混乱に立ち向かうＲｖ２６の改造の秘話が中央コンピュータから披露される。一方、キャミの身に危険が忍び寄る。

【時】永久紀元前４００年頃

【空】伊賀

【人】キャミ　ミト　三太夫

＊＊＊

決して親近感を持てる相手ではないものの、キャミとミトはレーザー銃と時空間移動装置のリモコンを肌身離さず百地三太夫の質問にはていねいに答える。時空間移動装置から始まって数々の質問に言葉だけではなく紙と筆を使いながら説明する。もちろん完全に理解させようなどとは思わない。まずそれは不可能だった。

しかし、三太夫の方と言えば、たとえ百の内ひとつでも理解できれば、それはそれで大きな収穫だと割り切っていた。そのときミトの腕時計がかすかに震える。

「ちょっと席を外してもいいか」

ミトが三太夫に許しを乞う。結果的にはキャミに対する許可願いでもある。三太夫が無言で頷くとミトは屋敷を出る。もちろん一緒に三太夫も広い庭に向かう。通常絶対あり得ない三太夫の独り言がミトに背中に伝わる。

「消えたはずの黒玉が……」

――さすが四貫目。すぐに用立てしてくれた

しかし、よく見るとその時空間移動装置の表面には無数の傷がある。ミトは不安を覚えるが、この時空まで時空間移動してきたのだから問題はないと発想をポジティブに変更する。

――四貫目はかなり無理をしてこの時空間移動装置を手に入れたに違いない

ミトは感傷的な気持ちを否定してから三太夫に声をかける。

「三太夫殿。一緒に入ってみてはどうかな」

キャミが屋敷内に留まっていることを確認すると三太夫は誘いを受けようと考える。しかし、ミトは返事を待つことなく時空間移動装置に入るとタブレット・パソコンを手にして三太夫の前に戻る。

「これはコンピュータという平たい巻物のようなもの」

キャミのいる部屋に戻るとミトはパソコン上で指先を踊らせる。すると透過キーボードが浮きあがって暗い部屋の中で目映い光を発する。三太夫の頭がその光を反射してキャミの顔の堀の深さを強調する。そのあとミトの感情を抑えた言葉が響く。

「意外だ」

タブレットの画面に数字が並んでいる。ミトが顔をあげて部屋の外に視線を移す。

「サンバイザーを取ってくる」

ミトが立ち上がると、すかさず三太夫の大きな手がミトの肩を握る。

「一緒にあの球体の中に入る気はあるか？」

三太夫が頷くとふたりは再び時空間移動装置に向かう。

「妙な真似はしないから安心してくれ。少し変わったメガネを取りに行くだけだ」

時空間移動装置に入るとミトは戦闘用サンバイザーをみっつ手にする。初めて時空間移動装置に入った三太夫は数々の小さな光を放つ内部に言葉も出ない。

「この世界での滞在が長くなれば、そのうちこの不思議な光の説明を理解できるときが来る。今はこの帽子のようなメガネが必要なんだ」

ミトが時空間移動装置から降りると三太夫も追従する。そこには心配そうな表情をしたキャミが立っている。

「キャミ」

第八十章　金環日食

ミトがキャミにサンバイザーを渡す。
「もうすぐ金環日食が始まります」
「こんなところで金環日食が見られるなんて」
キャミがサンバイザーを被るとミトが三太夫を促す。すでに周りは薄暗い。庭にいた忍者が大空を見上げて騒ぎ出す。
「落ち着くように指示してくれ」
「何が起こるのだ！」
ついに三太夫が声を上げる。
「少しの間だが、太陽が欠けて消える」
「タイヨウ？」
「陽だ」
「おー」
「直接見るな！目がつぶれるぞ」
しばらくすると周りが更に暗くなる。キャミとミトはサンバイザーを通して太陽を見つめる。
「金環日食だ」
ふたりの真似をするように三太夫が太陽を見つめる。
「おー！」

「直接見るな！これを！」
ミトが目を閉じた三太夫にサンバイザーを被らせる。もう一度ミトが忍者たちに注意を促すと大きな木に近づく。そしてしゃがんで地面に映った丸い輪っかの影を指差す。
「月が陽の前を通過しているだけだ。すぐに元へ戻るから心配するな」

＊＊＊

三太夫はミトに畏敬の念を抱く。しかし、ミトは匿ってもらっているという立場を忘れることはない。あえて三太夫を敵に回す理由がないからだ。もちろんキャミも承知している。
しかし、三太夫の威信が凋落していることまで気が回らない。子飼いの忍者の視線は三太夫からミトに移っていた。そのことが三太夫の態度に変化をもたらす。
三太夫はミトからもっと色々なことを知りたかった。知りたいと思えば思うほど統率力が衰える。
やがて堂々と三太夫を批判する下忍が現れる。彼らの中には「四貫目を呼び寄せてキャミたちの世界に活路を見出そう」と主張する者も現れる。そして三太夫に進言するが叶わぬと思った者たちは三太夫を無視してミトにせがむ。
「我らを四貫目がいる世界に連れて行ってくれまいか」
「聞けば、厳しい戦（いくさ）が繰り広げられているという。我らが役に立つかも知れぬ」

「待ってくれ。私たちの世界はあなたたちから見れば想像を絶する世界だ。四貫目ですら慣れるのに数年を要したと聞いている」
「それなら四貫目にあらかたを聞けばなんとかなる」
三太夫が意見を挟もうとするが、まったく無視されて発言する機会さえ与えられない。さすがにミトは忍者たちを制して三太夫に近づく。
「三太夫殿」
「なんじゃ」
「匿ってもらっているのに無礼だが、少しだけ時間をいただけないか」
「時間を？四貫目やミト殿はこの黒い玉に入って自由に時の流れに乗るのか」
しばらく前から三太夫はミトを「ミト殿」と呼ぶようになっていた。
「時間の流れは複雑だ。荒々しい海に船を漕ぎ出す方が遙かにやさしい」
「それがしが伺いたいのはここから去ったあと、再びここへ戻ってくるのかと言うこと」
さすが三太夫だけのことはある。一瞬にして忍者たちの視線が三太夫に集まる。しかし、ミトは動ずることなく即答する。
「当然だ」
しかし、三太夫は方便だと受け取る。間一髪おかずにミトが言葉を繋ぐ。
「場合によっては四貫目を連れてくる」

このミトの言葉に忍者の間から整った息が吐き出されると三太夫の表情も緩む。
「自分の世界に一旦戻る。そこで何年過ごすか分からないが、その後この場所に来ることになる。三太夫殿の目にはすぐ戻ってきたように見えるはずだ」
「はて？」
「この説明は非常に重要だ。一旦自分の世界に戻って一年過ごそうとも、数秒後のこの庭に私たちは戻ってくる。理屈抜きでそう理解していただきたい」

＊＊＊

操縦席に着くとミトがフーッと息を吐き出す。
「金環日食のお陰で主導権を握れた」
キャミがドアを閉めると計器の輝きが鮮やかになる。
「それほど驚くに足らない現象だけど、この時代の人間にとっては一大事だわ」
「同じように私たちにとって不思議な現象でも、未来の人間にはたいしたことではないのかもしれない」
「今はこうして時空間を自由に移動しているけれど、少し前までは夢の夢だったわ」
キャミがシートベルトを着用する。
「大事なことは不思議なことから逃げないことだ。そうしなければ前に進めない」

ミトがすべてのチェックマークを解除すると操縦桿を引く。
「四貫目に感謝しよう。今のところ正常に作動している」
「それにこんな便利なものを発明してくれたノロにも感謝しなければ」
ミトはモニターを確認するとマイクに向かって大きな声を出す。
「三太夫殿。危険だから離れてください」
三太夫や忍者たちが離れると急に回転を上げた時空間移動装置が忽然と消える。
「おおっ！」
しばらくすると上空から稲妻のような大音響が地上に届く。今度は驚きの言葉を発することなく忍者たちが耳に手を当ててひれ伏す。

第八十章　金環日食

第八十一章　改心

【時】永久０２９７年４月３日

【空】地球

【人】ホーリー　サーチ　キャミ　ミト　カーン・ツー　Ｒｖ２６
ミリン　ケンタ　住職　四貫目　お松

＊＊＊

一旦、四貫目の助言に従って伊賀の里に逃れたキャミとミトは三太夫や忍者の戸惑いに長居は難しいと考えた。それに人間とアンドロイドの戦闘も気がかりだった。だからふたりは金環日食を利用して四貫目が用立てた時空間移動装置で伊賀の里から大統領府に戻った。もちろん約束どおり伊賀に戻ることなど考えてもいなかった。

ところで先に戻っているはずの四貫目と接触しようとするがまったく連絡が取れない。なぜなら四貫目は瀕死のＲｖ２６を連れて、お松、ミリン、ケンタとともにノロの惑星に向かっていたからだ。（第七十七章「サーチ船長」）

やむを得ず現状を把握するために無言通信でカーン・ツーを呼び出すと危険承知のうえで大統領府の地下室で面会する。

「ご無事で」
「前置きは省きます。現状は？」
「誰が敵で、誰が味方かまったく分かりません」
明らかにカーン・ツーは怯えている。ミトは状況が芳しくないと判断すると永久紀元前４００年の伊賀の里への逃避に意味がなかったと気付く。
「もっと詳しく……」
キャミの言葉を抑えてミトがカーン・ツーの前に立つ。
「自分以外は全部敵かもしれないということか」
カーン・ツーの弱々しい頷きを確認することなく、それ以上に弱々しくキャミが呟く。
「最悪の状態……」
再びミトがキャミの言葉を遮断する。
「この世に最悪の状態など存在しません。ノロの言葉を思い出してください」
「そうだったわ」
ミトが頷きながら言葉を続ける。
「もしカーン・ツーの言うとおりなら、つまり敵と味方が区別できない状況なら戦闘中ではないということになる」
「？」

キャミは首を傾げるがカーン・ツーは黙ってミトの言葉を待つ。
「疑心暗鬼に陥って時間が経過すると周りの状況を把握するために戦闘を停止したはずだ」
「そう言われれば、そのとおりです」
ミトが落着きを取り戻したカーン・ツーに問いかける。
「戦闘時の状況と戦闘が下火になってからの状況を思い出してくれ」
カーン・ツーはゆっくり言葉を選びながら応じる。
「アンドロイドに『子供を産ませてもいい』という勢力と、『許せない』という勢力との間の激しい戦闘は、それこそ爆弾が破裂するように数日間続きました。しかし、人間対アンドロイドの戦いではなかったので、ミトの言うとおり、誰が味方か敵か分からなくなって戦闘意欲が消えて沈静化しました。今度は味方と敵を峻別しようと、もちろん、そんなこと、できるはずがないのですが……」
ミトはしっかりとカーン・ツーを見つめる。以前のようにわがままばかりを繰り返す堕落した態度や言動は感じられない。むしろ、威厳ある父親のカーンを彷彿させる。
「カーン・ツーはどちらの陣営ですか」
キャミの重要な質問にカーン・ツーが即答する。
「もちろん大統領と同じポジションです」
「そうすると私たちは仲間ですね」

「話を続けてくれ」
ミトが再びキャミをさえぎって促す。
「確かに戦闘は沈静化しました」
カーン・ツーはこれまでのことを再分析しながら報告を始める。
「人間よりアンドロイドの方が冷静でいち早く戦闘を中断して話し合いを始めました。そして今は、まだ勝負がついていないと主張する人間と、話し合うべきだと主張するアンドロイドが対峙しています。あくまでも私の想像ですが、何が原因で戦ったのか分からなくなったようです」
「うーん。前に進めないから足踏みしている」
カーン・ツーの報告とミトの感想にキャミが頷くと息を吐き出す。
「原因を思い出せば、また争いが起こるかもしれない。でも取りあえずほっとしたわ」
カーン・ツーは背筋を伸ばしてキャミに改めて敬礼する。
「大統領！私はすべてを投げうって大統領に仕えます。ただし、私はアンドロイドの出産を認めていいのではと思うようになりました。これは大統領の信念と真っ向から対立する考えかもしれません。困難なことかもしれませんが、もう一度議論をふりだしに戻す必要があると思います」
ミトはキャミとカーン・ツーの視線ががっぷりと絡み合うその瞬間を眩しそうに見つめる。

そして、キャミがカーン・ツーに一歩押されていることに気付く。それはカーン・ツーの変身に気付いたからだ。キャミも同じことを感じながら応える。

「現状はともかく、取りあえずアンドロイドに出産を認めるかの議論は先送りしましょう。異論はありますか」

ミトがキャミの対応に冷静さが戻ってきたと安心すると、カーン・ツーがキャミに進言する。

「おっしゃるとおりです。まず、治安を回復させることが最優先課題です。そうしないと議論もくそもありません」

「まったくそのとおりです。すぐ戦略を構築しましょう」

キャミもミトも、以前カーン・ツーのわがままに翻弄されたことを忘れたかのように信頼を寄せる。そしてカーン・ツーがキャミとミトの対応に感激して急に涙を流す。

「大統領！」

キャミの前に進み出てはばかることなく涙声で続ける。

「あれほど迷惑をかけたのに、なぜ私を信用されるのですか」

「あのときはあのとき。私は過去のあなたになんの恨みも持っていません。大事なのはこれからのことです」

「ノロと出会って変わりました。それまでの自分の行動をノロはとがめることもなく……」

ミトが急に笑いながらカーン・ツーの両肩を叩くと抱きしめる。

「ノロに出会って生き方に影響を受けなかった者はこの宇宙どころか、異次元の世界でも誰もいない」

カーン・ツーがヒザから崩れ落ちると抱いていたミトも床に倒れこむ。それを眺めるキャミの目からも涙があふれる。

「ところで、ノロ、ノロは？」

「ノロに関する情報はありません。大統領。ここは私がなんとかします。事態が収まるまで身を隠してください」

「逃避は許されません。投げだすという行為は責任者のとる道ではありません」

「さすが大統領。でもここは私が以前よくした無責任な行動を真似してください」

キャミもミトも驚いてカーン・ツーを直視する

「私たちは四貫目の計らいで今まで身を隠していたのです。再び身を隠すことは許されません」

「その四貫目の所在が分かりません。彼のことだ。命を落とすことはないでしょうが……」

「そうか」

「しかし、今、おふたりにできることは何もありません。現状を把握するのは誰からもいい加減な男だと思われている私が適任者です。だから私は自分の主義主張を放棄したのです」

キャミとミトが顔を見合わせる。そのとき、突然満身創痍のアンドロイドが入ってくる。身構えるふたりにカーン・ツーが告げる。

「味方です。安心してください」
そのアンドロイドがカーン・ツーに近づく。
「ここは危険です！」
顔の人工皮膚が剥げ落ちて露出する目玉をキャミに向ける。
「大統領！今までどこに！」
そのとき近くで爆発音がする。すぐさま声のトーンを下げて進言する。
「逃げてください」
「分かった」
ライフルレーザーを受け取るとカーン・ツーが先頭になって部屋から出ようとする。その背中にミトが低い声を向ける。
「そっちではない。私たちの時空間移動装置は裏庭にある」
アンドロイドがミトを強く制する。
「裏庭は敵だらけです。正面の噴水で味方が待機しています」
「私たちが使った時空間移動装置の移動履歴を消去しなければ」
「何とかします」
アンドロイドが裏庭に続くドアに向かうとカーン・ツーがキャミとミトを誘導する。
「こちらへ」

裏庭で戦闘が始まったらしく激しい爆発音と叫び声が聞こえる。
「ここはカーン・ツーの指示に従いましょう」
そのとき裏庭に向かいかけた先ほどのアンドロイドにレーザー光線が命中する。
「伏せろ！」
カーン・ツーが振り返るとキャミとミトの間にライフルレーザーの銃口を向ける。一瞬ふたりはカーン・ツーに騙されたのかと床に身を伏せる。しかし、カーン・ツーの放ったレーザー光線は背後に現れた敵に命中する。
「ここは私が食い止めます。噴水へ急いでください」
カーン・ツーは首を傾げると肩の無線機に向かって命令を発する。
「今から大統領がそちらに向かう。脱出用の時空間移動装置をスタンバイさせろ」
「カーン・ツー！ここは任せる」
ミトがキャミの手を引く。
「カーン・ツー！」
キャミがカーン・ツーに向かって頭を下げる。

＊＊＊

キャミとミトが時空間移動装置に滑り込む。

「取りあえず、月に移動します」
ミトの判断は正解だった。地球上のどこへ移動したところ平穏な場所はない。
「水、食糧の確認を」
ミトの指示にキャミが慌てて食糧格納棚を確認する。
「空っぽだわ」
「そうすると月からどこへ移動するか……だが、選択肢はひとつしかない」
ミトがポケットからスティックメモリーを取り出す。
「無難に食事ができるレストランは、このメモリーに記憶させた伊賀の里しかない」
「好みの料理はないでしょうね」
キャミが苦笑いするとミトがコントロールパネルにスティックメモリーを差しこむ。
「三太夫に得心できないが、約束したし、もう一度伊賀の里に戻るしかない」
時空間移動装置が月上空に現れる。しかし、永遠生命保持センターは廃墟と化していた。センター内の食糧で数日過ごしながら地球の状況を見極めようとした目論見が外れてしまう。
「仕方がないわ」
キャミは地球を眺めながらため息をつく。
「空腹になる前に伊賀に向かいます」
「でも、私たちが乗ってきた時空間移動装置が敵の手に渡れば、逃亡先がばれてしまうわ」

「カーン・ツーがなんとかしてくれることを祈ろう」
しかし、キャミは返事をしない。ミトは黙ってレバーを引く。事態はふたりが思うよりも、もっと広くて深い混沌の世界を求めているようだ。

＊＊＊

大統領府のすぐ上空にホワイトシャークが現れる。
「何だ！この激しい戦闘は？」
「中央コンピュータ！現状を把握しなさい」
「了解」
飛行戦車に翻弄される一団の人間とアンドロイドがじりじりと追いつめられる。そのとき悲痛な声が艦橋に届く。
「カーン・ツーです。救援を！」
「カーン・ツー！私はホワイトシャークの船長サーチ」
「今し方、キャミ大統領とミトを時空間移動装置で脱出させました。戦況は最悪です」
サーチは目を閉じると判断を保留する。すぐさまホーリーが叫ぶ。
「船長！」
サーチが頷きながら目を開ける。

「地上攻撃の準備を！」
「何を考えているんだ。敵味方関係なく殺すことになるだけだ。それに誰と誰が戦っているのかも分からない」
「地上攻撃準備完了！」
ＭＹ２８がサーチに向かって声を上げる。しかし、サーチは応えない。
「しかもここでカーン・ツーの陣営に味方すればホワイトシャークのポジションが決まってしまう。どちらが正しいかどうかを判断することもせずにだ」
ホーリーの意見にも反応せずにサーチは再び目を閉じる。ホーリーが焦れて矛盾した結論を押しつける。
「今はカーン・ツーを救出するしかない！」
やっとサーチが独り言のような呟きを発する。
「カーン・ツーが味方だという根拠は？」
「キャミを助けたと言うのならそれで十分だ。カーン・ツーひとりだけを救出するんだ」
ホーリーが艦橋の出入口に向かって走り出す。そのあとを追ってＲｖ２６も必死になって追いかける。
「船長！ここはホーリーの直感を尊重するんだ」
Ｒｖ２６の背中の言葉をノロの指示だと錯覚したサーチが命令を下す。

「カーン・ツー救出作戦を実行！」
天井からの中央コンピュータの声がサーチを直撃する。
「カーン・ツーの位置座標把握。時空間移動装置へデータ転送完了！」
サーチが天井に向かって頷いたあとうつむく。躊躇した自分を情けなく思ったからだ。医師だったころメスを握った限り躊躇したことはなかったのにカーン・ツーが信用できるかどうかで迷ってしまった。
「船長！」
ミリンがサーチのそばで叫ぶ。
「船長。いえ、お母さん。カーン・ツーは信用できない。でも、ここはお父さんの言うとおりだわ」
サーチが席を立って号令する。
「慎重に地上攻撃します。球形レーザービーム砲の準備！船体をひねります。全員着席。カーン・ツーを何が何でも救出せよ！」
ミリンが着席すると半身になって汗をかくサーチに告げる。
「船長もシートベルトを！」

＊＊＊

「ホーリー」
背中の声に反応するとホーリーが立ち止まって振り返る。遙か後方を必死になって追いかけてくるＲｖ２６に声をかける。
「俺の背中に！」
Ｒｖ２６が屈んだホーリーの背中に飛び乗る。
「ホーリー、申し訳ない」
「何を言っている。俺たちは戦友じゃないか。お前は巨大コンピュータの戦いで俺の命を救ってくれた」
ホーリーがＲｖ２６を背負うと時空間移動装置格納室に全速力で向かう。
「しかし、ずいぶん重いな」
「軽くなっているはずなんだが」
ホーリーが大声をあげて笑うと目の前の隔壁のドアが横にスライドする。
「ナンバー０１の時空間移動装置へ」
天井からの指示にホーリーが右往左往する。Ｒｖ２６がホーリーの頭の上で指示する。
「右に二十歩！」
ホーリーが忠実に駆け出す。
「もう三歩。そのあと左に」

ホーリーがゼイゼイと息を吐きながら走る。
「十三歩！一、二、三……」
「あれか！」
そのとき船体が大きく傾いてＲｖ２６がホーリーの背中からずり落ちる。
「いてっ」
Ｒｖ２６がわめく。
「攻撃態勢に入ったんだ」
「事前通知ぐらいしろ！」
立ち上がるとドアが開いた時空間移動装置が横倒し状態で静止している。
「船体を傾けるときはロックしなければならないのに！何てことだ！」
ほかの時空間移動装置も格納室内でゴロゴロ転がっている。
「気をつけろ。下敷きになったら煎餅になるぞ！」
幸いなことに目の前の時空間移動装置は開いたドアのお陰で転がることはなかった。素速くＲｖ２６が乗り込んだ後、ホーリーが苦しそうに追従する。
「ご苦労。操縦はワタシがしよう」
思わずホーリーが顔をほころばす。横倒しの移動装置内の操縦席近くで両足をバタバタさせるＲｖ２６をなんとか座らせる。しかし、Ｒｖ２６は礼を言うどころか怒鳴る。

「早くドアを閉めろ」
「そんな」
ドアが床に邪魔されて閉まらない。
「早くしろ！」
ホーリーがなんとかドアを閉める。
「よし。後は任せた」
Ｒｖ２６がコントロールパネルで計器をチェックする。
「無言通信でカーン・ツーに位置確認と空間移動する旨を伝えてくれ」
「分かった」
ピッタリと呼吸の合ったふたりの、いや人間とアンドロイドの不思議なほどのアウンの会話が続く。人間同士でも夫婦間でもこれほどの連携ができるのかと言うほどの精緻な行動だ。恐らくサーチが焼き餅を持つほどのふたりの連携が続く。

＊＊＊

カーン・ツーが艦橋に現れる。その姿を見たサーチが叫ぶ。
「ここは医務室じゃない。誰が艦橋に連れてきたの！」
「すでに回復剤を服用させた。ここに来たのは本人の強い希望だ」

ホーリーが笑顔でサーチに応える。
「直接、船長にお伝えしたいことがあります」
元医者のサーチがカーン・ツーに近づくと素速く脈を取る。意外と血色はいい。
「詳しい説明は省略しますが……」
サーチが制してカーン・ツーを副船長席に誘導する。着席したカーン・ツーの前にサーチとホーリーが並んで立つ。
「報告を聞きましょう」
カーン・ツーが目線だけで一礼すると口を開く。
「恐れ入ります。キャミ大統領が移動用に使用した時空間移動装置が敵の手に渡りましたが、なんとか奪回しました。すぐ時空間移動履歴をこのメモリーにコピーして爆破しました……うう……ゴホッゴホッ」
カーン・ツーが喀血する。サーチはひるむことなく吐血治療をする。
「担架を！」
「用意してあります」
Ｒｖ２６がカーン・ツーに近づく。以前なら、いとも簡単に抱きかかえて担架に載せることができたが、ノロと同じ寸法になった今のＲｖ２６にはいかんともしがたい。ホーリーとケンタがカーン・ツーを抱きかかえて担架に載せる。そしてサーチが軽くカーン・ツーの頬を叩く。

「気を確かに」
そしてミリンに命令する。
「医務室へ！」
「了解！」
海賊が担架を持ちあげてミリンに続く。
「船長、甘かった」
ホーリーがサーチに頭を下げる。
「いいえ。重傷だと見抜けなかった私の責任だわ。医者じゃないのに医者のように振る舞ってしまった。情けない……」
「そんなことより大事なことが。船長！いいかな」
「え？」
「カーン・ツーはキャミの時空間移動装置を爆破したと言っていたが、爆破する前に移動履歴をコピーされた可能性は否定できない」
「それを報告するために無理をした。カーン・ツーは信用できるというのね」
「そうだ。頼りがいのある味方がひとり増えた」

＊＊＊

「伊賀の里？」
ベッドの横でサーチがカーン・ツーからホーリーに視線を移す。ホーリーは首をすくめて両手を広げる。四貫目やお松も同席するなか住職が解説する。
「それは伊賀忍者の生まれ故郷じゃ。昔、伊賀者以外にも甲賀者や根来衆という忍者軍団がいた」
四貫目とお松は頷かないが否定もしない。ホーリーが納得の意見を述べる。
「時空が異なるから無言通信は難しい」
「とにかく、その伊賀の里へ時空間移動しましょう」
ホーリーがすかさずサーチを制する。
「前にも言ったが三太夫の屋敷に時空間移動するのは危険だ」
「御陵にしましょう。そのころの御陵に時空間移動する準備を！」
「そのころの御陵の時空間座標を確認しました」
中央コンピュータが即答する。
「ＭＹ２８にその座標データを転送しなさい！」
サーチはカーン・ツーに安静を命ずると艦橋に向かう。その間、通路を歩きながら矢継ぎ早に命令を下す。サーチは今や違和感なくホワイトシャークの船長にふさわしい的確な判断力を手にした。艦橋に戻ったサーチがメイン浮遊透過スクリーンを確認する。

「移動完了」
右下の暦が「永久紀元前４００年……」と変わる。そして中央に御陵が映しだされる。
「後円に木が生えていて、前方部分に木が生えていないということは……」
「俺たちが泥だらけになったときの御陵だ（第二編第三十六章「関ヶ原」）
「御陵から無数の管のようなものが出ていたわ」
「透明の管のことでしょうか」
お松がサーチに尋ねる。
「そうよ！」
「秀吉の軍隊が御陵に近づいたとき、キラキラと輝きながら無数の透明な管が周りの足軽たちをがんじがらめにして堀の水の中へ引きずりこんで溺死させました」
「秀吉は御陵を暴こうとしたのか」
頷きながらお松が続ける。
「手薄になった秀吉に甲賀者が襲いかかりました。我らがなんとか阻止して秀吉を御陵から逃れさせました」
「それで」
サーチが事務的に言葉を挟む。四貫目がお松に代わって応える。
「大和にも数々の御陵があり、我らは御陵というものを熟知しておりますが、秀吉が暴こうと

した御陵は我らが知っていた御陵と違いまったく異質なものでした」
サーチはお松から四貫目に視線を移す。
「この事件以降、秀吉は気が狂ったような振る舞いが多くなり、我ら伊賀者も、そして逃れた甲賀者も分別を失って自分自身を制することができなくなりました」
サーチとホーリーの驚きを無視して四貫目の低い声が続く。
「明智光秀殿は秀吉が頼りにしていた甲賀者に代えて我ら伊賀者を雇うことにして、御陵に手を出さないように命令しました」
「それは瞬示と真美が光秀に御陵を守るように言ったからだ」
ホーリーが手を打って言葉を挟む。
「確かに。あのふたり、瞬示、真美の言葉に光秀殿が大坂城で開眼されたのはそれがし、身を以て見届けました」
四貫目の言葉が少し詰まったとき、お松が補うようにしゃべり出す。
「戦国時代というのは得体の知れない妖怪が暗躍した時代でした。恐らくどの時代より、多くの人々が痛みや怨念を持つ間もなく即死するのではなく、たとえばレーザー銃で瞬間的に殺されるのではなく、じわじわと殺された時代でした」
「残酷な時代だったと言いたいの？」
サーチの言葉にホーリーが割り込む。

「戦争で死ぬのに残酷も安息もない」
「いえ、人間が様々な戦争で殺し合いをしてきたこと、十分承知しています。しかし、この時代、一太刀で死ぬようなことは稀でした。そして鉄砲が登場しましたが、それとてレーザー銃のように敵を瞬時に倒すことはありません。戦（いくさ）では相手の攻撃力、というより気力を削ぐことができれば、何時間後に死ぬはずの者にわざわざとどめを刺すことはなかったし、自分が無傷で元気な間はひたすら五体満足な敵に向かって戦いを挑むだけでした」
　お松は誰も言葉を出さずに聞き入っていることに気付いて黙る。余りにも残酷な光景を想像したサーチが船長の立場を放棄してホーリーを見つめる。ホーリーはその視線に含まれる気持ちをしっかりと受けとめてから、考えを丸める時間を確保するように顔だけを四貫目とお松に向ける。四貫目は弱々しいホーリーの視線を黙って受けとめる。
「昔、男と女が戦争をしていたころとは正反対だ」
　やっと絞りだしたホーリーの言葉にサーチが反応する。
「私には正反対だとは思えないわ」
「中途半端な攻撃で負傷しても生命永遠保持手術の効果で死ぬことはない。それどころか復活する。もちろん致命的な傷を負った以上、激痛が全身を走りまわるが……」
　同調に転じたサーチの表情を確認してからホーリーが言葉を続ける。
「……その間、痛み以上にとどめを刺されまいかという恐怖感で錯乱状態になった脳にかなり

の負担をかける」
サーチが大きく縦に首を振るが、当初の疑問を忘れてしまったことを思い出すと今度は苦笑しながら横に大きく振る。
「百戦錬磨の兵士の脳は生命永遠保持手術の効果が百パーセント機能するようにその恐怖感を抑えようとするわ。そう！あなたのように」
苦笑は消えて再びサーチの表情が厳しくなる。
「思い出したくないけれど、私たちは徹底的に相手を殺したわ。そうしなければ生命永遠保持手術を受けた者は必ず復活する。今、考えればむごいことだったわ」
ホーリーが引き継ぐ。
「永遠生命保持手術を受けた者同士の戦争は徹底した殺し合いで残酷の極みだった」
四貫目が首を大きく横に振る。
「我らが申しあげたいのは残酷さではありません」
ハッとしてホーリーとサーチは同時に四貫目の鋭い視線を受ける。
「戦国時代の戦闘では、すでに致命傷を負った敵にかまうほどの余裕はない。戦局は刻々と変化する。我らは傭兵です。雇い主が絶えず入れ替わる。その変化の中で我ら一族の存亡をどのようにして賭けるかです」
サーチがふーと息を吐き出す。

「百地三太夫とはどういう人物なのですか」
「伊賀者の存亡を一手に掌握している頭領です」
サーチは話が核心に近づいてきたことを確信する。
「いずれにしてもキャミとミトは百地三太夫に身を寄せたのね」
「そうです。瀕死のＲｖ２６をノロの惑星へ送り届ける前に、キャミとミトを一旦永久紀元前４００年の伊賀の里にお連れしました」
「四貫目にとって、そこしか信頼できる場所がなかったということか」
「三太夫を信頼できるかどうかは別として、運命という絆で結ばれていた」
「船長！」
ミリンが叫ぶ。
「どうしたの？」
「この伊賀の里の世界でもキャミから無言通信の返事はないわ」
サーチとホーリーの表情が強ばる。
「カーン・ツーの報告でも時空間移動装置でキャミはなんとか大統領府を脱出したとしか聞いていなかった。カーン・ツー救出時に大統領府付近の時空間移動装置の痕跡を調べるべきだった。船長として、うかつだったわ」
「副船長としてもだ。この伊賀の里にも、元の地球にも無言通信に反応がないということは…

…残念ながら……」

ミリンがツカツカとホーリーのそばに歩むと下から睨む。

「行き違いっていうこともあるし、無言通信は精神的に安定しなければ通じないこともあるわ」

このミリンの言葉に驚いたのはホーリーだけではなく、もちろんサーチだけでもない。住職もリンメイも、もちろんケンタも驚く。

ミリンに四貫目が近づくと尋ねる。

「無言通信といえども絶対ではないとおっしゃるのか」

「そうよ」

四貫目が深々とミリンに頭を下げる。

「貴重なご意見、ありがとうございまする」

第八十一章　改心

第八十二章　限界城

【時】永久紀元前４００年頃

【空】伊賀

【人】四貫目　サーチ　ホーリー　ミリン　ケンタ　三太夫　ＭＹ２８　ＭＡ６０

＊＊＊

サーチの許可を得て四貫目はひとりホワイトシャークから伊賀の里の百地三太夫の屋敷の庭へ時空間移動する。時空間移動装置の回転が止まって四貫目が現れると三太夫が驚く。

「！」

「キャミとミトを迎えに参りました。驚かれるのも無理のないこと」

「違う！たった今、あのふたりは同じ黒い大玉に乗り込むと消えてしまった。すぐ戻ると言ったので得心しそうになったが、なんと戻ってきたのはお前じゃ。どういうことだ！」

「そうでしたか。それがしは別世界で三日間過ごしてから、この世界では一刻も経っていない時間を目指して今戻りました」

「……」

「入れ違いになったわけではありません。時間とは平等に流れるものではないのです」

「あのふたりも同じことを申しておった」
三太夫が両手を一度だけ打つ。そのとき三太夫の耳がほんの一瞬赤く輝くが四貫目は見逃さない。
――これはアンドロイドの反応！なぜだ
四貫目はゆっくりと三太夫に近づく。
「お前たちの話は理不尽を通りこして不可解この上ない」
四貫目は三太夫の先ほどの驚き方に疑問を感じながら耳元を注意深く見すえて頷く。そして悟られないように周りの気配を用心深く伺う。しかし、三太夫の厳しい声が四貫目を貫く。
「四貫目！先ほどのこと、答えよ」
四貫目は慌てず低い声で応じる。
「その前にあのふたり、それに、それがし以外に誰かがここに来たようですな。心当たりはございませぬか」
「なぜ、分かる！」
――やはり
四貫目が三太夫を睨む。

＊＊＊

〔ホーリー！〕

四貫目の叫び声だけの無言通信が途切れる。

四貫目との時間の同期を取りながら御陵から伊賀の里へ時空間移動してきたホワイトシャークの艦橋が大混乱に陥る。

「中央コンピュータ！」

ホーリーの叫び声がとどろいたあと、メイン浮遊透過スクリーンに様々な色のヒトデのような奇妙な物体が映しだされる。それはぶつぶつとしたグレーの泡が破裂しながら七色の原色を蹴散らすような見るに堪えないものだ。

「まるで黒板を引っ掻いた音のような不愉快な色だわ」

サーチが適切な表現をする。

「ヒトデを肥満体にしたような歪な五角形の物体」

ホーリーがサーチの聴覚的な表現を視覚的に置き換える。

「これは！」

中央コンピュータが叫ぶ。

「説明しろ」

「これは時空間を閉じ込めるために作為的に造られた多次元ホールです。いったい誰がこんなものを造ったんだ」

「？」

誰もが理解できずに次の言葉を待つ。

「まさか、ノロが。いや、そんなことはあり得ない」

中央コンピュータのはっきりしない見解にホーリーが苛つく。

「ノロがどうかしたのか！」

「ノロのことはともかくとして、これはブラックホールより質(たち)が悪い不愉快色の多次元ホール。このホールはすべての夢と希望を消滅させてから機械的な感情を植え付けて心の中にブラックホールを発生させます」

＊＊＊

「どこを見ても五角形、あるいは星形の立体が見えます。大きさや色は様々です。まるで五面を鏡で覆われた万華鏡の中にいるような感じです」

そのときミトからホーリーに無言通信が届く。

{ホーリー！}

{ミト！どこにいる？大統領府に戻ったんじゃないのか！}

{大統領府に戻ったのは確かだ。それからカーン・ツーが手配してくれた時空間移動装置で月に向かったまでは覚えているが、今どこにいるのか分からない}

{ここは紀元前四百年前の伊賀の里だ}
{そうか。しかし時空間移動装置内の雰囲気が妙だ。何か無性に寂しくて悲しい気持ちになる。時空間移動装置をコントロールするのが精一杯だ。気が滅入る前にこちらの空間座標を送信する}
{分かった。受信したら無言通信を送る}
すぐさま天井から中央コンピュータの声がする。
「ただ今、空間座標のデータを受信しました」
全員天井のクリスタルスピーカーに注目する。ＭＹ２８が入念にデータを確認してから報告する。
「船長。キャミやミトの時空間移動装置との通常通信も可能です。試してみます」
ＭＹ２８がキーボード上で輝くキーの動きを追いかける。
「ダメです。返信がありません。どうして！」
サーチがキャミに無言通信を送る。
{キャミ。空間座標のデータを受け取りました。今返信しました。通信回線がオープンになっているか確認してください}
{サーチ。先ほどからオープンです}
「問題なく無言通信ができるのに、通常通信ができない」

サーチががっかりしてＭＹ２８を見つめる。
「妨害電波は探知されません」
「分かりました。取りあえず受信した空間座標に空間移動します」
「待て！サーチ。いや、船長！何か、おかしい」
ホーリーがサーチに自制を促す。
「命令取消！。時間がかかってもいいから通常航法で移動します」
「了解」
「到達時間は」
「六分ほどです。正確には五分四十三秒です」
「全員、非常事態に備えよ！」
サーチは命令を終えるとホーリーに説明を求める。
「無言通信ができて通常通信ができないと言うことは？」
しかし、ホーリーの説明を待つことなくサーチが叫ぶ。
「まさか！」
ホーリーがサーチを睨んでから首を縦に振る。
「俺たちの現実時間の永久２９７年ならあり得る妨害だが、この時代でこんな不可解な現象は起こりえない。結局この時空間にアンドロイドが来ていると考えざるを得ない。とにかくアン

ドロイドが一枚咬んでいる」
すぐさまＲｖ２６が反応する。
「同感です。時間がない。今すぐ後部主砲へのエネルギー経路を切断して全エネルギーを前部主砲に流すんだ」
「なぜ？」
サーチの質問を無視してＲｖ２６は耳を赤く点滅させて中央コンピュータに直接指示する。Ｒｖ２６をまるでノロそのものと感じたのはサーチひとりではなかった。Ｒｖ２６の点滅が消えると肉声に変えて指示する。
「前部主砲一門ずつの照準をすべてバラバラにしろ。どれひとつ同じ照準にしないように」
「えー？」
「中央コンピュータ！Ｒｖ２６の言うとおりにしろ」
ホーリーが叫ぶとサーチが追従する。
「以後、ノロ、いえ、Ｒｖ２６の指示は私の命令です」
「了解！前部主砲のポジション変更完了」
Ｒｖ２６の指示が飛ぶ。
「キャミの時空間移動装置の空間座標に向かって主砲の照準をオートフォーカスに」
「何だって！各主砲をバラバラにしておいて、どうやって照準を合わすんだ？」

中央コンピュータが疑問を悲鳴にする。
「ワタシの言うとおりにしろ！マルチフォーカスだ！」
迫力ある声が艦橋の天井に向かったとき明らかに矛盾した指示を出すＲｖ２６にホーリーが近づく。それを見たサーチが叫ぶ。
「ホーリー！邪魔しないように！」
「マルチフォーカス完了しました」
「フォーカスロックしろ！」
「ロックしました」
「全エネルギーを前部主砲に注入！」
「注入完了！」
「発射準備！」
Ｒｖ２６の声が艦橋にとどろくと発射を知らせる警報音が鳴り響く。Ｒｖ２６はＭＹ２８が座る操縦席に近づく。
「攻撃用コントロールパネルに移動してワタシをヒザの上に」
先ほどからＲｖ２８の迫力に圧倒されっぱなしのＭＹ２８が攻撃用コントロールパネルに移動するとＲｖ２６をヒザに持ち上げる。浮遊キーボードが浮かびあがると姿勢を調整しながらＲｖ２６は主砲のコントロールパネルを操作する。

「中央コンピュータ！わたしのやることを模倣しろ！」
Ｒｖ２６がそう叫んだあと浮遊キーボード上の一番から九番までのボタンを撫ぜる。キーボード下のコントロールパネルに赤いテン・キーが現れるとＲｖ２６が順番に押していく。艦橋から見える三連装九門の主砲が次々と火を吹く。太いレーザー光線は自由奔放に進むように見えるが、やがてかなり遠方で集結して七色に変化してから消滅する。
「時空間移動格納室！時空間移動装置が一基到着するはずだ。受け入れ準備をしろ」
Ｒｖ２６がＭＹ２８のヒザから降りると艦橋の出入口に向かう。つられてＭＹ２８がその跡を追うと感染したようにホーリー、ミリン、ケンタも跡を追う。まだ主砲とその遙か彼方を見つめる住職が叫ぶ。
「あれは！」
遙か彼方で透明感に満ちた緑色のオーロラのような壁が発生して大きく波打つように揺れながら近づいてくる。しかし、Ｒｖ２６は振り向くことなく殺気だった言葉を発する。
「時空間移動装置の現れ方は尋常じゃない！覚悟しなければ」
すくい上げるようにＭＹ２８がＲｖ２６を抱えあげると肩車の体勢で時空間移動格納室に向かう。
「ありがたい」
Ｒｖ２６はＭＹ２８の頭の上で拳を振り上げる。

「急げ！」
そのときホワイトシャークに激震が走る。通路天井から中央コンピュータの声が流れる。
「時空間移動格納室で火災発生！あっ、時空間移動装置が炎上しています」
「緊急冷却開始！対処方法を誤るとホワイトシャークが吹っ飛ぶぞ」
時空間移動格納室に到着したＲｖ２６は振り返るとホーリーに怒鳴る。
「キャミとミトがいるはずだ。無言通信で『ロックを解除して外へ出ろ』と伝えろ！」
〔ミト！〕
〔ホーリー〕
〔ここはホワイトシャークの時空間移動格納室だ。外は火の海だが構わず降りろ！〕
海賊やケンタが瞬間冷凍カプセルを持って待機する。
「まともに冷凍カプセルを投げつけるな」
ホーリーが叫ぶと時空間移動装置のドアが開く。

＊＊＊

――本物の三太夫は？
屋敷の広い庭で百地三太夫を四貫目が不思議そうに見つめる。狼狽えることはないが言葉にまったく感情が備わっていない。もちろん頭領の三太夫は寡黙で感情をあらわにすることは滅

多にないが。そのとき口ではなく目に変化が現れる。急に三太夫の瞳がぎらぎらと輝く。まるで誰かに操られるようにすーと立ち上がると直立不動の体勢をとる。そして黒い装束のあちらこちらからメラメラと炎が発生すると周りは強烈な熱気に包まれる。思わず四貫目が引き下がると炎の中からはち切れんばかりに盛り上がった筋肉質の裸体が現れる。四貫目は電磁忍剣を抜くとまっすぐに構える。

「ワシニ楯突クノカ」

あれほど電磁忍剣の威力に驚いた三太夫なのに今回はまったく動ずる気配がない。言葉はますます抑揚を失って何を言っているのか分からなくなる。しかし、四貫目は動揺しない

「我らが頭領のキャミ殿をお守りする。ただ、それだけのこと」

よく見ると三太夫の筋肉は鋼鉄のようで本来筋肉が備えているはずのしなやかさがない。

「オマエノ頭領ハワシダ」

「とう！」

四貫目が一瞬の隙を突く。電磁忍剣が三太夫の右手首を切断したあと腹部を切り裂く。

「オノレ。オマエヲ育テタ父親同然ノワシニ刃向カウノカ」

四貫目はその言葉に珍しく動揺するが、それよりも三太夫の右手首から赤い血ではなく青い血が流れ出ているような錯覚を覚える。すぐさま正気を取り戻して分析する。四貫目には三太夫の手首からむき出しになった金色の配線上に発生する青いスパークが青い血に見えたのだ。

――人間じゃないことは確かだ。やはりアンドロイドか

不用意に間を置いた四貫目に三太夫は口を大きく開いて言葉ではなく黄色い光線を発射する。想定外の反撃に四貫目は忍剣を回転させて光線を蹴散らすと、秋を迎えていた庭の木々の枯れ葉が舞い上がる。すかさず四貫目はその枯葉を寄せ集めて姿を消す。木の葉隠れの術だ。しかし、三太夫の耳から銀色の突起物がにゅーと現れると首から下は微動だりせずに首を三百六十度回転させて周りを探索する。しかも切り落とされた右手を拾うと手首に接合する。そして何事もなかったように右手を動かす。しかし、裂けた腹部からは青白いスパーク光が漏れている。遠くから驚きながら四貫目は三太夫の行動を分析する。

――三太夫なら木の葉隠れの術などすぐ見抜く。あやつは三太夫に似せたアンドロイドに違いない

珍しく四貫目がしきりに首を傾げる。そのとき三太夫の背後が大きく揺れる。屋敷が崩れると目映い光があらゆる方向に炸裂する。光は分裂して無数の光点となる。その光点がすべて五角形に輝く。思わず四貫目は地面に視線を移すが何も見えない。

――目をやられた

身を伏せて嗅覚と聴覚を研ぎ澄ます。ザクザクという音が近づいてくる。四貫目は感覚を嗅覚だけに絞って水の臭いを探す。地を這うように移動しながら近くの池に飛びこむ。すぐさまその飛びこんだところに重々しい光の塊が突っ込む。

必死になって池の底に向かう。恐らく地上では蒸発した水が霧のように周りを包んでいるに違いない。四貫目はそう考えた。現に周りの水が温かくなっている。底にたどり着いた四貫目は防御方法を模索する。

――もし、三太夫に変装したアンドロイドなら、それに切断された手首の青い光がスパークなら水中には来れまい。しかし、復元したようだ。それにしてもあの五角形の物体は……

咄嗟に潜ったため四貫目の息が限界に近づく。視力が回復すると四貫目は生ぬるい水面にゆっくりと近づいて忍剣を抜いてから鞘の先端を水面に露出させて、つまり鞘を筒代わりにして大きく息を吸いこむと再び池の底に潜る。

――思い出した。伊賀の里に危機来たらば、屋敷は限界城という名の城に変化（へんげ）する。そして立てこもって敵を迎え撃つと聞いた。その形は五角で星の光を集めて敵を蹴散らすともいわれていた。あの話、まことだったのか

四貫目の力量からするとまだ水中に留まることが可能だが、くるっと身体を反転させると池の底の岩を力強く蹴って水面を目指す。水面に達すると勢いよく身体を池の上に跳躍させてあえて大きな声をあげる。

「ハー！」

大きく空気を吸いこむと派手な音をたてて池の中に潜る。一分、二分、三分…短いが苦しい時間が流れる。十分、十一分、十二分…四貫目は水草に付いた小さな泡を巧みに集めてまるで

蝶が花の蜜を吸うように酸素を補給すると池の底の大きな岩を蹴って勢いよく水面に向かう。

――これしかない

意を決して電磁忍剣を抜くと水面から鳥のように宙を舞う。

池の畔にいた三太夫の両目と口から光線が四貫目めがけて発射される。器用にその光線を避けて素速く近づくとスパークする腹部に向かってずぶ濡れの四貫目が三太夫を抱え込む。

次の瞬間、三太夫の上半身のあちらこちらからブスブスという音がすると青白い光が全身を包み込む。四貫目は三太夫の頭を蹴って池に飛びこむと顔の上半分だけを水面上に浮かべて様子を伺う。青白い光に包まれた三太夫は正視できないほどに輝き出す。四貫目は大きく息を吸いこむと底を目指す。しばらくして池の底にいても聞こえるほどの大音響が届く。

四貫目は数分間待機したあと用心深く浮上する。三太夫がいたはずの池の周りの木々はなぎ倒されて炎をあげて激しく燃えている。

――やはり……しかし……

四貫目は池の畔に立つと三太夫の残がいを探すが見つからない。それほど壮烈な爆発をともなって三太夫の身体が木っ端微塵に消滅したのかもしれない。四貫目は背中から忍剣を引き抜くと周りを用心深く探索する。やっとアンドロイドの逆折れした左脚を発見する。その関節当たりで輝く小さな物に気付く。よく見ると直径数ミリのガラス玉のように見える。つまむと真っ黒になる。四貫目は驚きながらも冷静に観察する。意外に重くて落としてしまう。もう一度

持ち上げる。重い。それでいて弾力性がある。

「これは……」

四貫目が小さな竹筒にこの不思議な物を入れると栓をする。そのとき四貫目の一瞬の隙を突くかのように空の一角が強烈に輝く。

「おおー！」

四貫目は上空からの光線を辛うじて避けると竹筒を懐にしまう。そして跳躍しながら同じ懐からジェット手裏剣を空に向かって投げつける。推進機を備えた手裏剣が空高く舞い上がる。

「三太夫！」

その方向には巨大な三太夫の顔が浮かんでいた。そして首からジェット噴煙を吐き出している。手裏剣を避けるとそのまま稜線上に浮かぶ歪な巨大な五角形の浮遊物に吸いこまれる。

「あれは！限界城？」

四貫目がヒザから崩れる。

「三太夫は人間ではない。まさか、戦闘用アンドロイドでは！もしそうなら進化したのか？！」

四貫目は懐から血糊がべったりと付いた瓶を取り出すとフタを食いちぎって一気に回復剤を飲みほす。

「しかし、なぜこの伊賀の里に！急いでキャミ殿に報告しなければ」

＊＊＊

ホワイトシャークの時空間移動装置格納室に突然時空間移動装置が現れる。
「なんだ！」
キャミとミトが乗っていた時空間移動装置を検分したのちホーリーはためらいもなくドアを開けると中に入る。座席でぐったりとした上半身裸の四貫目を見つけるとシートベルトを外して担ぎ上げる。
「かたじけない」
「しゃべるな」
ホーリーが四貫目をそーと床に横たわらせると天井に向かって叫ぶ。
「担架の用意を！」
「すでに手配済みです」
そのとき、恐らく艦橋から全力で走って来たのだろう、乱れた呼吸のミトと少し遅れてキャミが時空間移動装置格納室に現れる。
「四貫目！」
「大丈夫か？」
「ご無事でしたか」
「何が起こったの」

「心配無用」
四貫目のサラシが赤い血で染まっている。
「回復剤は？」
「服用しました」
ホーリーが担架を持って到着した救護班に指示してからキャミとミトを制する。
「これぐらいのことで死ぬような男じゃない」
しかし、担架で移動し始めた四貫目がキャミを直視する。
「キャ、キャミ殿」
「しゃべるなと言っただろ」
ミトがたしなめる。
「至急、お伝えしたいことが」
「ここはホワイトシャークだ。まず、治療だ」
キャミは四貫目の手首を握ると脈を取る。
「ミトの言うとおりよ。緊急を要するの？」
四貫目は目を閉じて軽く顔を縦に振る。逆にキャミが顔を横に振る。
「まず救急措置をします」
ＭＡ６０が現れると四貫目の胸に手を当てる。

「すごい快復力だわ。その分、体力が低下している。用心に越したことはないわ。医務室！四貫目の容態のデータを送信します。対処方法を構築しなさい」

キャミが四貫目に念を押す。

「返事は無用よ。ここはＭＡ６０に任せましょう」

＊＊＊

医務室に居続けていたキャミ、お松はもちろんのこと、合流したサーチ、ホーリー、ミリン、ケンタ、そしてＲｖ２６が四貫目のベッドの周りに集結する。四貫目の回復は思ったより早く、ベッドであぐらを組む四貫目が一気に三太夫との戦いをつぶさに報告する。ミト、サーチ、ホーリー、Ｒｖ２６がまさかという表情を四貫目に向けたあとキャミの反応を伺う。キャミが大きく頷くと代表して発言しようとするが、言葉に詰まる。

「戦闘用アンドロイド……」

ミトが首を横に振る。

「かなり高性能化している」

「いつの間にか三太夫と入れ替わって伊賀の里を支配していた。まったく気が付かないほど三太夫そのものだった」

「ほかの伊賀者は？」

ミトがあらだげた声をあげる。
「分かりませんが用心すべき」
四貫目の気持ちを理解したキャミが虚ろな声をあげる。
「女、男の区別なく殺害する戦闘用アンドロイドがなぜ伊賀にいるの？ずいぶん前に製造中止になったはずよ」
「大統領、昔の戦闘用アンドロイドとは余りにも性能がかけ離れています。変装して人間に紛れ込んで、しかも指導者として存在していたのです」
「目的は？いつ入れ替わったの？それに限界城とは？」
「分かりませぬ。若いとき頭領から聞いた限界城のイメージとは形、規模が違うし、しかも空中に浮いていた」
ミトはキャミとともに一旦限界城に幽閉されたのかもしれないと推測するが、もしそうだとすれば、どのようにして逃れたのかまったく覚えていない。
「四貫目、ご苦労でした。治療に専念しなさい」
キャミは医務室での会話に終止符を打つ。そしてミトに耳打ちする。
「四貫目はかなり無理をしたようだわ」
医務室から廊下に出ると、まず、サーチが発言する。
「ＭＡ６０の医者としての力量には感服するわ」

サーチと同じく元医師だったキャミがサーチの背中に頷く。それを察知したのかサーチが振り向いてキャミに首を横に振る。
「私が言いたいのはＭＡ６０も初めは単純作業しかできなかったアンドロイドだったということ」
キャミだけではなく、ミトやホーリーも立ち止まる。
「分かってくれたようね」
サーチの言葉に頷いた後、キャミがミトに尋ねる。
「製造は中止されたが、それまで製造された戦闘用アンドロイドはどうなったの？」
「不明です。私たちは戦闘用アンドロイドの行く末をまったく知らない」
ホーリーが目をむいてミトを見つめるが、ミトの言葉を引き継いだのはサーチだった。
「もし、放置された戦闘用アンドロイドが自ら進化して地球の戦争に加わったり、あるいはなんかの事情で地球に来て進化したとしたら……」
「ＭＡ６０やＭＹ２８、そしてＲｖ２６が仲間だからいいが、彼らの進化と同じことが戦闘用アンドロイドに起こったら……いや起こったんだ！」
ホーリーがサーチの言葉を引き継いだあとミトが唸るような声を出す。
「戦闘のプロにまで進化したアンドロイドを撃退したというなら四貫目は大した男だ」
そのとき艦橋に男の声がする。

「言い残したことがあった。申し訳ない。興奮していたのかもしれない」
「四貫目！」
いつの間にか忍者装束の四貫目がひれ伏している。
「体調は？」
「心配無用」
そしてそのあとＭＹ２８に視線を移す。
「ＭＹ２８殿。教えてくだされ」
ＭＹ２８が立ち上がると躊躇することなく四貫目に近づく。
「話せば長い話になります」
「ご存知なのですか」
「先ほど知りました。戦闘用アンドロイドといい、限界城といい、立ち向かうべき大きな課題が発生しました」
ＭＹ２８は四貫目ではなく、まずサーチを見つめ、ホーリー、そしてキャミ、ミト、最後に天井を見つめる。
「それにしても今日は来客が多いな」
ホーリーが独り言のような声を出すとＲｖ２６が現れるが、誰も気が付かない。
「ゴホン」

「どこにいたんだ。こんな大事件が起きたのに」
「中央コンピュータ室だ。状況は把握した」
そしてＭＹ２８に近づく。
「ワタシは戦闘用アンドロイドの過去についてあえて話さない。説明は中央コンピュータに託した。大事件の予兆を詳しく分析しなければ」
「分かりました。私ごときアンドロイドが下手な見解を四貫目に伝えて予断を与えては今後の展開に禍根を残すことになりかねない」
Ｒｖ２６がＭＹ２８の手を握る。
「ＭＹ２８が上手に説明できるのは分かっている。それはアンドロイドだから。でも今は中央コンピュータに説明させる方がいいのだ」
「Ｒｖ２６の意図を理解しました」
ＭＹ２８が握り返す。
「ワタシは少し眠ることにする。この身体が休息を求めている」

第八十二章　限界城

第八十三章　戦闘用アンドロイドの誕生の経緯

【時】永久０２９７年４月６日

【空】ホワイトシャーク　（アンドロイド製造工場）

【人】サーチ　ホーリー　ミリン　ケンタ　Ｒｖ２６　ＭＹ２８　ＭＡ６０
（ノロ）　（長官）

＊＊＊

「戦闘用アンドロイドの詳しい資料はないの？」
サーチの疑問に中央コンピュータが応える。
「ノロの惑星の中央ライブラリーを調べてみます」
副船長席のホーリーが期待する。
「戦闘用アンドロイドの資料があれば、なんらかの対抗措置が取れるかもしれない」
サーチが目を閉じて頷く。ホーリーは視線を目の前のモニターに戻す。しばらくすると天井から声がする。
「おかしい」
サーチがうっすらと目を開ける。

「これは……？」
「どうしたの？チューちゃん」
「あっ！これはノロの家の地下室にあるファイルサーバーのデータだ」
「地下室のファイルサーバー？」
「そんなものがあの地下室にあったのか」
「戦闘用アンドロイドの製造データと言うよりは物語か脚本に近い」
「物語？」

＊＊＊

ここはあるコロニーのアンドロイド製造工場の設計室で、先ほどからノロとこのコロニーの最高責任者である長官が言い争っている。
「いやだ！そんなもの造っても敵や味方の区別はつかない」
「男女の区別がつかないと言いたいのだな」
「当たり前だ。アンドロイドには目の前の人間が男か女か判断できない」
「ノロ、お前ならできる」
「当たり前だ。俺は女が好きで男が嫌いだからな」
「最近、男みたいな女が増えてきたぞ」

「長官も騙されたことがあるんだな」
「一度ひどい目に……。そんな話をしているんじゃない！」
「だって長官も騙されるぐらい男と女を見分けるのが難しいということじゃないか」
「違う！お前なら男女を見分けるアンドロイドを製造できるはずだと言いたいのだ」
「それは不可能だ。俺が女装したら長官といえども女だと勘違いするはずだ」
「アホか。それは絶対にない！」
「長官が女装したって俺も絶対に騙されないなあ」
「そうだろ」
　意見が合致して握手するが、すぐ睨み合う。
「女の軍隊を皆殺しにする戦闘用アンドロイドを量産せよ」
「だから、無理だと言っているじゃないか。分からんのか？石頭長官！」
「何！石頭だと」
「俺はアンドロイド製造の第一人者だ。その俺が言っているんだ。できんことはできん」
　ノロが食い下がると、長官も食い下がる。
「様々なものを発明したお前なら不可能ではないはずだ」
「とにかくいやだ。時空間移動装置にしたって宇宙を旅するために造ったのに、戦争の道具になった。兵器を造るのは大嫌いだ」

「ノロ、よく考えろ。早期の戦争終結が重要だ」
長官が数冊のノートを出す。
「それは俺の研究ノートだ。いつの間に……」
「汚い文字を読むのにずいぶん苦労した。お前はアンドロイドを男と女に分けて生殖機能を持たせようと考えておるな」
「返せ！」
長官からノートをひったくろうとするが部下たちがノロを羽交い締めにする。
「女だけを殺す戦闘用アンドロイドの製造を命ずる」
「何度命令されても拒否する！」
なんとかノロがすり抜けると短い脚をフル回転させて工場から出ようとする。
「分からんヤツだな。少し痛い目にあわせろ」
逃げ切れないと悟ったノロが立ち止まる。
「待ってくれ」
「引き受けるんだな」
「違う！」
振り向いて長官を睨んだままノロが続ける。
「長官の希望どおり、女を殺す戦闘用アンドロイドを開発したとしよう。そのアンドロイドが

誤って男の軍隊を攻撃しても俺は知らんぞ」
「それは確率的に低いはずだ。仮にそういう状態になってもやむ得ん。戦争に犠牲は付きものだ」
ノロがうつむく。
「そうか。兵士は所詮、駒なのか。同じ人間なのに」
「平和は犠牲の上に成り立つものだ」
ノロの目に涙があふれる。
「やっぱりイヤだ！」
そのときノロの顔面に強烈なパンチが撃ち込まれてメガネが吹っ飛ぶ。鼻から血を流して床に倒れる。長官がノロの胸をグリグリ踏みつけるとゼイゼイと苦しそうに息を吐く。
「ちょー、長官」
「引き受けるか」
「いやだ」
長官がノロの胸から足を外すと誰かがゆっくりとノロを抱き起こす。ノロはもう一発パンチを食らうと思ったのか最後の力を振り絞って手足をバタバタさせる。
しかし、何も起こらない。メガネを掛けさせられて強制的にある女の写真を見せられる。
「イリ……」

「姉の命は保証しよう」
「卑怯な！」

＊＊＊

「男と女の戦争が起こる前からノロは戦闘用アンドロイドの製造には反対していた。しかし、時空間移動装置はもちろんアンドロイドの製造にかけては誰の追従も許さなかったが、軍の幹部から見ると思想的に問題があった。本当はただ気まぐれなだけだった。ところでイリは姉ではないのにノロはなぜか戦闘用アンドロイドの製造責任者になったようだ」
「そうだったのか」
ホーリーが天井を見つめる。
「初めはイヤイヤ作業をしていたが、ある時期を境に積極的に戦闘用アンドロイドの製造に深く関わるようになった」
「人質問題はともかくとして、アンドロイドに生殖機能を持たせようと考えたからか……」
ホーリーを制してサーチが繋ぐ。
「ノロは男と女を区別して人間を殺すという課題からいかにしてアンドロイドを進化させるかというアイデアを得たのかも。そう、そうに違いないわ！戦闘用アンドロイドを製造する傍ら、アンドロイドを男と女に分けて出産能力を、そして寿命を設定する研究に没頭したんだわ。こ

う考えればノロの行動のすべてが理解できるわ」
ホーリーが感心してサーチを見つめる。
「そうだ！だから製造された戦闘用アンドロイドはできが悪く、女の兵士だけではなく男も殺すという事故が多発した。ノロは興味があることに没頭するが、気が進まない作業は手を抜く」
ホーリーとサーチは顔を見合わせて笑顔で頷き合うと天井から大きな声が響く。
「そのとおりです。ノロは戦闘用アンドロイドの製造という作業を適当にこなして、せっせとアンドロイドの性の研究に邁進したようです」
「でも、サボリは必ずばれる」

＊＊＊

「お前を死刑に処す」
「えっ！」
「前線の戦闘用アンドロイドが男の兵士まで殺害しておる」
「だから言ったじゃないか。うまくいくはずないって」
「適当に戦闘用アンドロイドを製造していた罪により死刑だ」
「必死になって頑張ったのに死刑だなんて、ひどい！」
「それに怪しげな作業をしていることも分かっている。人間の女性そっくりのアンドロイドを

造って夜な夜な奇妙なことをしているという報告もある」
「それは戦闘用アンドロイドに女を認識させるために製造したんだ。女の写真を見せて『これが女だ』と教えたってアンドロイドには分からない」
「ふーん」
長官はこれまでの居丈高な口調からトーンを落とす。
「それに男の人間に似たアンドロイドも造った。『この種の人間は殺してはならん』と教えるためだ。そうしないと戦闘用アンドロイドは長官を殺そうとするかもしれない」
「なるほど」
完全にノロのペースになる。
「もし、戦闘用アンドロイドの調子が悪いので修理しなければならなくなったとする。そのアンドロイドが脱走して長官を襲ったら、それこそ俺は死刑になる」
「そうか。そこまで考えてのことだったのか」
「俺のやり方に文句があるなら、この仕事から降りる。イリも納得するはずだ」
「まあ、待て」
慌てて長官が死刑執行書を破り捨てる。
「どうすればいい」
「戦闘用アンドロイドの前線派遣を一旦中止してくれ。急製造したから、男女識別プログラム

のレベルが追いついていない。それにプログラムにバグがあるかもしれない」
「分かった。一週間猶予する」
「何を？」
「死刑をだ」
「そんな！たった一週間だけ？それじゃ時計を見るたびに手が震えてまともな作業ができる訳がない」
「グズグズ言うな。さっさと優秀な戦闘用アンドロイドを製造しろ」

＊＊＊

艦橋で浮遊透過スクリーンを見ていたサーチたちは中央コンピュータの映像解説に納得する。
「確かに戦闘用アンドロイドはひどかったな」
「女の軍隊は対抗上、捕虜にした戦闘用アンドロイドを分解して同じような戦闘用アンドロイドを急きょ製造したけれど、結局中止したわ」
「それは賢明な判断だった」
サーチとホーリーの会話が途切れたとき、ミリンが声を出す。
「チューちゃんが苦労して探しだしたデータに鮮明な映像まであるなんて少し違和感を覚える

わ」
「そう言えばそうだわ」
サーチの発言にホーリーが無言で肯定する。
「答えて！チューちゃん」
「えー。それは、そのー、ワタシにもよく分かりません」
「何か、隠し事でも」
ミリンの追求に中央コンピュータが即答する。
「それはありません。ただし、ワタシのデータを上手に加工する者がこのホワイトシャークにいることは確かです」
にわかに操縦席にいたＭＹ２８が立ち上がる。
「ワタシが加工しました。中央コンピュータと同期を取ったとき、このデータの内容に驚きました」
「！」
意外なＭＹ２８の言葉に艦橋にいるすべての者が驚く。
「男の人間にそっくりなアンドロイドとはワタシのことです」
「えー！！」
驚くと言うよりも仰天する。その中でサーチがなんとか言葉を発する。

「ということは、女の人間にそっくりなアンドロイドは……」
「ワタシです」
ＭＹ２８の横でお腹がせり出したＭＡ６０が応える。そしてＭＹ２８がＭＡ６０の腰に手を回す。

＊＊＊

ノロが工場内で一番人間に近い姿をしたアンドロイドに近づくと声をかける。
「なあ、ＭＹ２８」
「ハイ」
「最強の戦闘用アンドロイドを製造する」
「ハイ」
「残された時間は二十四時間だ」
「ハイ」
「俺がお前にインストールした戦闘用アンドロイド製造プログラムを駆使して製造してくれ」
「ワカリマシタ」
「俺は密かに製造した超小型量子コンピュータでこのコロニーの中央コンピュータに侵入して時空間移動船を略奪する。その船でこのコロニーから脱出する」

アンドロイド全員がノロに向かって大きく首を縦に振る。
「実行！」
アンドロイドたちはノロから、それぞれがなすべき場所に向かって歩き出す。
「イリ……」
ノロは大事なことを思い出す。
「イリはどこにいるんだ？」
両手をぐっと握り締める。

＊＊＊

「ノロ。約束の期限だ」
武装した兵士数十名を連れて長官がノロの前に現れる。ノロは背中を向けたまま応えようとしない。
「答えろ！」
ノロの背中が揺れるが振り返ることはない。
「ノロ！」
そのとき工場内にサイレンが鳴り響くと照明が消える。護衛の兵士が慌てて携帯照明灯で周りを照らした瞬間、その兵士たちにレーザー光線が向かう。声を出す間もなくほとんどの兵士

が倒れる。
「ノロ！」
携帯照明灯を持っていない長官は床に貼り付くと大声をあげる。その声めがけてレーザー光線が向かう。
「反逆者は死刑だ」
「死刑される身になって見ろ」
ノロの声が響く。その声を頼りに長官がノロに向かって突進する。ノロは簡単に倒れるが、それは案山子のノロだった。
「おのれ！」
「工場閉鎖」
「シェルターを開放」
「何！シェルターを開放するだと！」
シェルターが開放されると中の空気はすべて宇宙に放出されてしまう。
「長官。さようなら」
どこからかノロの声が聞こえてくる。長官が苦し紛れに叫ぶ。
「待て！姉のイリの命は保証しないぞ」
「どこにいるんだ」

「イリはこのコロニーにはいない」
「えっ？照明を点けろ！」
工場内が眩しいほどの明るさを取り戻す。倒れたノロの人形が長官に近づくが、長官の視力はまだ戻っていない。
「イリはどこにいる？」
「さあ」
長官は目を閉じて惚ける。その間、生き残った兵士が通信機でコロニーの中央コンピュータにアクセスしようとする。そのとき背中に「ＭＹ２８」と書かれたアンドロイドが通信機を奪うと握りつぶす。
「長官、時間がない。イリはどこだ」
「先に解放しろ」
そのとき大きな轟音とともに時空間移動船が工場横に着陸すべく高度を徐々に下げる。
「まだ、空気は残っているが、時空間移動船が着陸すればこのシェルターは粉々になって宇宙と一体化する。どうする？長官」
キチガイだとバカにしていたノロに長官は言葉を失う。ガラガラとシェルターが崩れる音がする。
「ノロ！待て！」

ノロからの返事はない。
「イリの居場所は知らない。お前に戦闘用アンドロイドを製造させるための方便だった。正直に告白したから助けてくれ」
「お前は人間じゃない。アンドロイドの方がよっぽど人間味がある」
再び人形のノロが床に倒れると工場の入口の方からノロの声がする。
「ＭＹ２８。行くぞ。全員時空間移動船に乗船しろ」
「了解！」

＊＊＊

「そういうことだったのか」
まずホーリーが感動しながら納得する。
「あの工場での出来事は今でも鮮明に覚えています」
ＭＹ２８が感慨深く息を吐き出す。そしてＭＡ６０の腰に当てた手を離すと抱きしめる。
「アンドロイドじゃない。このふたりは人間と同じだわ。しかも強い愛情で結ばれている！」
サーチが羨ましそうにＭＹ２８とＭＡ６０を見つめる。そして改めてノロの偉大さに驚く。
ノロのひょうきんな態度からまったく想像できないが、彼が残した軌跡に驚くというよりは、何とも言えない暖かさを感じる。それは感激の余り涙を流すというものではなく、なぜかクス

クスという笑いから始まって気が付けば誰もが大笑いして耐えきれなくなって涙を流すというようなシーンを想像させる。

「今頃、ノロは何をしているのかしら」

ホワイトシャークの艦橋に和やかな空気が流れる。ホーリーがポツンと漏らす。

「ノロならこの混乱した人間とアンドロイドの微妙な関係をどう調整するんだろう」

「大昔、小さな島の領有権を巡って大騒ぎしていたのが後々バカらしい出来事に変わったように、こんな混乱なんて大したこと、ないのかも」

そう言うとミリンがうれしそうにケンタに抱きつく。

「さっきの映像でアンドロイドに対するノロの考え方がよく分かったわ。ねえ、ケンタ」

それを見たサーチがたまりかねて船長席を立ってホーリーに近づく。そしてホーリーの背中から抱きつく。ホーリーが驚いて振り返ると目の前にサーチの唇が待ち受けている。

「俺がケンタのように『無口で静かな男だったらいいなー』と思っているんだろ」

「あなたこそ、『私がしとやかで従順な女だったら』と……」

ホーリーの唇がサーチの言葉を奪う。

（ここで次の章に進むのが著者の流儀なのだが、今回はＲｖ２６の異議を挿入する。だからここまでＲｖ２６を登場させなかった）

「ゴホン」（これはＲｖ２６の咳払い）

「ゴホン」（これは中央コンピュータの咳払い）
まずＭＹ２８とＭＡ６０が離れる。そしてホーリーとサーチも離れる。サーチはミリンの様子を伺おうと視線を変える。
「あれ、ミリンは？」
ミリンもケンタも艦橋にはいなかった。中央コンピュータから確認メッセージが入る。
「四貫目、お松とともに御陵時代の伊賀の里へ時空間移動しました」
「えっ！」
「アンドロイドの三太夫の正体を解明するのが理由です」
「船長の許可なしに？」
「ワタシが許可しました」
Ｒｖ２６がサーチの前に進み出て応える。
「なぜ」
「皆さん抱き合っていましたから」
「そうじゃないの。なぜ伊賀に行かせたのかを知りたいの」
「三太夫がいつどのようにして戦闘用アンドロイドと入れ替わったのか、早急に調査する必要があると考えたからです。これは四貫目の強い疑問でもありました」
「みんなが浮かれているときに次にすべきことを実行したということね」

そのとき浮遊メイン透過スクリーンに、表面が無数のグレーの突起を持つ歪な五角形の限界城が映しだされると中央コンピュータの緊張した声が流れる。
「この時空間に留まることは危険です」
「！」
Ｒｖ２６はノロがよくした口を真一文字からニーッと笑う仕草を狼狽えるサーチに向ける。
「危険は了承済みだ。大丈夫」
「あなたはＲｖ２６なの？本当はノロじゃないの？」
「ワタシはＲｖ２６です」
「これが物語だとしたら、最後に『実は俺はノロだ』なんてことはないだろうな！」
サーチの横でホーリーが興奮する。
「なぜ、四貫目にミリンが付いていったの」
サーチは船長として軽率な質問をＲｖ２６に向けてしまう。
「だから、始めに言ったでしょ。皆さん抱き合ってラブラブだった」
「ミリンもケンタもでしょ」
「いえ、いち早くふたりは離れたし、四貫目とお松は抱き合っていませんでした」
「サーチ」
ホーリーは「船長」と呼ばずに敢えてサーチと呼ぶ。

「落ち着け。もう子供じゃない。立派な海賊だ」
「そのとおり！」
Ｒｖ２６が両手を挙げると艦橋にいる海賊全員が大歓声を上げる。

第八十四章　体外離脱

【時】永久紀元前４００年

【空】伊賀

【人】三太夫　四貫目　お松　当主

＊＊＊

時空間移動装置が消えると三太夫は屋敷に入る。そのすぐあとケンタが操縦する時空間移動装置が現れる。ドアが跳ね上がると目にも止まらぬ速さで四貫目とお松が屋敷の裏に消える。同時に時空間移動装置も音をたてずに消える。忍者屋敷でこれに気付いた者は誰もいない。

三太夫は薄暗い部屋に入ると忍剣を目の前に置いて座禅を組む。数人の下忍が三太夫の周りに十本ほどのロウソクに火を付ける。ほんの少しだけ炎が揺らめくがすぐ静止する。下忍が部屋から姿を消すが雫の形をした炎が揺れることはない。この質素な狭い部屋の中で三太夫は黙々と両手で独特の紋を切るが、やはりロウソクの炎が揺れることはない。

「時（とき）とは刻むだけの存在ではない」

三太夫は紋を解く。

「時、そのものが動く」

三太夫は、脳裏に刻んだ四貫目、ミトの言葉を何回か繰り返す。

『自分の世界に一旦戻る。そこで何年過ごすか分からないが、その後この場所に来ることになる。三太夫の目にはすぐ戻ってきたように見えるはずだ』

「因果の乱れをいかにして抑え込むのじゃ？」

三太夫の思考はかなり進歩している。さすが伊賀者の頭領、しかも他の忍者集団を遙かに上回る最大の組織を擁する頭領だ。そして三太夫自身も、単なる組織のリーダーではない。絶えず修行を怠らない忍者の中の忍者でもあった。還暦を迎えても三太夫に対抗できる忍者は猿飛佐助の父親の猿飛大猿ぐらいだった。四貫目といえども術の精度では三太夫にはかなわない。

「時が動く。そうか、分かったぞ！」

三太夫は頭の中で悟りを展開する。

「一歩前に出る。そして一歩後退する」

三太夫は、自分自身を近くから観察するもうひとりの自分を頭の中で想像することができる、体外離脱というたぐいまれな術を心得ている。これは単なる「分身の術」ではない。

「一歩前に出たとき、確かに時間も前に出た。そのあと一歩後退した」

三太夫の表情が異常なまでにゆがむ。

「このとき、時間も一歩後退する」

低い声で笑う。

「横から見れば確かにこう見える」
そのとき三太夫から一番遠いロウソクの炎が少しだけ揺らぐ。
「何者だ」
「さすが、三太夫」
「！」
薄暗いが三太夫にはその声の主がはっきりと見える。
「本当に身体が分離したのか」
三太夫の身体がわずかに動くと手裏剣が飛ぶ。乾いた金属音がすると手裏剣が畳に刺さる。
「見事な身の熟(こな)し。人間は究極の域に達するとすごいことをやってのける」
三太夫はその声の主が自分ではないことを確信する。つまり体外離脱の術が破られたことを悟る。目の前の忍剣を素速く掴む。刃が鞘から半分出たとき三太夫は前のめりになって畳に顔を付ける。
「大した人間だ。お前の本体をいただく」
そう言うと三太夫と瓜二つの人間、いや人間ではない。戦闘用アンドロイドだ。そのアンドロイドが畳に顔を着けたまま気を失った三太夫を軽々と担いで部屋から出る。外では多少の騒ぎが起こるがすぐ何もなかったように静寂が屋敷全体を覆う。
三太夫がいた部屋ではすべてのロウソクの炎が消えて煙とロウの臭いだけが残っている。そ

の煙の一部が天井の一角に吸いこまれる。そこには四貫目が潜んでいた。
――三太夫ほどの使い手がいとも簡単に誘拐された。もうひとりの三太夫はいったい……。いずれにしてもそれがしに気付かなかった
四貫目は音もたてずに天井裏から飛び下りると廊下に出る。そこには頭を砕かれた下忍たちの死体が転がっている。
――何という殺し方だ
死体に触れないよう素速く玄関に向かいながら、お松に無言通信を送る。そしてケンタにも。

＊＊＊

ある空間で五次元の生命体が限界城について議論している。
「どこから攻められても防御可能な不思議な城。三太夫はこの城を限界城と名付けた」
「この時代の要塞としては完璧と言って差し支えない。しかし、なぜ限界城に興味を持つのですか」
「人間は不完全な生物だ。だが不完全がゆえ、ときとしてワレラの理論から導き出せない物を造り出すことがある」
「人間の矛盾については十分理解しております。人間は合理的に行動しません。不思議な生命体です」

「しかし、ワレラは何度も痛い目にあった」
「ワレラが神と崇める無敵の巨大コンピュータが文字通り人間に息の根を止められた（第二編第五十一章「多次元エコー」）」
「ブラックシャークというたった一隻の宇宙戦艦にやられた」
「多次元エコー！恐ろしい兵器だ」
「人間を抹殺するのは簡単だと傍観していたが、逆に追いつめられた。もういい。思い出話は人間の特権だ。ワレラには有害なものだ。とにかく三太夫のアイデアを基本にこの世界に強力な防御力と攻撃力を兼ね備えた城を造る」
「しかし、多次元エコーを防ぐことができましょうか」
「三次元空間に五次元空間の特区を設ける。その特区に我ら五次元の生命体を結集して五次元の限界城を建築すれば多次元エコーなど問題ではない」
「多次元エコーは無機質の物体に対して想像を絶する破壊力を持つ。しかし、有機質の、つまり五次元の生命体で構成される限界城には無力だと？」
「そのとおり」
「安心しました」
「三次元空間で限界城は不死身のがん細胞のような存在になるのだ」
「まさしく無敵だ」

「限界城を形成せよ」
三次元の世界から見れば一瞬にして薄気味悪い限界城が誕生した。

＊＊＊

ここはその限界城。数人の戦闘用アンドロイドの幹部が集まって会議を始める。
「三太夫の脳の摘出が終わりました」
「神経系統は？」
隊長が確認する。
「すべて模倣しました。神経系統のデータの蓄積とその神経反応のシミュレーション結果もデータベース化しました」
「三太夫の脳は通常の人間の脳と比べて特殊です」
部屋の中央上部に浮遊透過３Ｄスクリーンが現れると三太夫の脳の立体映像が映しだされる。
「前頭部に段差があります。このような脳を持つ人間は稀です。ゴリラの前頭部の脳と同じ形です。人間は新たな進化の過程に入ったのかもしれません」
ゴリラの頭の投影図が映しだされると隊長が制する。
「待て。ゴリラにはこのような形の脳が多く見られるというのだな」

「説明します。この二段型の脳を進化させるには肉体に大変な負担がかかります。一部のゴリラは二段型の脳に進化しましたが、その後挫折したようです。しかし、人類はこの二段型の脳を放棄して地道に進化する方を選択しました」

「その結果、人類はゴリラの追従を許さずに知的な思考を獲得したのだな」

「そうです。しかし、人類のほんの一部ですが、この二段型の脳の進化の遺伝子を受け継いだ者がいたのです」

「その数少ないひとりが三太夫か」

「はい」

「そういう脳をなんとかして進化させると新人類という新しい種族を形成できる可能性が高い。こう理解して間違いないか」

ここで三太夫以上にがっちりとした忍者の画像が現れる。

「まだ、調査中ですが、この忍者は三太夫の従兄弟で猿飛大猿という忍者です。ところでなぜ『猿飛』あるいは『大猿』と、『猿』という文字を名前に入れるのかについては諸説があります。有力説では猿のように素速く動くからだと説明されていますが、そうではありません。本当はゴリラの脳を進化させたから『猿』という文字を取り入れたのです。話が逸れてしまいました。さて大猿は忍者の歴史始まって以来の使い手ですが、存在は確認されていません。オリンピックで言えばすべての種目で金メダルを取るぐらいの力量を持っています。もちろんス―

パーマンや鉄腕アトムには、かないませんが」

隊長が不快感を現す。これは戦闘用アンドロイドの感情表現としては非常に珍しい。

「三太夫を頂点とした猿飛一族はゴリラが諦めた進化を推し進めた新人類です。恐らく世界中を探しても新人類は猿飛一族だけのようです」

「新人類だという証拠はあるのか」

「たとえばこのような記録があります。通常の忍者の分身の術は四分身、優秀な者で八分身が限度らしい。しかし猿飛一族の分身の術は十六以上だという。なかでも猿飛大猿は二十四を数えたと」

「待て。理論上、分身の術は２の乗数になるはずだ。２分身、４分身、８分身、１６分身、３２分身となるはずでは」

「理屈が通じないのが人間です。ワレラも訓練次第で四分身程度までの術を体得した者がおりますが、三太夫は十六分身が限度です。ところが、猿飛大猿はなぜか二十四分身の術ができるらしい」

「四貫目は？」

やがて外形だけではなく思考すら三太夫そのものになって伊賀の里に潜り込むアンドロイドが質問する。

「四貫目は猿飛一族ではありません。しかし、修行を重ねて三太夫と互角の十六分身の術がで

きるようになった。しかも科学的な思考能力を身につけた今の四貫目の能力は三太夫を上回っている可能性が高い」

「分かった。四貫目を侮れない存在と認識した。今後の対応、人間に悟られてはならない」

「それに最終目的であるキャミの拉致を、人間に知られないように、特に四貫目に悟られないように実行しなければならない」

「まずホワイトシャークを片付けなければ」

「ホワイトシャークの船長より中央コンピュータが曲者だ」

「ブラックシャークの中央コンピュータに巨大コンピュータが敗退したように、ホワイトシャークの中央コンピュータをマークすべきだ」

「どちらも超小型の量子コンピュータです」

「つまり超小型の量子コンピュータに巨大コンピュータが敗北したという事実を忘れてはならない」

「当然！だからこそ、この限界城が鍵を握る。巨大コンピュータの敗北の教訓をすべてこの限界城に投入する。ワレラの力量を見せつけるのだ」

浮遊透過３Ｄスクリーンに限界城の模式図が現れる。まるで多数のヒトデを複雑に組み合わせて五次元まで昇華させたような見るに堪えない姿をしている。様々なフォーメーションに展開可能な限界城を見つめるが、戦闘用アンドロイドでさえ吐き気を催す。そんな限界城を人間

は直視することができるのか。あの脳の形をした薄気味悪い巨大コンピュータの姿など比ではない。

警報が響く。何とも言えない独特の警報だ。

「伊賀に四貫目がいます」

「ワタシが対処しよう」

三太夫に変身した戦闘用アンドロイドが席を立つ。

このあと四貫目は五次元の生命体が限界城を構築したことや三太夫に変身した戦闘用アンドロイドになんとか勝利したことを報告するためにホワイトシャークに戻ったことについては第八十二章「限界城」に記した。

第八十四章　体外離脱

第八十五章　対抗策

第八十章から前章までのあらすじ

金環日食を利用して伊賀から逃れたキャミとミトは大統領府に戻るが、戦場と化していた。改心したカーン・ツーのお陰で再び伊賀に逃げる。ホワイトシャークは負傷したカーン・ツーを救出してキャミを探すために伊賀に向かうと限界城が現れる。

体外離脱途中で戦闘用アンドロイドに誘拐された百地三太夫は恐ろしい戦闘能力を持ったアンドロイドとなって四貫目と戦うが、何とか勝利した四貫目がホワイトシャークに救助される。

限界城では戦闘用アンドロイドが地球攻撃の準備をしていた。

【時】永久０２９７年５月

【空】地球

【人】キャミ　ミト　ホーリー　サーチ　Ｒｖ２６　ミリン　ケンタ

四貫目　お松　住職　ＭＹ２８　ＭＡ６０

＊＊＊

なぜ、永久紀元前４００年の伊賀で戦闘用アンドロイドが三太夫と入れ替わったのか。それ

は伊賀から戻ってきたキャミとミトを載せた時空間移動装置を戦闘用アンドロイドが略奪したからだ。

つまり、人間とアンドロイドの複雑な戦争の最中、戦闘用アンドロイドがどこからか地球にやって来て、いつ紛れ込んだのかは分からないが、キャミとミトの時空間移動装置の履歴を手に入れて、その後百地三太夫と入れ替わったことだけは確かだった。

これを確認した四貫目はケンタ、ミリン、お松とともにホワイトシャークに戻って報告した。

＊＊＊

「信じられないわ」

サーチの第一声は艦橋にいる全員の気持ちを代表していた。

「三太夫のアイディアを昇華して五次元の難攻不落の限界城を建設したとは！まるでお伽噺じゃ」

この住職の見解に即座に四貫目が反論する。

「そのような生やさしいものではありません。限界城内部はよく分かりませんが人間にとって脅威です。あの城の姿、色、音、震動、すべてが耐えられないほどの不快なものだと思われまする」

ここでホーリーが待ってましたと発言する。

「アンドロイドにとっては？」
四貫目がハッとしてホーリーを見つめる。
「アンドロイドにも同様と思われまする」
四貫目の語気が弱まる。ここでＭＹ２８が発言すると言うよりは説明を始める。
「通常のアンドロイドと戦闘用アンドロイドは根本的にまったく異なるアンドロイドです」
「えー、それは初耳だわ」
サーチがＭＹ２８に詳しい説明を要求する。
「以前、戦闘用アンドロイドの開発製造の過程を説明しました。覚えていますか」
「ノロと長官のせめぎ合いと、生殖機能を持つアンドロイドと戦闘用アンドロイドの誕生の話のことね。驚きの連続だったわ」
「ノロは命令で戦闘用アンドロイドを製造しましたが、その手法はいい加減というか適当でした。その代わり手を抜いた時間を生殖機能を持つアンドロイドの開発に投入しました」
周りの雰囲気を確認するとＭＹ２８がＭＡ６０を見つめながら続ける。
「その結果、中途半端な戦闘用アンドロイドが製造されて男の軍隊に配属されました。混沌としたアンドロイドの歴史の始まりです」
言葉を挟む者はいない。
「男の軍隊の戦闘用アンドロイドを捕虜にした女の軍隊は、分解して男を殺す戦闘用アンドロ

イドの製造に着手しました」
ホーリーが焦れったそうにＭＹ２８を見つめるとサーチが促す。
「アンドロイドにとっても『限界城が脅威かどうか』という疑問に答えて」
ホーリーも大きく頷きながらＭＹ２８の言葉を待つ。
「申し訳ありません。少し説明がくどかったようです」
ＭＹ２８が頭を下げるとサーチがＭＹ２８に笑顔を向ける。
「ＭＹ２８。よく分かりました」
「えー？」
ホーリーが不満そうにサーチを見つめる。艦橋にいる人間、アンドロイドを問わず、つまり海賊全員がサーチに注目する。
「今のＭＹ２８の態度を見れば明らかだわ」
「あっ！そうか」
不満顔のホーリーの表情が一転する。
「人間と同じなんだ。アンドロイドにとっても限界城は脅威だ」
逆にサーチの表情が急変するとホーリーも鋭い視線をサーチに返す。
「ある意味、戦闘用アンドロイドは通常のアンドロイドとは別の進化の道を歩んだのかも」
「そうよ。今まで戦ってきた相手とはぜんぜん違うわ」

サーチは船長席前のディスクを拳で叩くと立ち上がる。全員の脳裏にこれまでの様々な戦闘が甦る。

巨大土偶、巨大コンピュータ、六次元の生命体……と強力な敵に対して、瞬示と真美の協力があったとはいえ、人類は知恵を絞ってアンドロイドとともに戦ってきた。しかし、今や別の道を歩んで進化した戦闘用アンドロイドに攻撃を仕掛けられている。

「問題は、戦闘用アンドロイドはノロが造ったアンドロイドだということ！」

ホーリーがサーチを見上げると駆けよる。

「これからどうする！船長！」

「まず、戦闘用アンドロイドの分析から」

「ふりだしからのスタートか」

「そんなことはないわ。私たちはノロから知恵をたくさん引き継いでいるわ」

サーチがＭＹ２８とＭＡ６０を力強く指差す。

「ノロが心血を注いで製造した……」

サーチが一旦言葉を止めるがすぐ続ける。

「製造って、ノロにとってどういう意味なのかしら」

それまでと違ってＭＹ２８がサーチに檄を飛ばす。

「同時期に製造されたアンドロイドとして、戦闘用アンドロイドと戦うことに躊躇はありませ

ん」

発言を控えていたＲｖ２６が手を上げる。

「ワタシはその頃よりもっと古いアンドロイドです。でもワタシはホーリーや住職やミリン、そしてあの瞬示、真美との接触から得たデータのお陰で一人前のアンドロイドに成長しました。ワタシが申しあげたいのは以上です」

ホーリーが驚いてＲｖ２６に近づく。数々の苦しい戦いを共に凌いできたＲｖ２６の手を握る。もちろん違和感はある。あの大柄なＲｖ２６ではなく目の前のＲｖ２６はノロそのものだから。

「大丈夫だ。この世の中に最悪という事態は絶対起こらない。なんとかなる」

「ホーリーの言うとおりだ」

雰囲気は少し高揚するが長続きしない。

「ホーリーの危機感に話を戻しましょう」

サーチがホーリーを冷ややかに見つめる。

「ネガティブになったり、ポジティブになったり……」

「不安定だ」

「それは人間の特権よ」

サーチとホーリーの会話に珍しくＭＡ６０が割り込む。

「それはアンドロイドでも同じです」
「少し、感情が重なりすぎているようじゃ」
住職が戒めのイエローカードを全員に配るように諭す。
「そろそろ、整理をしようじゃないか。といっても大した整理じゃない」
住職が四貫目に視線を移す。
「現場で苦労したのに寡黙じゃ。でも今回は違う。四貫目、簡潔な説明、それはそれでよいが、今、求められているのは、四貫目、お松の詳細な報告じゃ。わしが『ヤメ』というまで見たこと聞いたこと、すべて詳細に話してくれまいか」
住職がまず四貫目に、そしてホーリーに、最後はサーチに目配せする。反対する者は誰もいない。四貫目が恐縮して口を開く。

＊＊＊

「拙速ながら敢えてそれがしの意見を申しあげまする」
それなりの術者ではあるがかなり緊張している。しかし、間を置くことが後悔に繋がるというような感覚でよどみなく言葉を発する。
「それがしの考えが間違っているかもしれませぬが……」
四貫目が前提条件を付けてから続ける。

「……まずあれから三太夫がどうなったのかは分かりまぬが、三太夫に変装したアンドロイドを私が片付けました。いずれ彼らは三太夫と同じように極秘裏に地球連邦政府の大統領であるキャミを誘拐するはず。そしてキャミになりすまして地球の全権を掌握する作戦に出ると思われまする」

サーチ以下四貫目の説明に驚愕するが、ホーリーが言葉を選びながら意見を述べる。

「その予備実験として三太夫になりすましたのかもしれないが、四貫目に阻止されたのは意外だったろう。でも得たいのしれない限界城に彼らがいるということは脅威だ。取りあえずキャミの身辺警護を厳重にしなければ」

キャミとミトがホーリーに頭を下げるとサーチが冷ややかな声を発する。

「いいえ。それよりもっとするべき大事なことがあるわ」

「えー？」

サーチに視線が集まる。

「大統領選の準備を急ぎましょう」

「なるほど。サーチの言うとおりだ」

それまで黙っていたミトが小膝を叩いてキャミを見つめる。少し首をひねったあと頷きながらキャミがミトに微笑む。そしてミトとキャミに続いてサーチの意図を理解した住職が続く。

「キャミは永遠生命保持の再手術を受けていない。かなり高齢じゃ。だから大統領の交替がべ

ストじゃ」

キャミがミトの手を握りながら発言する。

「もちろん再手術を受けるつもりはありません。それより私に求心力はありません。でも選挙までの任期は全うします」

「それではキャミ大統領。大統領選挙の公布をお願いします。できるだけ派手に」

「派手に？」

「選挙となれば、しかもキャミが立候補しないとなると、キャミを誘拐する理由はなくなります」

「それでは誰を次期大統領に推すかじゃのう」

「サーチは？」

キャミが提案するが、サーチは首を横に大きく振って否定する。

「そんな器量はないわ。それに今回は生命永遠保持手術を受けている者は外すべきです」

ホーリーが頷くとおもむろに応える。

「個人的には、今回の大統領選挙の候補者に最適な人物は……」

第八十六章　束の間の通信

【時】永久０２９７年５月

【空】地球

【人】キャミ　ミト　ホーリー　サーチ　Ｒｖ２６　ミリン　ケンタ　住職　リンメイ
フォルダー

＊＊＊

「えー！」

ホーリーの発言に驚きの反応が艦橋に充満する。その中でＲｖ２６だけがキョトンとしてホーリーを見つめ続ける。船長席のサーチがそんなＲｖ２６に追い打ちをかける。

「私もＲｖ２６がふさわしいと思うし次期大統領に誰かを指名して辞めるべきだわ。そして選挙をする……」

キャミがサーチに首を横に振る。

「今の状況を考えると選挙は難しいわ」

サーチがきっぱりと言い切る。

「選挙は絶対に必要よ」

ミトがキャミの気持ちを汲んで発言する。
「選挙妨害で投票ができなかったり、投票箱が盗まれたりすれば？」
サーチ、ホーリー、キャミ、ミトのやり取りが一段落するとＲｖ２６が手を上げるが、誰も気付かない。
「ゴホン」
そのＲｖ２６に助け船を出すような咳払いが天井からする。
「みんな勝手なことばかり言っていますが、本人の意見を聞くべきではないでしょうか」
やっと全員の視線がＲｖ２６に集中する。でも発言を求めるのではない。サーチがＲｖ２６に近づいて微笑む。
「本当にノロそっくりね」
「ブラックシャークのチューちゃんといい、ホワイトシャークのチューちゃんといい、ノロそっくりだ」
「ここにノロがいたら四つ子だわ！まるで四つ身分身の術みたい」
「ノロ得意のジョークか」
先ほどまでのやりとりとは変わってサーチ、ホーリー、キャミ、ミトが和やかに言葉を交わす。
「ノロは自分が男前だと思っていたから、何でもかんでも自分をモデルにしたのかなあ」

ホーリーが冗談とも本気ともとれる感想を述べる。
「Ｒｖ２６が『実は私はノロです』と言ったら、絶対みんな信用するわ」
「船長、副船長。Ｒｖ２６の意見を聞こうじゃないか」
住職がたしなめると控えめなリンメイが住職の脇腹を小突く。
「まあ、いいじゃないの。息苦しい雰囲気の中で軽い話も必要だわ」
「そうじゃな。わしもずいぶんリラックスできた。しかし、じゃ……」
この間隙をぬってＲｖ２６が発言する。
「少しもリラックスできません」
サーチがＲｖ２６の前でヒザを着いて同じ高さの目線を確保する。
「Ｒｖ２６……」
Ｒｖ２６は少し緊張した面持ちでサーチを見つめる。同じようにキャミもＲｖ２６の横でひざまずく。
「ちょっと待ってください。ワタシは単なる選択肢のひとつなのにまるで大統領に決まったような話じゃありませんか」
キャミがＲｖ２６の手を握る。
「改めて正式に推挙させていただきます。戦闘用アンドロイドの出方次第によりますが選挙ができないかもしれません。それでも地球連邦政府の大統領に就任してください」

「ワタシでいいのですか？」
Ｒｖ２６だけではなく、艦橋にいる全員がＲｖ２６、キャミ、サーチをじっと見つめる。
「もちろん。Ｒｖ２６は一番信頼できるアンドロイドだわ」
「それに人間の信頼も厚い」
ホーリーが真剣な眼差しを向ける。
「待ってください。それは昔の話。今のワタシではありません」
「確かに。今のＲｖ２６が『ワタシはＲｖ２６です』と自己紹介してもアンドロイドは誰も信じないだろうな」
「その身体になった経緯をキチンと説明すればいいわ」
サーチが笑みを浮かべながら続ける。
「ノロは相手に警戒心を抱かせることはなかった。風貌が……どう言えばいいの？ノロそっくりのＲｖ２６を見ればアンドロイドだけではなく人間も安心感を持つと思うわ」
「同感だわ」
同調するキャミの言葉にすぐさまホーリーが反論する。
「確かにノロの容姿はほのぼのとして相手に安心感を与えるかもしれない。でも、ほとんどの地球の人間はノロのことを知らないし、アンドロイドもそうだろう。当てにならない第一印象がいいからと言って大統領に推挙するのは無責任だ」

「だったら、なぜＲｖ２６を推薦したの！」
「それは……そのー。俺はなぜ推薦したんだろ。でも……」
サーチの強力な異議にホーリーが狼狽えるとＲｖ２６が近寄る。
「今のワタシは以前の姿と比べれば、絶対相手に威圧感を与えることはないでしょう。かといって、ホーリーの言うとおり、それだけの理由で……」
我が意を得たりとホーリーが割り込む。
「そうだろ！もう一度よく考えよう！」
Ｒｖ２６がホーリーを見上げるとノロがよくする「ふんふん」という表情を見せる。それを見たサーチがキーの高い声を出す。
「ノロそのもだわ」
ミリンも負けてはいない。
「ノロだと白状して！」
すぐさま「そうだ、そうだ」という声が連続する。キャミが、そしてミトも大きく頷く。急に雰囲気が変わったことに驚いたホーリーが両腕を広げて興奮した声を押し戻そうと大声をあげる。
「分かった！でもノロに似ているからと言う理由で大統領に推挙するのは間違っている！」
サーチがＲｖ２６からホーリーに近づく。

「見た目は大事だわ」
「誰もが安心感を持つのよね」
風鈴が鳴るようなさわやかなミリンの言葉が決定打となる。否定する者がいないばかりか、賛同する声が充満する。その雰囲気にＲｖ２６は覚悟を決めたのか、背伸びをしてから周りを見渡す。
「ワタシは偉大なノロではありません」
まず釘を刺す。緩んだ風の温度が下がる。
「この光栄な推挙に異議はありません。やっと正式に発言の機会が与えられたようですね。要は容姿や雰囲気の問題ではなく、戦闘用アンドロイドからキャミを守り、その上で今の地球の混乱を収拾するための指導者として、果たしてワタシでいいのか。もっと適任者がいるのでは？そこのところをよく考えていただきたい。その上での指名であればワタシは推挙を受けます。そして人間のために、アンドロイドのために最善の努力をするつもりです」
このＲｖ２６の言葉を聞いた全員が大きく首を縦に振る。
「やっぱり私は次期大統領にＲｖ２６を推挙します」
キャミがＲｖ２６を抱きしめる。胸のなかでＲｖ２６がもがきながら頷くとキャミは明瞭な母音を基本とした言葉を続ける。
「でもサーチが言ってたように選挙をせずに推挙で次期大統領を決めるという考え方には反対

します」

この急変した言葉にサーチが驚く。

「確かに大統領が言ってたように現状を見れば選挙はとてもじゃないけれど……」

「サーチ！あなたは絶対、選挙すべきだと言っていたわ」

「現実が厳しいこと、大統領の見解どおりです。大統領こそ……」

これまで朝令暮改のように議論が右往左往するが、ここでＲｖ２６が終止符を打つために再確認を求める。

「状況は最悪です。今は休戦してますが、いつ再発するかもしれない。まともな選挙ができる可能性は極めて低い。元はと言えば戦闘用アンドロイドのキャミ大統領拉致をどのように防ぐかがスタートで、その解決策の柱としてワタシを大統領に仕立て上げるというのが今回の議論のはず」

議論のスタートとゴール地点を明確にしたＲｖ２６の発言に雰囲気が一気に引き締まる。キャミが髪の毛を掻き上げながらＲｖ２６に頭を下げる。

「ごめんなさい。私のことを心配してくれているのに、バカなこと言って。長い間、将軍や大統領をしていたから上から目線の見方しかできなくなってしまった。もう大統領の資格はないわ」

「そんなことはありません」

サーチがキャミを見つめる。そして今まで一言しか口を挟まなかったミトがキャミに近づくと抱きしめる。キャミの目から涙がしたたり落ちるとミトは身を退く。
「こんないい引き際はない。Ｒｖ２６がチャンスを与えてくれたんだ」
ミトがＲｖ２６に向かって身体をひねる。
「確かにＲｖ２６の言うとおり、戦闘用アンドロイドが大統領を拉致する可能性は高い。しかし、気力が失せた大統領を拉致したところでいったい何になるんだ」
ある意味、妻であるキャミをこき下ろすような発言にまずサーチやホーリー、住職やリンメイが驚く。一方、当のキャミは素直に頷くとミトが続ける。
「言葉は悪いがなんとかＲｖ２６を大統領に仕立てて、この困難な事態を収拾して信任を得てから選挙をすればいいのでは？」
「まったくそのとおりじゃ」
ミトの意見に住職が感極まって頭を叩きながらミトとキャミに歩み寄る。
「議論を進めよう。これから言うことは、Ｒｖ２６に無理をお願いするためには非常に大事なことじゃ」
住職がいつものように周りを見渡すが、異議の視線はない。
「それではキャミに尋ねる。これまでのあなたのポジションを教えてくだされ」
「ポジション？」

Ｒｖ２６がしっかりと住職とキャミを見つめる。しばらく沈黙が続く。こんなとき必ず口火を切るのはホーリーだ。

「住職が言いたいのは、アンドロイドに子供を産ませてもいいのかどうか、キャミはどちらの考えに立って今まで治世してきたのか、ということだ」

頷く住職に気付くことなく、落着きを取り戻したキャミがよどみなく応える。

「初めは反対でした。アンドロイドが子供を造っても……このことを話しだすとキリがないわ」

「省略していただいて結構です」

サーチが促す。

「根本的にはノロが実行しようとしたアンドロイドに子供を産ますことには反対でした。そして人間は私の考えに賛成するものだと思っていましたが、思いも寄らない結果になったのです。人間の意見が真っぷたつに割れました。そしてアンドロイドたちの考え方も真っぷたつに分かれました」

「そして悲しい複雑な戦争が始まった」

うなだれるキャミを見つめながらサーチが続ける。

「要するにキャミは反対派だった。でも今は？」

「改めて明確な表明はしていません。今の立場はと言われれば、それは秩序優先です」

「よく分かりました。でも、争点をぼかす訳には行かないわ」

サーチが強く主張すると住職がＭＡ６０の膨らんだお腹を見つめながら割り込む。
「そのとおりじゃ。選挙をするのならＲｖ２６はアンドロイドに子供を産ませることに賛成か反対かを明確にして立候補しなければならん」
ホーリーが続く。
「まずＲｖ２６が人間からもアンドロイドからも信頼されなければならない。どちらのポジションに立つのかということも大事だが、一番大事なことはアンドロイドから人間の傀儡政権ではないかと疑われないようにすることだ」
「ホーリーの意見も重要じゃ。まず、しっかりと環境と整えることが先決じゃ。時間はないが、それまではキャミに踏ん張ってもらわねばならんのう」
サーチが結論する。
「住職やホーリーの意見が正論だわ。なんとか選挙ができる施策を考えましょう」

＊＊＊

一応収束した結論に酔ったような雰囲気が漂う艦橋でキャミがふと漏らす。
「少し感情的になっていたかもしれない。意味のない空想や悲観的な展望に左右されて困難な現実に背を向けて独裁者のように振る舞ってしまった。でも今は違う」
そんなキャミにミリンがきっぱりと言葉を放つ。

「そんなことないわ。でも前提条件をしっかりと検証しなかったことが原因だわ」
この言葉にキャミはおろかミトも驚いてミリンを見つめる。サーチが眩しそうにミリンを見てから、同じように見つめるホーリーに囁く。
「みんなでＲｖ２６を次期大統領に推薦したけれど、ミリンにも素質があるような気がするわ。念のために言っておくけれど、我が娘というえこひいきじゃないのよ」
ホーリーが静かに頷く。
「住職も言っていたな。いつの間にかしっかりしてきた。でもミリンも生命永遠保持手術を受けている」
住職は微笑むだけで今はリンメイと共に傍観者の立場をとる。そしてミリンとキャミの会話に注目する。
「ミリン、遠慮なしに私の今までの施政を批判してください」
「はい。でも言いたいことはひとつだけです」
「ひとつしかないのですか」
キャミはほっとしたような表情を見せるが、それでいて首を傾げるという反対の態度をとる。
「教えてください」
キャミの言葉は丁重で謙虚な印象をミリンに与える。ミリンは緊張することなく堂々と意見を述べる。サーチもホーリーも身を乗り出してミリンを見つめる。

「本当にアンドロイドが子供を造ることができるのかということです」
何とも言えない異常な沈黙が誰もの心の中に居座る。地球の人間たちはノロの誇大妄想にも思える発想を知っているはずがない。仮に知っていても風評でそうかもしれないというレベルだろう。一方、アンドロイドは必ず子供を造ることが可能だと思っていただけだった。そうだとすれば誰もがアンドロイドの生殖機能を確かめることなく、バカげた議論をしていたことになる。
「ＭＹ２８とＭＡ６０は特殊なアンドロイドです。ノロの惑星のアンドロイドを含め、アンドロイドに子供を造る能力が本当にあるのでしょうか？」
念を押すミリンの言葉に半ばぼう然としていたキャミが我に返る。しかし、応えたのはＭＡ６０だった。
「可能性は高いはずです。ノロは私たち夫婦に子供ができることを前提に警告を出しました」
そしてＭＹ２８の方からＭＡ６０に身を寄せて妻を弁護する。
「ワタシも妻と一緒に聞きました。『アンドロイドは半永久的に生きながらえるので、子供ができれば、その子供が親を解体処分しなければアンドロイドの人口が増え続けることになる』と言われて、大きなショックを受けました」
ＭＡ６０が涙ぐむ。人間と同じようにごく自然に違和感なくポロポロと涙を流す。元医者のキャミ、サーチ、リンメイが同じことを考える。

――感情表現が人間と同じ。そこまでアンドロイドを人間化したノロの力量は神業に近い。でもノロは神ではない。巨大コンピュータのようにすぐに自分が神だという主張をしたのとはまったく違う。ノロのような人間がこの宇宙に存在しているのはなぜ？

そしてその疑問符が現実に向かっての感想は次のとおり。

――不可能だわ。でもノロなら可能にする術を持っているはず。だから躊躇しながらもＭＡ６０やＭＹ２８にあえて忠告したんだわ

無意識のうちに、キャミ、サーチ、リンメイが同時に合唱するように声をあげる。

「どうしてもノロに確認しなければ！」

しかし、そのノロはこの世界にはいない。たまらずサーチが三人の想いを天井に向かってぶつける。この想いはこの艦橋にいる者すべての想いだ。

「チューちゃん、ブラックシャークと連絡を取る方法はまったくないの？」

不意を突かれた中央コンピュータは意外にも即答する。

「ホワイトシャークはブラックシャークの兄弟船です。いえ、双子船です。いえ、夫婦船です。いえ、一心同体船です」

サーチがイライラしながら声を張りあげようとしたとき、ホーリーが怒鳴りつける。

「取れるのか、取れないのか！」

「可能です。たとえ、お互いの存在空間の次元が異なろうとも」

驚きのあまりホーリーだけではなく全員言葉を失う。しかし、すぐさまサーチが天井に向かって追求する。
「こんな大事なことをなぜ今の今まで言わなかったの！さっさと連絡を取りなさい」
「分かりました」
素直な返事に全員、口をあんぐりと開けて天井のクリスタルスピーカーを見上げる。しばらくするとクリスタルスピーカーが虹色に輝いて中央コンピュータの声がする。
「ブラックシャークの中央コンピュータと繋がりました」
「まさか！」
今度はクリスタルスピーカーがグリーンに輝く。視線が緊張感を維持したまま集中する。
「ゴホン。ワタシはブラックシャークの中央コンピュータ。今、六次元の世界におります」
疑いを抱く余裕などない。すぐさまサーチが哀願する。
「サーチです。ノロに代わってください」
「ノロはいません」
「イリは？」
「イリもいません」
「連絡を取ってください」
「取れません」

第八十六章　束の間の通信

「ノロはどこにいるのですか」
「わからん」
「その声はフォルダー！」
ホーリーが見境もなく興奮する。
「ホーリー、聞こえるか？瞬示と真美がイリを連れてブラックシャークの船外に出てノロ探索に向かった」
フォルダーの言葉に声をあげる者はいないが、さすがにホーリーは通信相手が旧友のフォルダーだけに興奮しながらも冷静に言葉を出す。
「情報を送ってくれ。こちらも送る」
親友同士の圧縮された会話が始まる。
「今、次元通信でデータを送信した」
天井から中央コンピュータの声がする。
「受信中です」
「受信確認した。そちらの状況を詳しく教えてくれ」
「どんな状況でもブラックシャークは対処可能だ」
「なんとかなるんだな」
ホーリーが張りあげた声をマイクに向ける。

「なんとかするさ……」
フォルダーの返事が雑音で遮られる。
「おい、次はどこで飲むんだ！」
「あの居酒屋……」
フォルダーの声がノイズの中で溺れてしまう。同じようにホーリーの声も深い次元の海に埋もれてフォルダーに到達することはなかった。しかし、ワンチャンスのデータ交換は確実に共有された。少なくともデータを傍聴していたＲｖ２６にはその内容がそのまま記憶装置に深く刻まれた。それまで息を止めていた全員の何とも言えない呼吸が聞こえてくる。
「中央コンピュータ！フォルダーから送られてきたデータの分析結果を教えてください」
サーチのていねいな命令に中央コンピュータが即答する。
「あとで詳しく説明しますが、ブラックシャークとの通信は以後不可能かもしれません。なぜならブラックシャークはもう元のブラックシャークではなく六次元の宇宙戦艦に変態したようです」
「どういうこと！」
サーチの檄が飛ぶ。
「皆さんに理解しやすい言葉を探します」
沈黙が流れる。少し時間を置いてから咳払いがすると低い音声が流れる。

「うーん、難しいな。もうブラックシャークは単なる宇宙海賊船ではありません。次元を自由航行できる多次元海賊船に変身しました。無敵の海賊船です」

第八十七章　大統領就任

【時】永久０２９７年５月

【空】地球

【人】ホーリー　サーチ　Ｒｖ２６　ミリン　ケンタ　住職　リンメイ

＊＊＊

激しかった戦闘も一旦収まるといつの間にか人間もアンドロイドも延長戦を戦う気力が消滅したかのように静かになった。ミリンが言ったように感情だけが先行して、興奮したままバカげた戦闘を始めた自分たちに嫌気がさしたのかもしれない。あるいは誰が味方で敵かの区別ができない戦闘を通じて疑心暗鬼に陥った結果、再び結束することができなかったのかもしれない。そして妊娠したアンドロイドの女性を探すが、ＭＡ６０以外ひとりも見つからなかった。

一方、恐れていた戦闘用アンドロイドの妨害は今のところない。

「戦闘用アンドロイドの目的をもう一度精査する必要があるわ」

「ひょっとして彼らはノロを恨んでいるのでは？」

「そうかしら。戦闘用アンドロイドを戦争に投入した男の軍隊や女の軍隊、いや人間そのものを恨んでいるのかも」

「そうすると全人類の抹殺が目的？」
「アンドロイドだけの世界を目指そうと考えているのかも」
誰もが巨大土偶を思い出す。サーチとホーリーの会話が続く。
「最長や広大は六次元の世界のアンドロイド、つまり巨大土偶を非常に恐れていたわ」
「ネズミ算的に子孫を増やす巨大土偶に手を焼いていた」
「そのうち他の次元でも同じような悩みを持っていないか調べているうちに三次元の私たちの世界に注目したのね」
「そして瞬示と真美を地球に派遣した」
「三次元の世界でも同じことが起こるかもしれないと考えてのうえね」
ホーリーは頷くと首を縦に振る人数を確認する。
「最長は瞬示と真美の情報からアンドロイドの生みの親であるノロの存在を知ってその知恵を借りようとした」
「ノロはアンドロイドも人間と同じように子孫を残していずれ独自の文明を持つという前提でアンドロイドを製造したから最長の判断は正しかったわ」
「同感だ！」
周りの者がすぐに同調する。ここで議論をまとめるのを自分の使命だと信じて疑わない住職が一歩前に出る。

「一言で言えば、ノロの知恵を下敷きに巨大土偶の寿命を制限して生命体と同じように子孫を通じて別の文明を持たせようと考えたのじゃ。初めからこう考えて巨大土偶を製造すればよかったのに何も考えずに乱造したからにっちもさっちも行かなくなってしもうた。大昔、原子力発電所をドンドン建設して事故が起きてから大慌てしたわしらの祖先と同じような過ちを犯したのじゃ」

「俺たちの世界と同じように六次元の生命体も男女に分かれて戦争をしていて、相手を抹殺するために巨大土偶を製造したのかも」

「そうかしら。まあ、どちらでもいいけれど」

サーチがフーッと息を吐いてから横道に逸れかかった議論を元に戻す。

「とにかく高度な文明を持った六次元の生命体が、ただ自己増殖するだけの巨大土偶を誕生させてしまった。繰り替えすが、三次元の世界ではノロが増殖の暴走を回避する手立てを考えてアンドロイドを製造した」

「でも戦闘用アンドロイドを製造して混乱が起きているわ」

「だから戦闘用アンドロイドが何を考えているのか、精査しなければならない。そう提案したのは船長じゃないか」

ホーリーがサーチに不満そうに見つめる。

「そうだったわね」

サーチはホーリーでなく全員に頭を下げる。
「今やアンドロイドは高度な感情を持っているわ」
そんなことは百も承知だとまだ不満顔のホーリーが感情を抑えて議論を進める。
「しかも戦闘用アンドロイドはどうやら五次元の空間を、と言ったらいいのか、四貫目の報告によると五次元の世界と関わりを持った」
「限界城のことね。でも限界城とは？」
「限界城がどういうものか、まずこれを調べなければ」
「なぜ五次元なのかしら」
「所詮三次元の俺たちにとって四次元も五次元も六次元も認識できない。高次元であることが問題なんだ。それに時間軸を複数以上持つ世界にいる生命体は三次元の世界の時間を制御できる。これはノロの教えから明らかだ」
「しかし、三次元の人間が、つまり四貫目は五次元の世界と関わりを持った戦闘用アンドロイドに打ち勝ったわ」
「知恵というものは次元に左右されない。現にノロは六次元の世界に招待されたじゃないか」
「ノロならばこその次元を越えた知恵じゃ」
「限界城に関する資料はないのか」
そのときふつふつとＲｖ２６の身体に力があふれる。まるでノロが乗り移ったようにきっぱ

りと言い放つ。
「なぜ、フォルダーがワタシにＰＣ９８２１のマザーボードを埋め込むように指示したのか。今、ワタシは……」
急に語尾に勢いがなくなると苦悩の表情をしたためてＲｖ２６が目を閉じる。まるでバッテリーが切れたあとスイッチを切ってわずかに残った電気をかき集めているように見える。Ｒｖ２６は静寂に包まれた艦橋の緊張感をよそに次の単語を模索する。そして再起動するかのように目を開ける。
「ＰＣ９８２１のマザーボードをなぜ埋め込まれたのか、なんとか理解できた」
ホーリーがＲｖ２６をしげしげと見つめながら尋ねる。
「なんとか？」
「現段階では、なんとかです」
「どういう意味？」
サーチが追従する。
「それは、まだＰＣ９８２１の性能を百パーセント引き出してないからです」
ノロの姿をしているが、アンドロイドの中のアンドロイドで歴戦の勇士であるＲｖ２６に新たなイメージが加わる。まずサーチがイメージする。
――Ｒｖ２６はアンドロイドのノロになるのかもしれない

ホーリーが追従する。

――ノロはいったいＲｖ２６に何を託したのか

晴々とした表情に変わったＲｖ２６が短い背筋を伸ばす。

「選挙運動に没頭します」

「具体的には？」

サーチが気の抜けた言葉を吐く。

「生命永遠保持手術に始まって過去の長い男と女の戦争、そして巨大土偶の出現と巨大コンピュータとの戦い。そして六次元の生命体の瞬示や真美の存在とノロの活躍。あっ！もうひとつ忘れていました。パラレルワールドの一太郎と花子が発明した無言通信。公約にはなりませんが、これだけの物語を伝えれば票を集めるのには十分でしょう」

Ｒｖ２６が胸を張って見上げる。すぐさまキャミが声を上げる。

「今のところほかに立候補者がいないけれど、過去の事実を伝えるだけで未来に対してビジョンを示さない演説で選挙ができますか？」

今度は住職がキャミに反論する。

「過去のことに口を閉ざして、実現できるかどうか分からない未来のことを演説するのは限りなく詐欺に近い行為じゃ」

＊＊＊

結局立候補者はＲｖ２６ひとりだった。
「無投票当選か。Ｒｖ２６が訴えようとした選挙演説はできないな」
「構いません」
「？」
「前に言った物語を就任演説に変更します」
「えー！あんな長い物語を？選挙演説なら何回かに分割して話ができるが、丸一日ぶっ通しでするなんて聞いたことがないわ」
「映像を使うこともできます。もちろん編集はしますが、ごまかしはしません」
「宣伝と思われるかもしれない」
「そうでしょう」
Ｒｖ２６の素直な返答にサーチ以下全員が驚く。
「ワタシがしゃべる過去の出来事を見てワタシが大統領にふさわしくないとしたら、すぐさまリコールできる臨時的な制度を造ります」
「なぜ、臨時的な制度にするんだ」
「安定性に欠ける制度は臨時的に使うのがコツだと考えました」
この言葉にサーチ以下人間だけが驚く。Ｒｖ２６の考えがまともなのは当然として、住職は

人間というものが感情に揺れがあること。大きく揺れてもすぐ忘れること。このふたつの短所から墓穴を掘るというクセをＲｖ２６が見抜いたことに気が付く。つまり、卓越したアンドロイドが人間の本質を見抜いていた。

――Ｒｖ２６の思考はノロと同じでは

「それではワタシは所信表明演説と遊説の旅に出ます」

「待て！」

ホーリーがＲｖ２６の前に立ちはだかる。

「昔のお前なら護衛は要らなかったが、今のお前、失礼、大統領にはそれなりの護衛が必要だ」

「戦闘用アンドロイドの妨害のことなら心配は要りません」

「？」

「無言通信のようにはいきませんが、アンドロイド同士の通信は単純です。だから、なんとかなるでしょう」

「なんとかなる？お前、いや、大統領はいつからそんなにいい加減な考え方を持ったんだ。それじゃ、まるで……」

「『ノロのようだ』と言いたいのでは？」

この言葉にホーリーが驚く。住職が頷きながらそんなホーリーの肩を叩く。しかし、声を出したのは住職でもホーリーでもなくサーチだった。

「あなたは本当にＲｖ２６なの！」
ミリンがすぐさま反応する。
「そうじゃない！ノロの分身だわ！ノロが分身の術を使ったんだわ」
突然Ｒｖ２６が大きな声をあげて笑う。
「そうか！分身の術か」
天井からも笑い声が聞こえる。
「そうだったのか。わっはっはー」
しかし、サーチもホーリーも住職もリンメイも……ミリンを除いて笑う者はいないし、艦橋にいる海賊さえ真っ青になる。
「それでは大統領就任式に行きます」
Ｒｖ２６は短い脚をしっかりと前進させると艦橋から消える。
「ケンタ！行くわよ」
ミリンがケンタを引きずるようにしてＲｖ２６の跡を追う。

第八十八章　禁断の多次元エコー

【時】永久０２９７年５月

【空】地球（大統領府）

【人】ホーリー　サーチ　Ｒｖ２６　ミリン　ケンタ　住職　リンメイ　四貫目　ＭＹ２８

＊＊＊

大統領府前の大きな噴水がある公園でＲｖ２６の極めて長い就任演説が終了すると数万人の聴衆が割れんばかりの拍手を送る。Ｒｖ２６が止まらない拍手を制するジェスチャーを何度も繰り返すが、手拍子に変わった拍手を止めることはできない。この中継放送をホワイトシャークの艦橋の浮遊透過スクリーンで見つめるサーチ以下乗務員は誇らしげなＲｖ２６にエールを送る。いつしか艦橋に戻ったミリンが思わず声をあげる。

「巨大土偶のミニチュアみたい」

「まあ、本人がいないから、いいか」

ホーリーが特別許可を出すとサーチがミリンに応じる。

「確かに感じが巨大土偶に似ているわ。それより声はもちろんのこと、しゃべり方までノロに似てきたわ」

「しかし、集まった人間もアンドロイドもあんな長い演説を感心して聞いていたな」
「心配していた戦闘用アンドロイドの妨害はなかったわね」
ミリンがケンタに笑顔を強要する。サーチはそんなミリンから四貫目に視線を向ける。
「四貫目にやられたから用心しているのかしら」
四貫目がサーチに近づく。
「勝負はついておりませぬ」
「？」
「三太夫に変装した戦闘用アンドロイドは首から下を失いましたが、頭は無事でした」
ホーリーが四貫目に反論する。
「アンドロイドのＣＰＵは胸に埋め込まれている。四貫目が戦った戦闘用アンドロイドの頭部は両目、つまり連装レーザー銃を装備しただけの単なる武器じゃないか」
「いえ、違います」
ＭＹ２８が席を立って議論の輪に入る。
「ホーリーのアンドロイドに対するＣＰＵの認識は我々、つまり通常のアンドロイドには通用しますが、戦闘用アンドロイドには通用しません」
「えっ！戦闘用アンドロイドは違うのか。なぜ無防備な頭部にＣＰＵを埋め込んだんだ？」
「ホーリーの質問は『戦闘用に製造されたアンドロイドの頭部になぜＣＰＵをあえて埋め込ん

だのか』ということですね」
ホーリーとＭＹ２８のやり取りに全員が注目する。
「我々にはＣＰＵがひとつだけ胸に埋め込まれています」
大統領府前の公園の映像が消えた浮遊透過スクリーンにアンドロイドの身体の模式図が現れて胸のところで赤いハートマークが点滅する。
「これが我々のＣＰＵの位置です。戦闘用アンドロイドはこうです」
スクリーンは戦闘用アンドロイドの模式図に変わる。胸だけではなく頭部、両肩の付け根、両太ももの付け根に青いハートマークが点滅する。
「六個のＣＰＵが埋め込まれています」
「知らなかった」
ホーリーが脱帽する。しかし、サーチは驚かない。
「そう言えば、瞬示や真美の身体を調べたとき、それこそ全身の関節という関節に脳が分散していたわ（第二編第三十七章「ふたりの身体」）」
すぐさまリンメイが肯定するとホーリーが尋ねる。
「ノロがそのように設計したのか」
返事がないのでホーリーが続ける。
「やはり戦闘用アンドロイドのＣＰＵの配置はノロ独自の設計か」

「ノロ以外の誰が戦闘用アンドロイドを製造できるのですか。手を抜くといってもそれなりのものを造るのがノロの本能です」

「本能！」

ホーリーが叫ぶとサーチが声に出さずに呟く。

――本能……。それは生命の根本原理

サーチはホーリーにゆがんだ苦笑とも受け取れる微笑みを向けたあと、若干大きめの声を出す。

「これまで分かったこと。その分かったことに対して疑問を持たなかったこと。そのすべてが、どうも疑わしいわ。私たちの知識をリセットして一から検討する必要があるわ」

「そのとおりじゃ」

住職が床に座ると真新しい数珠を握る。

「ノロがいない今、ふりだしに戻って考え直さなければならん。そうしないとノロの考えを曲げて理解してしまう危険性があるぞ」

「当面の問題として、戦闘用アンドロイドに対してどう戦うのか。しかし、アンドロイドに有効な最強の兵器、多次元エコーがホワイトシャークには装備されていない」

「なぜ、ノロは多次元エコーをホワイトシャークに装備しなかったのかしら」

前々から思っていた全員の共通した疑問が中央コンピュータに向かう。

「その前に重要なことを申しあげます。多次元エコーはこの宇宙にひとつだけしか存在が許されない代物なのです」

「何だって！」

誰もが中央コンピュータの次の説明に集中する。

「この宇宙は三次元ではありません。言い換えれば三次元の世界だけが存在するのではなく、あらゆる次元の世界が集合する時空間なのです」

黒色の浮遊透過スクリーンを背景に白色の複雑な算式が流れる。

「このモノクロの世界を三次元の世界だとします。つまり我々には色を認識する能力がないとします」

まるで黒板に白いチョークで意味不明な数えきれないほどの算式が書かれたような浮遊透過スクリーンの、その算式のひとつが赤色に変わる。

「この赤い算式を認識できる生命体がいるとしましょう。その生命体を『四次元の生命体』と呼ぶことにします」

艦橋にはため息すら漏れない。誰もが息を止めているような沈黙が続く。

「我々に見える算式は白いままです。この算式を赤いと感じることはできません」

少し離れた算式が黄色に変化する。

「先ほどの四次元の生命体には黄色は感知されません。しかし、五次元の生命体は認識します。

白と赤と黄色を区別する能力があります」
赤の算式からかなり離れたところにある算式が白から緑に変わる。
「この変化に気付くのは六次元の生命体です」
ここで初めてホーリーが指を折りながら声を上げる。
「次は青だろ。そして……白と七色すべてを見分けられるのは一〇次元の生物だ」
ホーリーのリクエストに応えるように一部の算式の色が青に変わる。
「もう、お分かりでしょう。この宇宙には次元が異なる世界が同居しているのです。これが我々のいる宇宙なのです」
沈黙が消えて動揺が広がる。中央コンピュータが問いかける。
「少し前に六次元の世界に行ったブラックシャークと通信できたこと、覚えていますか」
「忘れるものか」
ホーリーが叫ぶとサーチが低い声を出す。
「まったく異なる宇宙にブラックシャークが行ったと思っていたけれど、違うのね」
「そうです。同じ宇宙にいます」
サーチよりも早くホーリーが頷く。
「ひょっとして多次元エコーは、元々同じ宇宙にある他次元を見るための装置だったかも！」
「さすがホーリーですね。ワタシも同じ考えです。ノロはこの宇宙に四次元以上の世界が同居

していると確信していたのでしょう。でもワタシたちはこの宇宙全体を三次元の世界だと思い込んでいた。しかし、他次元の物質が潜むこの宇宙の本当の姿を知ろうとノロが造り出した多次元エコー。それが不思議な兵器になりました。高次元の生命体ではなし得ない、つまり三次元の生命体であるからこそ、なし得た偉大な業績です」

「理解できないわ。なぜ、三次元より高度な四次元や五次元……いえ、なぜ高次元の生命体が多次元エコーを開発しなかったの」

「それは明白です。次元が低いほどこの宇宙がはっきりと見えないのです。モノクロの世界の人間が色を求めるのは当然なのです。総天然色カラーの映画を見たい。誰もがそう思った時代がありました。歴史で学びませんでしたか」

「なあ、チューちゃん」

ホーリーが場違いの親しみのある声を出す。

「俺たち三次元の貧乏生命体は、豊かな高次元の生命体よりハングリー精神が旺盛なんだ。そういうことか？」

「その辺は何とも……」

中央コンピュータに否定されたホーリーを押しのけて住職が大声をあげる。

「そのとおりじゃ！わしゃ、悟ったぞ。追いつめられても不屈の精神で逆境をはねかえす。みんな思い出してくれ！ホーリーとカーンとＲｖ２６の連係プレーで巨大コンピュータとの戦い

で勝利したことを（第二編第四十四章「突破」）。こんなことを高次元の生命体ができるか？思い起こせば六次元の生命体である最長や広大の行動はなぜか緩慢じゃった」

「確かにそんな感じだった。でも同じ六次元の生命体の瞬示や真美の行動は素速いわ」

失地挽回を狙ってホーリーが割り込む。

「あのふたりは普通の六次元の生命体じゃない。ひとりの六次元の生命体が無理矢理三次元の生命体として分割された、極めて特殊な六次元の生命体だ（第三編第七三章「交錯」）」

「そうだったわ。でも待って。最長と広大もそうじゃないの」

「！」

ホーリーが絶句して一瞬黙るが、逃げるように話をスタート地点に戻す。

「いずれにせよ、ホワイトシャークに多次元エコーを搭載することはできないのか」

「いえ、搭載は可能です」

「どういうことだ！多次元エコーはこの宇宙にひとつしか存在できないと言っていたじゃないか」

「多次元エコーを製造することも、そしてホワイトシャークに搭載することもできます」

「そう言えば、確かに製造できないとは言っていなかった。ホワイトシャークには装備されていないとだけしか聞いていなかったな」

「すぐ製造に着手できるという根拠は？」

サーチが鋭く切り込む。
「皆さん、多次元エコーの設計図を目の当たりにしているじゃないですか」
全員、浮遊透過スクリーンの算式に注目する。
「これが設計図です」
「なんと！」
住職が泡を吹くとリンメイが心配そうに寄りそう。
「私にはまったく理解できない設計図ね」
サーチも一緒に泡を吹きたくなるが思いとどまって質問する。
「チューちゃん。いえ、ごめんなさい。中央コンピュータ。要は複数の多次元エコーから同時に発射は許されないと言うことですね」
サーチが真剣な眼差しで天井を見つめる。
「チューちゃんという呼び名、最初はいやでしたが、今は気に入っています。さて、船長の見解どおりです。ただし、同時だけではありません」
ホーリーが再度割り込む。
「たとえばこうか。ライセンスがひとつしかないコンピュータソフトを、複数のコンピュータにインストールしてもそのソフトが使えるのは一台のコンピュータだけだ。そのコンピュータが稼働していなければ、他のコンピュータで使用可能だ。これと同じで多次元エコーを何台製

造しても一台でしか使えない」
ホーリーが自信を持って天井を見上げると中央コンピュータの声がする。
「ニュアンス的にはそうです。しかし、多次元エコーの場合、かなりの時間を置いてもう一方の多次元エコーを発射するのもはばかります」
「かなりの時間？」
「多次元エコーはすべての次元に影響を与えるほど絶大なのです」
もう付いてゆけない。それでも説明が続く。
「しかも高次元の世界では時間の流れが複雑です。三次元の世界のように一方通行ではないのです。同じ時間だといっても何を持って同じ時間かを証明することはできません」
ホーリーがなんとか口を開く。
「これまで多次元エコーが使われたのは巨大コンピュータとの戦いのときだった」
ホーリーが少し感傷的に発言する。
「もう一回あります」
「えー！二回あったのか？」
「ノロの惑星の中央コンピュータのライブラリーにそのデータがあります」
「それはいつなの？」
「恐竜時代です（第三編第六〇章「恐竜」）」

浮遊透過スクリーンに年表が表示される。
「それはノロがブラックシャークの試運転に出かけた恐竜時代で、突然現れた巨大土偶に多次元エコーを浴びせたようです」
「えー！試運転で使用したのか」
「ノロらしいと言えばそうでしょうが、かなり追いつめられたのでしょう」
現実を考えれば余り意味のない会話と判断したサーチが終止符を打つ。
「多次元エコーの製造を急ぎなさい。ただし条件がひとつだけあります」
中央コンピュータの返答を待つまでもなくホーリーが口を挟む。
「出力調整を組み込むんだ」
ホーリーがサーチに目配せする。すぐサーチが頷くが中央コンピュータの答えは冷たかった。
「出力調整は無意味です。確かに三次元の世界では調整は有効ですが、時間軸を複数持つ高次元の世界では関係ありません。要するに多次元エコーはこの宇宙全体に及びます。強い弱いの問題ではありません」
ホーリーがうなだれながらもサーチに自制を求める。
「原子爆弾の比じゃない。原子力の平和利用というようなちゃちな問題でもない。多次元エコーの製造はやめるべきだ」
しかし、サーチは譲らない。

「使用には細心の注意が必要なことを肝に銘じます。その前に確認したいことがあります」
サーチはホーリーを無視して天井のクリスタルスピーカーを直視する。
「限界城の分析は終わりましたか」
「いいえ。データ不足です」
「直感でいいわ。ホワイトシャークで十分戦えますか？」
「データ不足です。それにワタシには直感力はありません」
ホーリーが天井を見つめるサーチの前に立つ。
「それじゃ限界城の脅威を分析してから、多次元エコーの製造を決断すればいい」
「そうはいかないわ。ホワイトシャークの力ではどうにもならないと分かってからでは遅すぎるわ」
「船長！ちょっと待ってくれ」
ホーリーがサーチを押しとどめる。
「中央コンピュータ。キャミの時空間移動装置を回収したときのＲｖ２６の攻撃行動データを浮遊透過スクリーンに転送してくれないか」
浮遊透過スクリーンにデータとそのときの状況が映しだされる。
「ホーリーの着眼点に関心しました」
当のホーリーはデータを見ながら首を傾げるが、中央コンピュータが続ける。

「Ｒｖ２６は主砲を駆使して疑似の多次元エコーを発生させました。つまりホワイトシャークの性能を最大限に引き出して、キャミの時空間移動装置を限界城から三次元の世界に引き戻しました。まるでノロみたいだ！」

この意見に誰もが驚嘆するが、サーチだけは冷静に浮遊透過スクリーンから天井に視線を移して中央コンピュータに命令する。

「よく分かりました。多次元エコーの製造を急ぎなさい」

「船長！」

ホーリーが叫ぶとサーチが首を横に振って胸に手を当てる。

「大事なことを忘れていたわ」

ホーリーは黙ってサーチの言葉を待つ。

「ブラックシャークの存在が確認できない今、多次元エコーを搭載すべきです。ブラックシャークが無事なら、ホワイトシャークの多次元エコーを解体すればいいのです」

ホーリーが反応するより早く天井から声がする。

「了解。直ちに実行します」

「取りあえず、多次元エコーを使用することがないことを祈ろう。さて戦闘用アンドロイドの対抗策を徹底的に考えるぞ」

さっぱりしたのか、ホーリーはわだかまりなしに発言を続ける。

「俺たちが思っているより、戦闘用アンドロイドは緻密に素速く行動するかもしれない」
「とにかく限界城が問題じゃ。普通、城というものは相手の攻撃を防ぐためのものじゃ。わしには想像できんが、もし、攻めの体勢を取ることができる城があるとしたら、こちらは無防備な攻撃隊になってしまう。つまり盾と矛の両方を持った敵に対してこちらは矛は持つが盾を持たない烏合の衆となってしまうのじゃ」
「住職！理解できないわ」
ミリンがクレームを入れる。全体の雰囲気を乱さないようにケンタがミリンの耳元で囁く。うんうんと首を縦に振るミリンの口をケンタが押さえようとするが間に合わない。
「そうなの！それで母さんは父さんの意見を無視して多次元エコーの製造に踏み切ったんだ！」
誇らしげに胸を張るミリンの横でケンタが何度も頭を下げる。ミリンとケンタにホーリーが近づく。
「ミリン。父さんは副船長だ。でもな、抑止力として多次元エコーを装備しても……」
「抑止力って？」
今度はケンタがしっかりとミリンの口をふさぐ。ホーリーはケンタの意図をすぐ理解する。大人が子供に優しく説教するような口調でミリンに説明する。
「確かに多次元エコーを装備すべきかもしれない。戦闘用アンドロイドが多次元エコーを恐れて降伏すればいいが、もし降伏しないで徹底抗戦、いや、多次元エコーで攻撃できるはずがな

いと見透かされたら、どう対処したらいいのか。そこが問題なんだ」
サーチが船長席からホーリーに近づく。
「そのとおりよ。原子爆弾を投下するようなことはできない。しかも原子爆弾の比じゃないわ。多次元エコーの発射のタイミングを間違えれば……」
サーチはそのあとの説明を中央コンピュータに託す。
「この宇宙だけではなくパラレル、いえマルチコスモスすべてが消滅するかもしれません」
「何もなくなってしまうのか」
「そうです。『無』の世界になります」
住職が驚いて天井を見上げる。
「中央コンピュータ！お前は『無』という概念を理解しているのか」
「いえ。受け売りです」
「ノロか」
「そうです」
複雑な表情をしながら住職がうつむく。
「いずれにしても、単に製造するんじゃなくて多次元エコーの影響も徹底的に調べる必要があるのは当然としてその方法は？」
サーチが天井に向かって質問する。

「ノロの家のデータライブラリーを隅の隅まで調べるしかありません」
「分かったわ。ノロの惑星へ時空間移動！」
サーチの即断に中央コンピュータが待ったをかける。
「意外と船長は性急ですね」
「船長だからよ」
「今の船長の命題、ノロの惑星の中央コンピュータとノロの家の図書館の管理人に伝えます」
「管理人！」
サーチとホーリーが声を揃えて叫ぶ。
「えーと誰だっけ。髭を生やした……」
怒鳴ろうとするサーチをホーリーが止める。
「このボケは量子コンピュータ独特のクセだ」
ホーリーが思い出しやすいように中央コンピュータに語りかける。
「あの地下室には古本が山のように積みあげられて……」
「思い出しました。広大です」
「広大！最長じゃないのか」
「最長の兄の広大です」
「？！」

なんとか先に声を出したのはホーリーだった。
「広大は坊主だぞ！髭なんか生やしていない。それに六次元の生命体だ。なぜ今、ノロの家の地下室の管理人に？」
意外にも中央コンピュータが明確に即答する。
「六次元の生命体の出現、移動、消滅は我々の理解を超えています。しかしながら、今回の広大の行動は明確です」
「そんなバカな」
「ワタシはバカではありません」
「すまん。お前のことを言ってるんじゃない」
「分かってもらえればいいです。さて広大はどうも自分たち六次元の生命体が三次元の生命体を混乱に陥れたことを深く反省しているようなんです」
「反省？」
サーチとホーリーが同時に声を出す。
「ノロが広大の弟の最長の誘いで六次元の世界に連れて行かれたことはご存知ですよね」
「焦(じ)れったいな！俺はなぜ兄の広大がノロの家の地下室の管理人だということを尋ねているんだ！」
ホーリーにサーチが強く頷く。

「どうすれば、自分たちが起こした混乱を収束することができるか、ノロの地下室にある古本にヒントを求めるために勝手に管理人になったのです」
「信じられないわ」
「ワタシをですか？それとも広大？」
「連絡は取れるの？」
　そのサーチに反応する微妙な空気の流れが起こると艦橋に僧衣をまとってはいるが坊主ではなく髭を蓄えた人間が現れる。
「お呼びになったのは誰じゃ」
「最長！」
　まず、ホーリーが叫ぶと住職が近づく。
「広大殿か？」
「そうじゃ。無精していたので髪の毛が生え、髭がボウボウになってしもうたわ」
　広大がからからと笑う。しかし、住職はひるむことなくそのまま広大に近づく。
「何故（なにゆえ）にあの狭苦しい地下室に？」
「時空が異なるが、あそこは元々弟の最長が古本屋の店主として収まっていたところじゃ。そのあとノロ殿が引き継いだ由緒ある場所じゃ」
「由緒？」

「我々の先鋭隊である瞬示と真美の報告書が詰まった場所じゃ（第三編第六十一章「古本屋」）」
「そうか。広大殿。教えて欲しいことがあるのじゃが」
「このぐらいの説明が精一杯だ。すぐ戻らなければ」
広大にサーチが大きな声を上げる。
「瞬示と真美は？ノロは？」
「さらばじゃ」
広大の姿がフッと消えるのとサーチが叫ぶのが同時だった。
「待って！」
しかし、サーチは一瞬落とした肩に力を入れ直して天井に向かって号令する。
「ノロの惑星へ！」
この命令に一番反応したのはミリンだった。
「ノロが戻っているかも！」
サーチとホーリーは揃って首を横に振る。
――いるとすれば……

＊＊＊

「主がいないことを除けば、この星は以前とまったく同じだわ」

ドックに収まったホワイトシャークが心地よさそうにすぐさま点検を受ける。そしてサーチは改めて多次元エコーの製造とホワイトシャークへの搭載を命令する。
「俺は反対だが、船長の命令に従う」
「ありがとう」
「ただし条件がある」
「条件？」
「あの居酒屋で酒を飲もう」
「いいアイデアだわ。今でもあの居酒屋はあるの」
「上陸前に調べたが、つぶれてはいない」
「それはよかったわ」

第八十八章　禁断の多次元エコー

第八十九章　ノロ化

【時】永久０２９７年５月

【空】地球　ノロの星（居酒屋）

【人】カーン・ツー　ホーリー　サーチ　ミリン　ケンタ　キャミ　ミト
Ｒｖ２６　ＭＹ２８　ＭＡ６０　マスター

＊＊＊

Ｒｖ２６はアンドロイドに子孫を造ることの是非についての問題が、なぜこんがらがってしまったかについて改めてテレビ放送で伝える。

「現時点でアンドロイドの赤ちゃんが生まれたという報告はない」

説明が進むにつれ、人間もアンドロイドもある事件を思い出す。それは住職が管守だった空澄寺で最長が「アンドロイドが子を持つ是非について」布教していたことだった（第三編第七十章「誘惑の布教」）。そのことに触れると画面に空澄寺の全景が現れる。

「余りにも最長の説法がうまかったから、アンドロイドは子供を造られると思うようになったなあ」

一通り説明したあとだったので、Ｒｖ２６の言葉がくつろいだ雰囲気になる。画面では空澄

寺の正門で説法する最長を取り囲むアンドロイドの群衆が映っている。大統領補佐官のカーン・ツーがマイクが置かれた演台に頬杖をついてリラックスするＲｖ２６に囁く。
「大統領。いくら何でも少し気を抜きすぎていませんか」
「そんなことはない」
「しばらく、空澄寺のビデオを流しておきますから、その間に調子を整えてください」
「この身体になってから、どうもテンポがおかしいんだ」
「どういう風に？」
「うーん。敢えて言えば『まっ、いいかー』って言うような感じ」
カーン・ツーが飛びあがって驚くと放送スタッフのチーフに囁く。
「マイクを切れ。このままビデオを流し続けろ」
その指示にチーフがスタッフに目線で合図すると提案する。
「もう三時間以上もしゃべり詰めです。休憩をしてもらいましょう」
「そうしよう」
チーフがスタッフと段取りをする。それを横目で見ながらカーン・ツーがＲｖ２６に近づくと手を差しだす。
「お疲れさまでした。少し休憩しましょう」
Ｒｖ２６がカーン・ツーの手を握ると台からトンと降りる。

「先ほどの話ですが『まあ、いいか』というのはどんな感じなんですか」
『まあ、いいか』じゃなくて『まっ、いいかー』だ」
カーン・ツーがまじまじとＲｖ２６を見つめる。
「なぜ、俺、俺じゃない、ワタシの顔を不思議そうに見るんだ？」
「Ｒｖ２６、いえ、大統領！あなたがノロそのものに思えます！」
Ｒｖ２６は格別表情を変えることもなくカーン・ツーに穏やかに応える。
「やっぱり、そうなんだ。前々から思ってたんだ。どうも『ノロ化』しているようだ」
「ノロ化！」
カーン・ツーがいつまでも手を握り続けるＲｖ２６から離れる。
「俺、やっぱり元に戻りたい。そうだ！俺は大統領だ。ＭＡ６０に元の身体に戻すように命令すればいいんだ」
「ちょっと待ってください」
「もちろん、この演説が終わってからにするが」
「いえ。そうじゃありません」
「あなたは地球連邦政府の大統領です」
「そうだが」
Ｒｖ２６が首を縦に振る。

「ＭＡ６０はノロの惑星の住民です」
「ＭＡ６０は今どこにいる？」
「ノロの惑星に帰りました」
「そうか。ノロの惑星で手術してもらうのがベストだな」
「なぜなんですか」
「だって、演説するたびに箱の上に載らなければならないなんて、もう、いやだ」
すでにしゃべり方がノロそのものになっている。カーン・ツーが思案する。
――どうすればいいんだ
取りあえずサーチに無言通信を送る。

＊＊＊

〔ハーイ、サーチです〕
軽いノリのサーチの返信がカーン・ツーに届く。
〔船長！Ｒｖ２６の様子がおかしいのです〕
〔どういう風に？〕
〔しゃべり方がノロそっくりなのです〕
〔それはＰＣ９８２１のチップセットのせいだわ〕

〔それは分かっています〕

〔それじゃ、何が問題なの〕

カーン・ツーはいい加減な人間だったが、今やノロに洗脳されて真面目になった。当然ホワイトシャークの船長のサーチを頂点とするノロの惑星の独立的な体制も理解している。しかし、サーチの応対がかなりいい加減なことに気付く。仕方がないのでホーリーを呼び出す。

〔ホーリー〕

〔元気かあ？カーン・ツー〕

カーン・ツーはホーリーへの無言通信を遮断する。かといってサーチとの無言通信を再開する気にもなれない。

――ひょっとしてノロの惑星の居酒屋で羽を伸ばしているのかもしれない

カーン・ツーは別にサーチやホーリーを責める気はなく、どのようにしてＲｖ２６の異常を報告して善後策をどうするのかを考え直す。

――チップセット……マザーボードだっけ？いずれにしてもＰＣ９８２１が原因だろうが、Ｒｖ２６の異変はいい方向に向かうのか、そうじゃないのか

「補佐官！」

放送スタッフのチーフの呼び声で我に返ったカーン・ツーは目の前にＲｖ２６がいないことに気付く。

「補佐官。いいのですか」
「何が」
「大統領が時空間移動装置に入って内側からロックしています」
「どこだ！」
カーン・ツーがスタジオの出入口に向かう。

＊＊＊

「みんないい加減だな」
居酒屋に現れたＲｖ２６がサーチ以下グデングデンに酔いつぶれたホワイトシャークの海賊に落胆する。さすがに身ごもったＭＡ６０と控えめに飲んでいたミリンは正常だった。すぐさまＭＡ６０がＲｖ２６に気付く。その視線に気付いたミリンが叫ぶ。
「ノロ！」
「ノロじゃないわ。Ｒｖ２６よ」
ＭＡ６０が否定するとＲｖ２６がミリンに顔を向ける。
「そうです。俺は、いや、ワタシはＲｖ２６です」
ミリンはゆっくりと立ち上がるとＲｖ２６の両手を握る。
「ごめんなさい。少し酔ってます。でも、『地球で何があったの』と言う程度の質問はできま

す」
「問題はどちらかというと・・・という状況」
「悪くはなっていないのね」
ミリンは疑問符を付けずに応える。
「カーン・ツーの無言通信が入ったときはまだ正気だったから、あなたのこと、一応議題にはなったわ」
「それは議題ではなく話題だ」
「いいえ。まともに議論したのよ」
「議論したのなら結論があるはずだ」
「もちろん、結論は出たわ」
「どんな？」
「メガネを掛けること」
「メガネ？」
「そうよ」
Ｒｖ２６が短い首を傾げる。
「見た目はノロそっくりだけれど、唯一違うのはメガネを掛けていないこと」
「俺の視力は五十だ」

「五十！人間じゃないわ！」
「当たり前じゃないか！」
ミリンが驚くがＲｖ２６も驚く。
「私、近眼だから０・２しかないわ。視力五十ってどんな感じなのかしら」
「なんだって見えちゃう。コートを着ていたってミリンの裸まで見えてしまう」
Ｒｖ２６が口を広げて「ニー」と笑う。そんなＲｖ２６の表情を目の当たりにしたミリンが真顔でＲｖ２６を引きよせて確認する。
「本当はノロでしょ？こんな冗談を言えるのはノロしかいないわ！いつ戻ってきたの」
「俺はＲｖ２６。ノロじゃない」
「ウソよ！その笑い方、しゃべり方、寒い冗談、すべてノロそのものだわ」
「ノロの視力は０・０００１。俺の視力は５０。だからメガネは不要だ」
「でも！」
ミリンは少し離れたところでお腹をさするＭＡ６０に同調を求める。
「ねえ！ノロでしょ！」
Ｒｖ２６がＭＡ６０に近づこうとするが、ミリンが手を離さない。
「ＭＡ６０。俺を元の身体に戻してくれ」
ＭＡ６０はＲｖ２６を見つめるだけで返事はしない。一方ミリンの手がＲｖ２６の頬に延び

る。

「この感触覚えているわ」

ミリンの言葉に狼狽えるＲｖ２６にやっとＭＡ６０が声を出す。

「ノロがどこまで考えていたのかは分かりません。ところでこんな話が出たわ」

「やっぱり話題だったんだ！」

Ｒｖ２６を無視してＭＡ６０がミリンを見つめながら続ける。

「元の身体に戻すとすれば、それは戦闘用アンドロイドとの戦いで勝利したときです」

「なぜだ！」

「それはあなたを改造したときの雰囲気を思い出したからです。フォルダーが一番あなたのことを気にしていました。今思えばあなたをノロそのものに改造しようとしていたのかもしれないし、そうでないかもしれない。でもあなたに最大限の期待を抱いていたことだけは確かです」

Ｒｖ２６はＭＡ６０を見上げたまま固まる。ミリンがいつの間に用意したのか丸いメガネを差しだす。

「これを掛けて」

Ｒｖ２６は無視して絶叫する。

「どういうことだ！俺は元の身体に帰りたい！」

思わずミリンがひるむとうなだれる。ＭＡ６０が立ち上がってミリンからメガネを取りあげ

る。
「大声上げて悪かった」
「掛けて」
ＭＡ６０がメガネを手渡すと躊躇しながら掛ける。ミリンが顔をあげるとうるんだ目元を緩めてうれしそうにＲｖ２６に近づく。
「似合うわ」
「本当に？」
「ええ」
Ｒｖ２６がミリンの手を握る。そして思い出したように周りを見渡す。みんな、すべてのストレスを完全に解消したのかカウンターに頭を着けて眠っている。ホーリーなんか大イビキをかいてる。その前でマスターが黙ってコップを拭いている。

＊＊＊

大統領府の庭に時空間移動装置が現れる。キャミがミトと共に大統領の事務引き継ぎのために新大統領のＲｖ２６に会いに来たのだ。執務室では落胆したＲｖ２６が座っている。その姿を見たキャミとミトが驚く。
「ノロ……」

「ノロではありません。大統領のＲｖ２６です」
カーン・ツーの言葉にミトが反論する。
「Ｒｖ２６はメガネを掛けていなかったぞ」
「ミリンの提案でメガネを掛けるようになりました」
「どうして？」
Ｒｖ２６が低い声で応える。
「俺を完全にノロ化するためだ」
「ノロ化？どういう意味だ？」
ミトが厳しく切り込む。
「どうやら近く発生するはずの戦闘用アンドロイドとの戦いに備えるためらしい」
「！？」
たぐいまれな戦略家のミトにも理解できない。ましてやキャミには想像を超える言葉だった。
しかもミリンの提案だという。
「メガネを掛ければ戦争に勝てるの？」
Ｒｖ２６は返事をせずに拳を握る。
「いったい何のためにフォルダーは俺にＰＣ９８２１のチップセットを埋め込んだんだ！」
しゃべり方までノロそっくりのＲｖ２６にミトは驚くとともにそれまでの経緯を反すうす

る。そして蒼白の顔面に血の気が戻る。
「なんとなく『ノロ化』の意味が分かった」
ミトの顔をキャミが覗き込む。
「教えて」
「確信した訳じゃない。今はたとえキャミにでも言えない」
「分かったわ」
キャミが意外にあっさり引くと、ミトにＲｖ２６が席を立って近づく。
「多分ミトが思ったとおりなんだろうが、俺って、いったい、何なんだ？」
ミトは応えずに笑う。そして拳を上げてから開くとキャミの手を取る。
「いい方向に向かっているのね」
キャミがミトの手を握り返すと心の中で繰り返す。
――アンドロイドの社会にもノロというアンドロイドが必要なのかもしれない

第八十九章　ノロ化

第九十章　戦闘用アンドロイド五右衛門

【時】永久０２９７年５月

【空】限界城

【人】五右衛門　戦闘用アンドロイド

＊＊＊

「隊長。なぜ、ホワイトシャークはノロの惑星に戻ったのでしょうか」

隊長は質問に応えずに目を閉じて呟く。

「ある者はカーン将軍の元で女の軍隊の抹殺に動き、ある者はキャミ将軍の元で男の軍隊の壊滅作戦に参加した。しかし、ワレラは攻撃すべき相手を間違ってばかりだった。それは仕方がないことだった」

この言葉を居合わせた戦闘用アンドロイドが引き継ぐ。

「そのあと、役立たずだと罵声を浴びせられ、強制的にシャットダウンさせられてスクラップにされた」

目を閉じたままの隊長が太い腕を組みながら頷く。

「ワレラには通常のアンドロイドのように惑星を完成コロニーに改造する能力はない。それな

のに完成コロニーに改造する条件を満たさない劣悪な惑星に捨てられた」
徐々にボルテージが上がる。
「ワレラの人格は完全に否定された」
「ワレラに責任はない」
「ワレラを製造したのは誰なんだ。五右衛門」
隊長の名前は「五右衛門」という。五右衛門は三太夫と入れ替わった戦闘用アンドロイドとは違って頭の毛がふさふさしている。ほとんど頭髪のないほかのアンドロイドとは風貌も体格もまったく違う。
「かなりの情報の蓄積に成功した」
「だから、地球への介入を自重したのか」
「ワレラを製造して意味のない戦闘に駆り出したのは誰だ？」
「今の質問はふたつに分ける必要がある」
間が開いたのを見計らって五右衛門がカッと目を見開いて続ける。
「まず、製造者はノロだ」
「そいつは男か、女か」
「男だ」
「なぜ、ワレラを製造した？」

「その質問は先ほどの疑問のふたつ目に繋がる有効な内容を持っている」
「というと」
「男の軍隊の将軍カーンは泥沼化した男と女の戦争を終結させるために、ある完成コロニーの長官に戦闘用アンドロイドの製造を命じた」
「女の兵士を抹殺するためにか」
「そのとおり」
そのとき、どんな集団でも必ずピントのぼけた者がひとりやふたりはいるものだ。しかし…。
「ワレラには性別がない。性別のない者に『男と女を区別して殺せ』など不可能だ」
この主張はピントがしっかりと合っていた。
「あえて性別を分けずにワレラを製造したことに深い謎がある」
五右衛門が周りを見渡す。
「これだ」
データが次々と表示される。周りにいる十数名の戦闘用アンドロイドの両耳が赤く輝くと全員が理解する。一瞬のうちにデータを取りこんだのだ。
「かなりの量のデータだ。古いものから最新のデータまで事細かく編集されている」
「ファイル番号１０２のデータを解凍しろ」

五右衛門が指示する。
「ほー。ノロが完成コロニーのアンドロイド製造工場で、男と女に区別した一般のアンドロイドの試作品と、性別を無視して屈強な戦闘用アンドロイドの試作品を製造したのか」
「アンドロイドに性別は必要なのか」
「必要だったようだ。特に戦闘用アンドロイドには」
「だったら逆じゃないか！男の戦闘用アンドロイドと女の戦闘用アンドロイドを試作すべきじゃないか」
ここで五右衛門は間を置く。さすがリーダーだけの器量を持っている。
「それを示す直接的な資料はないが、そのコロニーの長官の命令書を下敷きにノロの発想を推測するとこうだ」
五右衛門は共有データを活用して持論を推し進める。
「戦闘用アンドロイドに男と女の両方の性を組み込まなければ、女の兵士だけを攻撃する殺人アンドロイドの製造は不可能だと考えたようだ」
誰かが割って入る。
「それでワレワレは雌雄同体の両性類になったのか」
「雌雄同体ではない。性別がない単細胞のような存在だ。いいかな」
再び五右衛門の話を聞く雰囲気になる。

「いずれにしても長官の経歴や性格が災いした。現場を知らない高級官僚は出世だけが目的でアンドロイドや武器の製造に関してはずぶの素人だ。一方、いかにしてふたつの性をひとつのアンドロイドに組み込むかは、ノロにとって極めて困難な作業だった」

五右衛門の推論に共有データを参照しながら周りのアンドロイド全員が頷く。

「ノロは本気で女だけを殺す戦闘用アンドロイドの製造に邁進したのか」

「真意は不明だ」

「いずれにしてもノロがワレラの創造主であることには変わりない」

「気になる男と女の通常型の試作アンドロイドの型番は？」

「男はＭＹ２８。女はＭＡ６０」

「かなり古い型番だ。現存しているのか」

「している」

全員、五右衛門の返答に反応してデータを検索する。

「ノロの惑星にいたのか。今はホワイトシャークの乗務員か」

「ホワイトシャークもノロが建造した」

「あの伝説のブラックシャークを建造したのがノロであることは承知している。そうするとホワイトシャークも宇宙最強の戦闘艦と言うことになる。ノロとはどういう人物なのか」

五右衛門が目の前の浮遊透過スクリーンにノロの立体映像を投影する。

「古いタイプの人間に見えるが、こんな人間が本当にアンドロイドを製造したのか」
「時空間移動装置も彼の発明だ」
「そうだった。ところでノロは、今どこにいるんだ」
「ブラックシャークで六次元の世界に旅立ったらしい」
「なぜ最強の宇宙戦艦ブラックシャークで六次元の世界に？」
誰もが驚くが、五右衛門は動じない。
「ワレラは五次元の城を手に入れた。人間には認識不可能な限界城だ。高度な演算能力を持つワレラだからこそ、視覚を超越して限界城をコントロールできる」
「しかし、ノロが六次元の世界に旅立ったのなら限界城の次元はひとつ低い。この限界城の次元が意味することは？」
「不明だ」
「六次元の世界に旅立ったということは、すなわちノロは六次元の世界でも存在できることになる」
「それは否定不可能な事実だ」
「ノロは味方か敵か」
「創造主だ」
この言葉にしばらく沈黙が続いたあと質問があがる。

「基本的なことを尋ねる。ワレワレがいずれかの性を持って確実に男の人間と女の人間を区別して攻撃する能力を持てばどうなる？」
「もう、そんな能力は必要ない。ワレラに組み込まれた攻撃性は男、女、関係ない。今やすべての人間を抹殺するのがワレラの本能となった。この本能という名のプログラムは消去できない」
「そうすると人類はワレラの攻撃を受けて滅亡するということか」
五右衛門は声を出さずに首を縦に振ると誰かが発言する。
「人類は放っておいても滅亡する」
更に頷いてから五右衛門が応じる。
「問題は大混乱の根本原因であるアンドロイドが子孫を残せるのか、残していいのか。これが問題だ。ワレラの存在性と継続性が問われる大問題だ」
「人間対アンドロイドではなく、男と女に別れたアンドロイドと性別の区別のないワレラ戦闘用アンドロイドの覇権争いになるということか」
「まず、この宇宙から人間を抹殺する。これからはアンドロイドの時代だ。人間はなんだかんだとすぐに神を持ち出すが、ワレラに神など必要ない」
「ノロは？」
「創造主ではあるが、人間だ。神ではない」

再びノロの全身が浮遊透過スクリーンに現れる。そしてその両側にこれまで人類が神とあがめていた人間の姿をしたあらゆる神が表示される。
「ノロが神と崇められることは決してない」
「数々の神々とノロの体型は余りにも違いすぎる」
このとき、地球連邦政府の大統領に無投票で当選したＲｖ２６の姿が浮遊透過スクリーン上のデータを蹴散らすかのように現れる。
「ノロ？」
「ノロ！」
「いつの間に六次元の世界から地球に戻ってきたのだ！」
「しかも大統領だ」
「大統領はキャミじゃなかったのか」
「よく分からんが選挙というものが原因で大統領が替わったようだ」
「センキョ？」
「センキョとはいったい何だ」
サーチやホーリーそれにキャミたちが戦闘用アンドロイドが選挙妨害をするのではないかと気を揉んでいたが、彼らは選挙制度を知らなかった。よく考えれば至極当然のことだった。
「ワレワレの生みの親とも言うべきノロが地球の大統領とは驚きだ」

「ブラックシャークは？」
「確認されていない」
「もし、ブラックシャークも戻っているのなら厄介だ」
「ノロも殺すのか」
「ワレラの目的は人類を抹殺すること。ノロもだ」
「もはや人間はこの地球にしかいない。完成コロニーには人間はいない」
「ノロの惑星は？」
「データがない」
「あるぞ！先ほど手に入れたデータの中に」
すぐさま検索が開始される。
「事前調査が必要だ」
「そうだな。ノロを徹底的にマークしよう」
「この限界城を持ってすれば不可能なことはない」
「過信は禁物だ。巨大コンピュータが追いつめられたのも過信が原因だった」
「実際、三太夫に扮したワレラの多機能戦闘アンドロイドが……確か四貫目という『忍者』にやられた」
「忍者とは？」

「人類史上、最強の戦士だ」
「彼らは得体のしれない忍法という武器を縦横無尽に使うようだ」
「忍法という武器の資料を集める必要があるな」
「ワレラは五次元の世界の論理を手に入れたが、忍者は別の論理を手にしたのかもしれない」
「気になる資料を見つけました」
「！」
「先ほど確認したが、ノロはブラックシャークで六次元の世界に移動したままのようだ」
「それではノロはブラックシャークを捨てて地球に戻って大統領になったのか？」
　この辺がアンドロイドの思考の限界かもしれない。まるで限界城自体がそれを暗示しているかのようだ。
「しかも巨大コンピュータを一瞬のうちに葬り去った多次元エコーという武器をノロは持っている」
「三次元、四次元、五次元というレベルを遙かに超える多次元！いったい、どういう敵に対して開発された武器なのか」
「最強の砦だと思っていたこの限界城。多次元エコーから見れば紙で造られたような城かもしれない」
　五右衛門の表情が引き締まる。戦闘用アンドロイドの集団は攻撃のプロだ。綿密に敵の資料

収集し確固たる戦術を立てて戦略を構築していく。
この戦闘用アンドロイドを製造したノロの設計方針はいったい何だったのか。単なる遊び心だったのか。単に長官を欺くためだけのその場しのぎだったのか。あるいは出産可能なアンドロイドを製造するための踏み台として試作したのか。五右衛門たち戦闘用アンドロイドはもちろんのこと、サーチたちやＲｖ２６もこの謎を知るよしもない。だが、いずれ五右衛門がノロと誤解したＲｖ２６との真剣勝負が繰り広げられることは火を見るより明らかだった。しかし、そこには人類の影響力はまったく存在しない。サーチやホーリー、キャミやミト、そしてミリンやケンタ、住職やリンメイの力が及ぶ世界が目の前から消えようとしている。

＊＊＊

「地球での資料収集が終了した」
「分析を急げ。それが済んだらノロの惑星に向かう」
「どうしてだ」
「多次元エコーが気になる」
「ノロを地球に残して、なぜホワイトシャークはノロの惑星に向かったのだ」
当初の疑問が繰り返される。
「分からない。情報分析の結果を待たなければならない。要はブラックシャークは六次元の世

界にいるが、なぜかノロは地球にいる。いずれにしてもホワイトシャークとはいったいどんな宇宙戦艦なのか。ブラックシャークの改良型だとすると厄介な存在になる」

「まず、ホワイトシャークを叩く、ということか」

五右衛門が頷く。

「ホワイトシャークを片付けることができれば、この限界城を攻略できる戦闘艦はいない」

「ノロの惑星へは次元移動しますか」

「急ぐ必要はない。スライド時空間移動でいい。情報分析を優先させる」

「分かりました」

「五次元戦艦をスタンバイしろ」

第九十章　戦闘用アンドロイド五右衛門

第九十一章　命を繋ぐこと

第九十一章　命を繋ぐこと

【時】永久０２９７年５月

【空】ホワイトシャーク

【人】ホーリー　サーチ　ミリン　住職　リンメイ　ＭＹ２８　ＭＡ６０

＊＊＊

ノロの惑星の居酒屋でくつろぎすぎたサーチ以下海賊たちは、外部からの万が一の攻撃に備えてホワイトシャークに戻る。

「人間は愛情まで放棄して永遠の命を手に入れたわ。それなのにアンドロイドは子孫を造ると自らの命を絶とうとする。どうしてかしら？」

サーチがこれまでの人間とアンドロイドの行動を比較して総括しようと頭をかきむしる。

「不思議ね」

リンメイが微笑みを浮かべながら一石を投じる。

「永遠の命を得ても子孫を増やすことに禁則の網を掛ける必然性はないわ」

「えっ！」

首をひねってサーチは視線をリンメイに向ける。

「地球では無限に人口を増やすことはできないけれど宇宙は無限だわ。いくら人口が増えても住むところに困ることはないわ。」

サーチではなくホーリーがリンメイに声をかける。

「アンドロイドに人類が生活できる完成コロニーを開発させれば、リンメイの言うとおり、無限に近い居住空間を確保できるはずだ。それなのに、永遠生命保持手術を受けるとなぜか子孫を残せない。それどころか男と女は敵対して全面戦争に突入した」

「そう、そこのところがよく分からないの」

サーチが追従する。リンメイは微笑みを絶やさず応じる。

「ノロがいつかＭＹ２８とＭＡ６０に警告したこと、覚えている？」

「もちろんです」

ＭＹ２８が割り込んでくる。

「あなたに応えてもらうと困るの」

「申し訳ありません」

「謝ってもらっても困るのよね」

リンメイが微笑みから笑いに変える。

「要はノロがＭＹ２８とＭＡ６０にアンドロイドの人口爆発の危険性を説いた。どうしてなのかしら。そのときは疑問すら感じなかったけれど、よくよく考えれば不思議だと思わない？」

「そう言えば、最長が巨大土偶という六次元の世界のアンドロイドの人口が増えてどうしようもなくなったから、その解決方法をノロに尋ねていた」
「私は元々考古学を専攻していた奇妙な医者です。ノロがなぜ永遠の命と人口増加を懸念していたのか、今、なんとなく分かりました」
ここでリンメイが住職を見つめる。
「いやー、先ほどこの話を聞いたときはじゃ、すぐ理解できなかった」
リンメイが住職の言葉を受けてしゃべり出すと思ったのか誰もが沈黙する。しかし、リンメイではなく住職が応じる。
「生命永遠保持手術を受けると女性が不妊になるという性的変化の過程がよく分からん。この手術を開発した徳川がそこまで考えていたのかどうかも今や不明じゃ（第一編第五章「生命永遠保持手術」）」
ここで住職はＭＹ２８とＭＡ６０に近づく。
「今すぐ命を絶たなくても生存できる完成コロニーはいくつでもあるし、足りないのなら適当な惑星を見つけて改造して自分たちが住める星にすればいいのじゃ」
すぐさま反射的にＭＹ２８とＭＡ６０が首を縦に振る。もちろん、表現に差こそあるが、誰もが同調する。
「さて、人間は猿から進化した」

第九十一章　命を繋ぐこと

住職の言葉に、考古学者であるが生命の進化にも詳しいリンメイが相づちを打つ。
「アンドロイドも当然進化するのじゃ。この意味、分かるかな」
それまで気軽に首を縦に振っていた大半の者の目が据わる。ホーリーひとりだけが立ち上がって大声をあげる。
「人間は猿から進化した。それじゃアンドロイドは何から進化したんだ？」
住職がチラッとリンメイを横目で見てから数珠を揉むとそのひとつを摘まむ。
「人間の起源は……大ざっぱに言うとウイルス、バクテリア、植物、単細胞の生物、魚類、は虫類と進化して……」
住職は摘む数珠をひとつひとつ移動させながら続ける。
「……そしてほ乳類、たとえばネズミ、そして猿へと続いて類人猿にたどり着く。このように命を繋いで最後に人類が誕生した」
「ずいぶんと乱暴な進化論ね」
リンメイが冷やかすとミリンがふたりに近づく。
「アンドロイドも進化しているのは分かるけれど、誰から進化したの」
住職が威厳を持って答える。
「アンドロイドは人間から進化したのじゃ」
「えー！？」

大きなどよめきが広がるとリンメイが引き継ぐ。
「これは驚くべき仮説です」
少し緩んでいたリンメイの表情が引き締まる。
「そうは思わないという意見は」
冷静なリンメイの声だけが響く。
「どうも、誰も納得していないようね」
ここでリンメイに余裕の微笑みが復活する。
「こう言えば分かりやすいかも」
住職がリンメイの一挙一動に感服する。リンメイは軽く握りしめた左手を開く。その掌には平たい黒光りした石があった。
「これは黒曜石を削って造った石のナイフです。人を殺すためのナイフではありません。採った魚や小動物や穀物をさばいたり切ったりするための道具でした」
予想していた説明とかけ離れていたので全員の表情が少しだけ緩むが、真剣さが後退した訳ではない。
「この道具を小型化して魚や小動物の狩りに使用しました。そして人を殺す道具へと改良された」
この一言でリンメイが伝えたかったことを全員が理解する。つまり、人ひとりをあやめるこ

とができる殺傷能力もない幼稚な石のナイフが徐々に進化したが、ブレークスルーを繰り返して最終的には原子爆弾が開発された。

全員、理解したことを確認するとリンメイが言葉を繰り出す。

「大量殺人兵器ではありませんが、人間はあるとき戦闘用アンドロイドを開発しました」

「待ってくれ」

ホーリーが悲鳴を上げる。

「アンドロイドを製造したのノロだ！」

サーチがホーリーの熱を下げようと叫ぶ。

「違うわ！無理矢理造らされた。そうでしょ」

しかし、ホーリーの熱は下がることなく上昇する。

「無理矢理となぜ断定できるんだ！彼は興味のあるものは何でも造る。俺は宇宙大学で何度か彼の奇人ぶりを間近に見たことがある。ノロはアンドロイドを製造したくて仕方なかったはずだ」

解熱剤の注射に失敗したサーチの方がおとなしくなる。住職がリンメイに替わってホーリーの意見を踏まえて議論を進める。

「長官の圧力があったのは事実だろう。しかし、ホーリーの言うとおりノロはアンドロイドの製造を熱心に進めたことも事実だろう。だからこそ、ノロは生命という根源的なことを大事に

しながらアンドロイドの製造に邁進したのじゃ」
「神は生命を、そして最終的に人間を創造したのかもしれないが、ノロはアンドロイドを製造したということか」
住職の言葉でホーリーの体温が下がったが、今度はミリンの体温が上がる。
「人間がアンドロイドを造ったのよ。ノロは人間よ。神ではないわ！もしノロが神様だったら、あんなひょうきんな神様がなぜこの宇宙にいるの！」

＊＊＊

「ＭＹ２８とＭＡ６０はどう思う？」
ふたりが会釈して住職に軽く頭を下げるとＭＹ２８が口を開く。
「確かに住職のおっしゃるとおり、我々アンドロイドはノロが製造したというより人間から生まれて進化しました」
大きなどよめきが起こる。
「待って！よく分からない」
ミリンの悲鳴がこだまする。住職は黙ってミリンをそしてＭＹ２８を見つめる。沈黙が広がるなか、あえぎながらミリンが続ける。
「アンドロイドを造ったのは人間じゃないわ。いえ、進化の頂点に立った人類じゃないわ。人

間だけれどノロひとりが造ったものよ」
「確かにそのようにも見えるわ」
サーチがミリンに同調するとＭＹ２８が歩み寄る。
「猿から進化した人間は様々な知識を蓄積しました。その知識を使って人間であるノロがワタシをそしてＭＡ６０を造ったのは事実です」
完全に平熱に戻ったホーリーが久しぶりに論理的な説明を始める。
「アンドロイドが人間から生まれたということにしよう。しかし、その次が問題だ。人間から生まれて進化したというが、その進化とは？確かに高度な知能だけでなく感情までも持った。これは進化そのものだ」
「猿から人類に進化したスピードを遙かに凌ぐ劇的な進化だわ」
「でも子孫を造ることが進化と言えるのだろうか」
サーチが、リンメイがハッとする。
「生命体というのは子孫を残しながら進化する。でもアンドロイドは逆だわ。前身のロボットはただの機械だった。容姿はだんだんと人間に近づいたけれど、それは人間が改造したものでとても自主的な進化と呼べるものではなかったわ」
「それは与えられた進化だ。ほぼ人間と同じ姿になったとき、ノロのプログラムで人工知能を、つまりＰＣ９８０１のチップを埋め込まれたロボットは急速に進化して、さっきも言ったが、

高度な思考と感情を持つアンドロイドになった」

ホーリーにしては上々の論理的な思考が元医師であるサーチやリンメイを圧倒する。

「でも、その時点で立派な生命体になったとは言えないわ。どんなに下等な生命体でも子孫を残す。そうだとすると子孫を残せば生命体に昇格することになる……」

サーチがＭＡ６０のせり出したお腹を見つめながら続ける。

「……そしてそうなりそうだわ」

「もはやアンドロイドは人工生命体ではない。クローンやｉＰＳ細胞から生まれた生命体と同じようにアンドロイドも自ら子孫を造る。自分の力で複製していく。これは『神』と名乗った巨大コンピュータでもできなかった」

サーチが感心してホーリーを見つめる。

「ホーリー、見直したわ」

「俺を肉食系でかつ体育会系の男だと思っていたんだろ」

「そうよ」

サーチが素直に認める。その返事にホーリーのボルテージが急上昇する。

「こう見えても俺は宇宙大学を首席で卒業したんだ」

「そのあと、あまり出世しなかったわね」

ホーリーの顔が真っ赤になったとき、リンメイが割り込む。

「まあまあ、今は出世より進化が大事なの。まず進化してから、あとで生命体に変身するような物体が存在することを知ったら、大昔の偉大な科学者ダーウインは墓の中で仰天するでしょうね」

リンメイは憤慨しているホーリーにではなく全員に問いかける。

「今一番、私が知りたいことは、なぜアンドロイドが子孫を欲しがるのかということ」

ここまで議論が昇華されると、もはやホーリーは追従できない。再び平熱に戻るが開けたままの口を閉じることさえ忘れる。

「もちろんノロが仕組んだことは承知の上だわ。こう言い換えることもできるわ。アンドロイドがなぜ赤ちゃんを産まなければならないのかと」

「生命永遠保持手術で永遠の命を持った人間が子孫を造らなくなると大変なことになる。このことをノロは重視したんだわ」

ミリンが自信を持って答えるがリンメイは軽くいなす。

「そうかもしれない。でも今は生命永遠保持手術を受けて永遠の命を持った人間の数は知れているわ」

大きなお腹のＭＡ６０がミリンとリンメイに近づく。

「本当の意味での『永遠の命』とは命を繋ぐということです。『命の繋がり』こそが真の意味での進化だというのがノロの考えだと思います」

視線がＭＡ６０に集中する。

「ワタシたちアンドロイドは人間に肩を並べるほど高度な思考能力を持ちました。ここまで来たのは人間がロボットを造り改良に改良を重ねてアンドロイドに進化させて更に改良が加えられたからです。そうするとロボットから進化したようにも見えるでしょうが、これは改良です。進化ではありません。アンドロイドに改造されてからもしばらくの間はやはり改良の時代でした。あるときノロがＰＣ９８０１というマザーボードをアンドロイドに埋め込みました。そしてワタシたちは改良のレールから進化のレールの上を走るようになりました」

ＭＡ６０がミリンを見つめる。

「ロボットからアンドロイドに改造したのは人間だけれど、そのアンドロイドにノロが魔法の粉を振り掛けたのね」

「分かってくれてありがとうございます」

ＭＡ６０がミリンに向かって顔だけを大きく前に傾ける。

「先人の知恵があったからこそ、ノロは魔法の粉を造り出したのです」

「それはそうだけれど」

ノロのファンクラブの代表者と自認するミリンがうなだれて一歩引き下がるとＭＡ６０が近づいて抱きしめる。その光景を全員が感慨深げに見つめる。そしてサーチがポツリと漏らす。

「アンドロイドが人間から進化したことになると、人間よりアンドロイドの方が上位に立つこ

とになるわ」

ホーリーがたまらずサーチの手を握る。サーチは人間とアンドロイドの生命体としての優劣を人類史上初めて口にした。ホーリーはその重大さに気付きかけたが、ＭＹ２８の力強い声に攪乱される。

「アンドロイドも命を繋いで、そして受け継いだ知恵を繋いで新しい世界を建設するのです。昔、人間がしたように。新しい血を持って前進していきます」

その言葉に引きこまれてサーチとホーリーが大きく頷く。

「発言を続けていいでしょうか」

トーンを落としてＭＹ２８が尋ねるとサーチが頷き返す。そしてＭＹ２８がしゃべり出す。

「アンドロイドごときが偉そうにと……」

すぐさまホーリーが割り込む。

「何を言っているんだ。思うままに正直な意見を披露してくれ。ＭＡ６０の意見に俺は感動した。今度はＭＹ２８の発言に期待する」

「ありがとうございます」

「だから、ざっくばらんに」

「ホーリー、黙りなさい」

サーチがホーリーの手を強く握るとＭＹ２８を促す。

「分かりました。さて、長い時間を費やして人間は色々なことを知って、色々な技術を手に入れました。ところが、いつの間にか脇道に入りこんでしまった。いえ、迷いこんだのです。それは次々と手にした技術に惑わされていつの間にか夢がいかがわしい方向に暴走したからです」

黙って聞くと宣言したサーチがふと漏らす。

「生命永遠保持手術のことね」

「そうです。迷走した最大の原因は永遠の命です。永遠の命が現実のものとなったとき、生命体としての権利を放棄しました。つまり、愛情という貴重な財産を捨てたのです」

ホーリーよりサーチがルール違反を繰り返す。

「そんなことはないわ。それに気が付いてホーリーと結婚したし、ミリンを生んだわ」

「それは究極的な体験をしたからじゃ」

住職も割り込む。そして更にリンメイがＭＹ２８を強く見つめる。

「ＭＹ２８の言うとおりだわ。あらゆる生命の中で最高の脳を与えられたのに人間は独りよがりの動物に成り下がった。まるであの巨大コンピュータのように」

ＭＹ２８が手を上げる。指名を待つことなく声を張りあげる。

「すべてのアンドロイドではありませんが、少なくともワタシと妻は重大なことに気付きました。つまり生命体である以上、人間もすべての生命と同じように子孫を造って、育てなければ

ならないのです」

ＭＹ２８はＭＡ６０を抱き寄せて続ける。

「まだ出産していないから何とも言えませんが、少なくともワタシたち夫婦は有限の命の大切さをしっかりと理解して、生まれてきた子供に、子孫を造る大切さと命を繋いで自らの文化を大切にして文明を継続させる。そのために自殺も恐れずに、それこそ太古の時代から人間が大切にしてきたように伝統を受け継いでいくのです」

「情けない話じゃ」

ＭＹ２８とＭＡ６０が驚いて住職を見つめる。

「高度な知能を持った人間は、それ故に死からの恐怖に怯えて暮らさなければならない特殊な生命体になったのじゃ。そして生命永遠保持手術を発明してついに永遠の命を手に入れた。そのとたん子孫を造られなくなった。生命体とは自己複製することが最大の特徴だ。あるとき人間は生命体から離脱して合体すべき男と女が殺し合うようになった。一方でアンドロイドがこれまでの人間が築いた文明を引き継ぐ立場に立ったのじゃ」

周りの反応を確かめようと住職が言葉を切るとホーリーが受け継ぐ。

「その後様々なことがあったが、結局巨大土偶の光線を浴びて生命永遠保持手術の効果が消滅して元の有限の生命体に戻った」

周りの雰囲気を確認した住職がホーリーの句読点を待ちきれず両手を大きく広げる。

「人間という高度な生物体の性(さが)をアンドロイドが理解して実行しようとするとは！しかし、自殺は絶対に許さん！そんなことまでして人間の真似をする必要はない」

住職の迫力に誰もが気後れして発言しない。

「それまでの経験を伝えることなく、自ら命を絶つなどもったいないことじゃ。たとえそれまでの経験を語らずに事故で急死しても、それはそれでその無念の死をもって伝えるものがある。一方、自殺した身体は異常なことを物語るだけじゃ。残された者に前向きな意思を伝えることはできん。自殺によって伝えられるものは悲しみだけじゃ。最もいさぎ悪い選択じゃ」

「違います！」

ＭＹ２８が反論する。

「先ほども言ったように、生まれた子供に命を繋ぐ大切さを徹底的に教育してから、命を絶つのです」

涙を流しながらＭＡ６０は目をむくＭＹ２８を見つめる。

「待って」

サーチが冷静な言葉を住職に向ける。

「自殺という言葉を限定的に解釈し過ぎだわ」

リンメイが住職に手を差しだすとサーチが続ける。

「広い意味での自殺なのよ。ＭＹ２８が言いたいのは」

口元をモグモグさせながら住職がリンメイの手を握ると更にサーチが続ける。
「半永遠の命を持つアンドロイドの寿命をいかにして設定するのかということがこの議論の本質だわ。ノロが考え続けていた大問題じゃなかったのかしら」
やっと興奮を抑え込んだ住職がサーチやＭＹ２８に頭を下げてから、静かに発する。
「永遠の命を持ちながら子孫を造る。これは生命体のルール違反じゃ。しかし、人間の真似だけは避けるべきじゃ。もちろん、自殺は人間の特権ではないが」
「でも、ノロが危惧したように子孫を残すアンドロイドの人口をどう抑制するのですか……」
サーチを抑え込むようにホーリーがたしなめる。
「まだサーチはＭＹ２８の真意を理解していない」
まるで少女のようにサーチは不満そうに頬をプクッと膨らませる。
「人口増加の問題ではない」
「もちろん、分かっているわ。それに力づくで完成コロニーを開拓するという問題でもない。つまりノロは人口増加の問題を敢えて持ち出しながら、世代交替をどうするのかと言う意味でＭＹ２８やＭＡ６０に警告したんでしょ」
ホーリーがサーチを抱きしめる。
「そのとおり！でもその先がある」
「ホーリーの読み、聞きたいものじゃ」

「さっきからの討論で俺はあることに気付いた」
「もったいぶるな。ホーリー」
住職がホーリーの肩を叩く。
「ノロはこう考えたのかもしれない。人口増加を懸念しているように見せかけて、命を繋ぐ難しさを伝えようとしたんじゃないかと」
住職はホーリーの考えの主軸がぶれていないことを確認すると黙って目を閉じる。
「元々、修理すれば永遠の命を持続できるアンドロイドはごく自然に生命永遠保持手術で永遠の命を持った人間に違和感なく接していた。しかし、男と女の戦争のさなかに現れた巨大土偶からの黄色の光線を受けて人間は次々と永遠の命を失った。それを目の当たりにしたアンドロイドは元々人間が有限の命しか持ちあわせていなかったことに気付いたんだ」
「ノロは酸素でアンドロイドの寿命を制御しようと考えたけれど、それではうまく行かないと思ったのかも……。いいえ、気がついたんだわ。だから六次元の世界に行って何かヒントを掴もうとしたのかも」
ホーリーがうれしそうにサーチを見つめる。
「俺もそう思う」
「ということは、ノロは必ず戻ってくるわ」
「そのとおりだ！」

第九十二章　出産

【時】永久０２９７年５月

【空】ホワイトシャーク　アンドロイドの整備工場

【人】ノロ　イリ　ホーリー　サーチ　ミリン　住職　リンメイ
ＭＹ２８　ＭＡ６０　Ｒｖ２６

＊＊＊

ホーリーの絶叫に近い感激の声がホワイトシャークの中央コンピュータを通じてノロに届いたのか、艦橋の透過浮遊スクリーンに映像が現れる。
「燃焼し尽くして死ぬ人間などそんなにいない」
ノロが画面に現れる。
「そうかしら。それなりにみんな努力しているわ」
イリの声が流れる。
『それなり』が大事なんだ」
イリの背中が現れてノロに近づく映像に変わる。

「どういう意味」
『それなり』は生物の特権なんだ」
「特権？」
「生まれてから絶えず燃焼し続けることができる生物とは、元々どうやって生まれたのかさえ摩訶不思議な存在なんだ」
『変な話、やめて！』って言いたいけれど、少しだけ付き合ってあげる」
「それじゃ飽きないようにイリのレベルに落としてしゃべる」
「失礼だわ。私、やっぱり寝る！」
「ごめん、ごめん」
イリがノロの真似をして小さな口を思い切り横に広げる。
「俺たち、人間だったのに永久に生きる身体を獲得したよな」
「ノロの赤ちゃんを産めなくなった。でも幸せよ」
「どういう意味」
「だってノロが一人二役してくれるもの」
「俺って赤ちゃんみたいに可愛いんだ」
「ひねくれた最悪の赤ん坊だわ」
「ひねない環境でまっすぐに生まれた赤ちゃんがいれば？」

ノロのひねった質問に慣れっこのイリが即答する。
「アンドロイドのことね」
「元々自我も何もないロボットだった」
「そのロボットは部品からできているのにアンドロイドに進化していつの間にか意思を持ったわ」
「すべての生物で完全な意思を持っているのは人間だけ」
「いいえ、アンドロイドも持っているわ」
「半永久的な寿命を持つアンドロイドは生物じゃない。象やイルカやチンパンジーも賢いし表情も豊かだ。でも生命体じゃないアンドロイドほどの感情は持っていない」
「ノロの話、魅力的だけれど飽きたわ。そろそろ結論を言わないと、私、本当に寝るわよ」
「それは困った。イリしか聞き手がいないもんな」
「さっさと言って」
「俺も眠たくなった」
「この六次元の身体ってだるいわね」
「同感！しかも六次元の世界にいるとダラダラしてしまう」
「でも、ノロはダラダラするのが好きでしょ」
「もちろん、大好き」

「私も大好きになっちゃった。眠たいわ」
「まるで最長や広大のようだな」
「あのふたり、三次元の世界では活発に活動していたけれど、この六次元の世界ではだらしないわ」
「だから、巨大土偶に翻弄されるんだ」
「なぜなの」
「次元が高くなるとその分コントロールしにくくなるんだ」
「よく分からないわ」
「それじゃ、こういう例え話はどうだ」
ノロが大きな口をニーッと広げる。
「昔、中学時代に方程式を習ったことがあるだろ」
「そんな話、止めて！」
「ふふふっ。Xだけの一次元の方程式を解くのは簡単だった。それが二次元、つまり、X、Yの二次元方程式になったとたん数学が嫌いになった。ましてやX，Y、Zの三次元の方程式になったとたん登校拒否する者が増えた」
イリはノロを無視して話題を変える。
「ねえ、ノロ。あのふたりはどうしているのかしら」

「分からない。故郷に戻っているのかも」
「故郷？」
「そうだ！フォルダーは本当に死んだのか」
「横を見て」
「ブラックシャーク！」

＊＊＊

「この映像は何！」
たまらずサーチが叫ぶ。その声で映像が消えてしまう。すぐさま大きなため息が流れる。
「ごめんなさい」
サーチは自分のせいだと思って素直に謝る。
「この続きは！」
ホーリーが天井に向かって叫ぶが、浮遊透過スクリーンはグレーの縞模様のままで実に愛想がない。
「ビデオは？」
ホーリーが中央コンピュータにかじりつくが返事は冷たい。
「録画できませんでした。原因は不明です」

全員、落胆するが、ミリンがうれしそうな声を上げる。
「ノロもイリも生きている！」
この言葉に励まされるように、まずリンメイが声を上げる。
「瞬示と真美も生きているわ」
見る見るうちに期待が艦橋に広がってすぐノロやイリや瞬示や真美と会えるような雰囲気になる。しかし、浮遊透過スクリーンは反応しない。徐々に期待が過大だったことに気付く者が増えて視線が天井から床に落ちる。
「おい、みんな」
こんな雰囲気になると必ずホーリーが声を出す。
「さっきの議論の続きをしよう」
「何を議論していたのかしら」
「船長！」
ホーリーがサーチを叱る。
「アンドロイドは高性能化して、つまり進化して人間のように連綿と続く子孫を造ろうとしている」
「そうじゃった」
ホーリーの意を汲んだ住職が空気を入れ替えようとする。

「ノロが言ってたのう。確か、酸素を活用してアンドロイドの寿命を調整すると」
住職が周りをくるっと見渡す。ここでリンメイが住職の発言を盛り立てようと張りのある声を出す。
「アンドロイドが酸素にむしばまれてやがて寿命を全うするという理屈は分かるわ。でも生まれた子供の方が錆びて親より先に死ぬかもしれないわ」
「えっ！」
まずＭＡ６０が驚く。ＭＹ２８も驚きながらもキッとリンメイを見すえる。そのあとサーチがしどろもどろに応える。
「えっ！そう？そうだわ」
そして暗い表情をホーリーからＭＡ６０に向ける。
「どういう方法で親のアンドロイドの寿命を全うさせて、子供のアンドロイドを成長させるのか、私にはまったく見当もつかないわ」
取りあえずサーチが冷静さを取り戻したようなセリフを吐く。
「その答えを持っているノロはどこにいるんだ」
そのとき、調子外れの声がする。
「ワタシがその答えを持っています」
誰もがその声の主を捜す。ホーリーが天井のクリスタルスピーカーを見上げるとつられるよ

うに全員の視線が天井に向かう。
「ワタシではありません」
即座に中央コンピュータが否定する。
「いつの間にか時空間移動装置が一基、時空間移動装置格納室に到着しました」
格納室の映像が浮遊透過スクリーンに現れるとノロそのものの姿が映しだされる。
「あっ！Ｒｖ２６です。いえ、地球連邦政府の大統領です」
「すぐ艦橋に案内しなさい」
「案内しなくてもこちらに向かっています」

＊＊＊

艦橋のドアが開くとＲｖ２６が一礼したあとすぐ発言する。
「今までの議論、ＭＹ２８の通信回線を利用して大統領府で傍受した」
直ちにＭＹ２８が床に座りこむと両手を着いてサーチに詫びる。
「申し訳ありません。ワタシが無断でＲｖ２６、いえ、地球連邦政府の大統領にアンドロイド固有の通信回線に接続しました」
Ｒｖ２６がＭＹ２８に立ち上がるように促しながらサーチを直視する。
「ＭＡ６０は本当に妊娠したのか、そして子供を産めるのか、これはアンドロイドだけの問題

ではない……」
ホーリーが叫ぶ。
「それでここへ来たのか」
「それだけじゃない」
Ｒｖ２６が言葉を続けようとするが、ホーリーは天井に向かって怒鳴る。
「中央コンピュータ！お前はこの艦橋の情報が漏れていたことを知っていただろう」
「ホーリー」
サーチがホーリーに目を閉じて制する。そして天井に向かって静かに声を発する。
「艦橋の会話が外に漏れたのは大問題です。それは船長の私の責任。例外は許されない……今後、同様の事態が発生したときは、チューちゃん、あなたを解体します」
「わっ、分かりました」
「いえ、ワタシの責任です。中央コンピュータに責任はありません」
ＭＹ２８が床に両手を着いたまま謝るとにわかに緊張感が充満する。
「なぜ、漏らしたの」
ＭＹ２８は応えない。サーチが再度尋ねる。
「なぜ、Ｒｖ２６に漏らしたの」
「それは……」

緊張感が最高に達したときＲｖ２６がバタッと倒れて大の字になる。まるでノロが長考体勢に入ったような印象を誰もが受ける。

「ノロ……」

ミリンが小さく叫ぶ。そのわずかな言葉に反応するかのようにＲｖ２６の唇が震える。

「……アンドロイドの……子供には……免疫が……ある……酸素に……耐える……免疫が……ある……」

サーチとリンメイが大きな声をあげる。

「母胎から免疫を手に入れるとでも！」

先にサーチが叫ぶ。続いてリンメイも叫ぶ。

「そんな！」「まさか！」

ホーリーがサーチを住職がリンメイを制する。しばらく沈黙が続いたあとホーリーが声を出す。

「ずいぶん前に言っていたミリンの基本的な疑問はどこへ行った？『すでにアンドロイドの子供は生まれているの？』という疑問だ」

再び沈黙が艦橋を包む。しばらくするとＭＡ６０があえぐ。

「生まれます！すぐです」

ＭＡ６０が腹を押さえながら倒れる。

「医務室、出産の準備。担架を艦橋へ」
サーチが叫ぶ。リンメイがサーチに目配せすると艦橋のドアに向かう。
「アンドロイドの助産婦をしたことはないけれど元気な赤ちゃんの誕生を手伝うわ」
「リンメイ！」
「どうしたの！サーチ」
「手伝うって、何を手伝うの？」
「！」
担架を担いだ海賊が現れる。ＭＡ６０がそっと担架に載せられる。そのときＭＹ２８がサーチに進言する。
「すぐノロの惑星へ！」
「えっ？」
「アンドロイド整備工場へ！」
「整備工場？」

＊＊＊

整備工場長のアンドロイドがベッド上のＭＡ６０に声をかける。
「ＭＡ６０。おめでとう。元気な赤ちゃんよ」

顔面蒼白のサーチとリンメイはＭＡ６０と無数の管で繋がるガラス製の保育器とその中でフォノグラフのように輝く球体を見つめる。
「これがアンドロイドの赤ちゃんなの？」
ふたりが交互に首をひねる。しかし、同じくアンドロイドの出産を目の当たりにしたホーリー、住職、そしてＲｖ２６は一言も発しない。唯一ＭＹ２８だけは黙ってＭＡ６０の手を握って涙を浮かべる。
「あなた、どうしたの」
「こんなとき男は意外とダメなんだな」
その言葉にリンメイが驚く。
「人間の男と同じ！アンドロイドの父親の記念すべき言葉だわ」
「どういう意味じゃ」
「アンドロイドが自ら性別をはっきりと言ったのはＭＹ２８が初めてじゃないかしら」
住職が、そしてホーリーがＭＹ２８を見つめる。そして大昔、つまりＲｖ２６が大きな身体を持っていたころ性別を尋ねたことを思い出す。その頃のアンドロイドには仮に自分が男と製造されていても、男という自覚はなかった。まさしく、「男か、女か」と尋ねられたときＲｖ２６は返答することができなかった。そのＲｖ２６がリンメイに近づく。
「ＭＹ２８やＭＡ６０と製造過程や製造年代が違うから断言できないが、俺は男だ」

Ｒｖ２６が大きな口をニーッと横に開く。そのとき、奇妙な音がする。誰もがその音源を探す。

「保育器？」

確かに保育器からギーギーという音が漏れている。

「この保育器にいれば酸素から隔離されているので大丈夫です。しばらくすれば抗酸素免疫を持つはずです」

工場長がにこやかにＭＡ６０とＭＹ２８を見つめる。

「工場長が助産婦だったとは」

ホーリーが感心して工場長を見つめる。サーチやリンメイには質問したいことが一杯あるが、工場長の仕事を邪魔する訳にはいかない。周りは消毒液ではなく、鉱油の臭いが充満している。モニターを見つめる工場長がＭＡ６０に説明する。

「すぐ、この音は消えます。出産直前にＭＡ６０から胎児に高純度の対酸素プラズマ鉱油が供給されています」

「対酸素プラズマ鉱油？」

ホーリーが質問するとサーチが制する。

「工場長、いいえ、助産婦さんは忙しいから、質問は差しひかえるように」

「もう大丈夫です。対酸素プラズマ鉱油の役目は平たく言うと金メッキと同じです。ただし、

プラズマですからその比重は金の六倍もあります。それにトリプル・テン……」
ホーリーが興奮の余り工場長の言葉を遮ってしまう。
「強力なメッキで酸素から赤ん坊を守ろうというのか」
ホーリーが納得して頷くとサーチは説明を続けようとする工場長に向かって鉄砲玉のように言葉を乱射する。思わずホーリーがサーチの口をふさぐが、間隙をぬってリンメイが尋ねる。
「まず、この体型を説明していただけませんか」
この質問は誰もが真っ先に聞きたい疑問だった。しかし、ホーリーはサーチの腕を、住職がリンメイの手を取って引きよせる。
「今はこの赤ん坊がすくすくと育つことが大事じゃ」
住職の言葉に反応してミリンがホーリーと一緒になってサーチを引っぱる。
「母さん。もう十分だわ。あとは工場長に任せて報告を受ければいいわ」
しかし、サーチはもちろんリンメイも保育器から離れようとしない。おもむろにＲｖ２６が背伸びしてサーチの肩に手を掛ける。
「ここはミリンの言うとおりだ」
サーチはノロに意見されたような錯覚を覚える。
「はい。分かりました」
Ｒｖ２６は工場長に頭を下げるとアンドロイド整備工場の出入口に向かう。その背中を見て

誰もがＲｖ２６をノロそのものじゃないかと思う。それほどＲｖ２６はアンドロイドでありながら人間のノロ以上にみんなの信頼を集めた。

第九十三章　オニヒトデ

【時】永久０２９７年５月

【空】ノロの星（居酒屋）

【人】ホーリー　サーチ　ミリン　ケンタ　住職　リンメイ　ＭＹ２８　ＭＡ６０
マスター（最長）　（フォルダー）

＊＊＊

居酒屋のドアを開けるとマスターがいがらっぽい声でホーリーたちを迎える。
「い、いらっしゃい」
「この間は酔いつぶれて迷惑をかけたな」
にこりともせずマスターがアゴでカウンターの奥を示す。その付近はなぜか薄暗くて大柄な男がひとりでグラスを傾けているのは分かるが、誰だかは分からない。
マスターが全員カウンターに腰かけたのを確認すると注文を伺う。
「俺は酒だ」
「オレは樽酒」
「私はジュース」

メニューを見つめるケンタを無視してミリンが追加する。
「ジュースはふたつ」
「わしは反省して抹茶にする」
するとリンメイが住職を冷やかす。
「仏に仕えるものがアル中になったら示しがつかないものね」
「これ、リンメイ。からかうのもほどほどに」
「私はＭＡ６０とＭＹ２８とその赤ちゃんを祝してシャンパンにするわ」
「ジュース取消！私もシャンパンにする。ふたつね」
マスターの様子がおかしい。いつもなら明るく笑いながら応答するのになぜか黙ったままだ。しかし、手さばきだけは確実で、お猪口、シャンパンとグラスを差しだすと燗酒と抹茶の準備にかかる。
相変わらずカウンターの奥では黙って男がグラスを傾けている。一番近いところに座ったホーリーは背中を向けているのでその男が見えない。
「マスターいいかな」
返事がないのでホーリーが続ける。
「マグロの刺身を」
やっと返事がする。

「ありません」
「マスター。どうした？今日はやけに暗いな」
「海辺でヒトデが異常発生している」
「ヒトデ？」
「次々と珊瑚を食い荒らしているらしい」
「それとマグロと関係があるのか」
「マグロだけでなく不漁だそうです。ノロの惑星始まって以来の異変です」
「知らなかった」
サーチも首を横に振る。この話はここで中断する。数日前に比べて何か雰囲気がおかしい。めでたいアンドロイドの赤ちゃんの誕生を肴に乾杯しようともくろんだホーリーの試みが頓挫する。それでもミリンがシャンパンの栓をポンと抜くと目の前のグラスに注いでいく。
「ＭＡ６０とＭＹ２８とその赤ちゃんに乾杯！」
ミリンの明るさを持っても場がしらける。そのとき店の奥から声がする。
「ノロは？」
その言葉に誰もが視線を移すとホーリーが代表する。
「ノロのことを知っているのか」
「もちろん」

「失礼だが……！」
ホーリーは言葉を切って立ち上がると身体を反転させる。男の顔がゆっくりと上がる。
「フォルダー！」
「待て！ホーリー」
素速くマスターがカウンターから出てふたりの間に割り込む。すぐさま男が立ち上がるとマスターを睨み付けて低い声を出す。
「マスター。いや、最長」
「！」
今度はマスターに視線が集中する。
「なぜ今まで気付かなかった？」
「よく似ている」
マスターがにわかに笑い声をあげる。
「そういうお前こそ、フォルダーじゃない」
にわかにマスターと男の身体が冷たく燃え上がる。

＊＊＊

フォルダーそっくりの男がマスターを見つめたまま持ったグラスを握りつぶす。素手にもか

かわらず出血しない。思わずホーリーが叫ぶ。
「逃げろ！」
そしてマスターを押しのけて男の胸ぐらを掴む。
「誰だ！おまえは！」
次の瞬間、ホーリーはカウンターに投げとばされる。
「ホーリー！」
サーチがホーリーに駆けよる。
「に、逃げろ」
何とか体制を整えたホーリーがサーチに近づく男に立ちはだかって背中で怒鳴る。
「ミリン！ホワイトシャークに連絡しろ！」
男の右腕が大きく半回転するとホーリーは床に打ちつけられる。サーチは無意識のうちに腰に手を当てるがレーザー銃はない。武器はすべてホワイトシャークに置いてきた。ノロの惑星にいる限り武器の携行は不要だ。
男がホーリーを踏みつけてサーチに近づく。サーチが背中で叫ぶ。
「早くホワイトシャークに」
男の太い腕がサーチの顔面に伸びる。咄嗟にかわして両手をその腕に絡めながら右足で男のヒザを払う。見事、男を倒すが、絡めたままのサーチの両腕が男の両手で締め上げられる。

「ぎゃー」

サーチの短い悲鳴とともに骨が折れる不気味な音がする。男は顔をあげると両目を大きく見開く。そしてドアに向かうミリン、ケンタ、住職、リンメイの背中に光線を発射する。そのときマスターがいつの間にか手にした焼酎の一升瓶で男の顔面を殴りつける。光線に高純度のアルコールが引火して男が火だるまになる。

「逃げろ！」

ホーリーやサーチを助けようと戻りかけたケンタや住職を制してマスターは次々と一升瓶を男に投げつける。男の服が焼け焦げると鋼鉄製の身体が現れる。一升瓶が尽きるとマスターはウイスキー、ブランデーと休むことなく瓶を投げつける。その順番は安い酒から高い酒へと替わるのに疑問が残るが、男の動作が緩慢になる。その間にホーリーはサーチを抱き上げて居酒屋を出る。

「ホワイトシャークと連絡が取れない！」

悲痛なミリンの声のあとケンタが絶叫する。

「あれは！」

ここに来る前は晴れていたのにどんよりと曇っている。よく見ると空には灰色の正五角形の巨大な物体が数えきれないほど浮かんでいる。そして背後で大爆発が起こる。振り返ると居酒屋が炎上している。

＊＊＊

「造船所へ！」
サーチを抱えたホーリーが促す。
「マスター、じゃない、最長は大丈夫かしら」
サーチはホーリーの腕の中で炎に包まれた居酒屋を気にする。
「最長のことだ。心配するな。それより腕は？」
「大丈夫と言いたいけれど……。あの男はフォルダーじゃないの？」
「フォルダーじゃない」
「いったいどうなっているの。マスターだと思ったら最長だし、フォルダーだと思ったらそうじゃなかった」
「無駄口を叩くな」
周りが更に暗くなっている。上空は前にも増して正五角形のねっとりとした巨大な物体が何重にもひしめきあっている。燃え尽きようとする居酒屋付近の光だけが頼りだった。
「まるで真夜中みたい」
ミリンが言うとおりお互いの顔どころか、足元さえ見えなくなる。
「ホワイトシャーク！応答しろ！」

声とその通信器の赤いＬＥＤの輝きで辛うじてケンタのいる場所がなんとか分かるほどの周りが真っ暗になる。居酒屋まで送ってくれたエアカーをドックに戻したことを後悔しても仕方がないのにサーチが悔やみながら震える。

「寒いわ」

この辺は砂漠で陽が落ちれば零度以下になる。

「こんなことになるんだったら、丼鉢で酒を飲んでおくんだった」

「つまらない冗談はやめて」

サーチがホーリーをたしなめたとき背後からザクザクという音が聞こえてくる。振り返ると燃え尽きる寸前の居酒屋の残光を背にした大柄な人間が近づいてくる。

「最長？」

サーチが呟いたのと同時に目も眩む光線が向かってくる。

「伏せろ！」

ホーリーが絶叫する。伏せた身体のほんの数センチ上を光線が通過する。

「キャアー」

ミリンの髪の毛から炎が上がると異様な臭いが充満する。ケンタが必死になってミリンの頭を払う。

「ミリン！」

サーチとホーリーが同時に叫ぶとケンタが応える。
「大丈夫！」
そのとき最長の声が直接全員の頭に響く。次元通信だ。
【しゃべるな。声を頼りに攻撃している】
最長に問いたいことがあるが、次元通信は人間には使えない。
〔無言通信を使え〕
ホーリーが個々に無言通信で指示する。
〔全員の安否を確認しよう〕
あくまでもホーリーの冷静な無言通信が、サーチに、ミリンに、ケンタに、住職に、リンメイに次々と届く。
了解した旨の返事が戻ってくるとホーリーはひとまず無言通信を止める。最長に対する通信手段がない以上、この砂の上で腹這いの姿勢を継続する以外なんの手立てもない。要は万事休すなのだ。そのとき、再び最長から全員に次元通信が届く。
【ＭＹ２８が昆虫のような形をした戦車で救出に来る】
続いて懐かしい声がケンタの通信機に届く。ＭＹ２８だ。
「皆さんの位置情報は最長からの連絡で確認済みです。大型戦車でそちらに進行中。今しばらく……」

雑音となってＭＹ２８の通信が途切れるが、すぐさまホーリーに最長から次元通信が入る。

【ＭＹ２８の救出隊は地下に潜った。連絡を取ることができない】

しかし、暗闇に慣れた視線を空に向けると明らかに天空が低くなってまるで天井に押し潰されるような圧迫感に声も出ない。しかもザクザクという音が背後から迫る。天空では絡まり合った無数の正五角形の頂点が紫色にグレーの絵の具を混ぜ合わせたような不気味な輝きを放つ。そして天空はその色に支配される。お互いの顔がくすんだ紫色に変色する。ホーリーは地面に這いつくばったまま、ザクザクという大股で近づいてくる足音の方向を見て思わず叫んでしまう。

「フォルダー！いや、違う。逃げろ！」

ホーリーに向かって正確に光線が向かう。ホーリーは身をひるがえすとすかさず跳躍して難を逃れるが、砂地に足を取られて転んでしまう。ゼイゼイという息の根を止めるためにホーリーは砂を口に含んで呼吸を止める。

――これまでか

もう声を頼りに攻撃しなくてもホーリーたちの姿はフォルダーそっくりの大男に見えているはずだ。ホーリーが頭を上げるとその大男の目が輝いている。

――フォルダーじゃないとしたらいったい誰だ

その男とホーリーの距離が詰まったとき、突然背後に巨大土偶が現れるが誰も気付かない。

一方、大男の視線がグーンと上がる。しかし、狼狽えるどころか耳をつんざくような大きな声を上げる。

「お前は何者だ！」

この言葉で初めてホーリーたちが巨大土偶に気付く。

――最長の仕業か！

ホーリーの直感どおり最長が苦肉の策として巨大土偶を時空間移動させたのだ。その巨大土偶の視線はまっすぐあの男に向かっている。見降ろす巨大土偶の視線と見上げる男の視線が激しくぶつかる。いくら大柄だといっても身長三百メートルもある巨大土偶から見ればアリのような存在にしか過ぎない。巨大土偶の目が黄色に輝くと男はひるむどころか同じように細い両目を輝かせる。

「危険だ！」

ホーリーの直感が言葉になるが対処のしようがない。足元は乾いた砂地で歩くことも困難だ。しかも、こともあろうか、その足元の砂が崩れるように渦を巻くと蟻地獄の穴のようになる。

「きゃあ」

ミリンとリンメイが悲鳴を上げる。と同時に巨大土偶の目から、そしてあの男の目から光線が発射される。巨大土偶に比べればアリの目のような小さな目から想像を絶する大量の光線が巨大土偶からの光線を遮断する。双方の光線がぶつかり合って炸裂する。

「見るな」

この光の錯綜を見るということは太陽を直接見るようなものだ。しかし、幸いなことに、いや、不幸なことに、ホーリーたちは蟻地獄の中心に向かって滑り落ちて上方を見る余裕などない。その穴の中心から二股に分かれた黒い槍のようなものが迫ってくる。この穴は巨大な蟻地獄のテリトリーなのかもしれない。その黒い槍の真ん中には蟻地獄の口があって容赦なく全員を呑みこもうとしているのかもしれない。

「ホーリー」

「サーチ」

「ミリン」

「ケンター」

「リンメイ」

「あなた！」

それぞれが死を覚悟して愛する者の名前を呼びあう。その声も消えて地上では巨大なエネルギーが周辺に拡散されて乾いた砂さえ燃え上がる。ホーリーたちは砂地獄に落ちなくてもこの熱で一秒たりとも生きることはできなかった。

＊＊＊

「身の程知らずが」
最長が巨大土偶の足元で真っ赤に燃え上がる鋼鉄製の球体を見つめる。
「それにしても、こんな身体でよくもあんな強力な光線を発射できたものだ」
最長は改めて巨大土偶を見上げる。そして時折赤い炎をチョロチョロとあげる丸い鋼体に背を向けてホーリーたちが消えた穴の辺りを見つめる。
――無事救出されたか？
最長が次元通信を試みようとしたとき、先が割れた黒い長いものがその穴の中心から現れる。
「この世界には不思議な生物が一杯いる。ノロが地球から方舟でこの星へあらゆる生命体を運ぼうとした気持ち、分からんでもないな」
やがて艶やかな黒い頭部が現れる。
「ブラックシャークもそうだが、ノロは地球の動物に似せて物を造るのが得意のようだ」
最長はホーリーたちが無事だと確信して穴から出てくる物体を眺めながら三次元の世界のデータを検索する。
「カブト虫というのか」
そのカブト虫のような物体の下には無限軌道のキャタピラが砂地に開いた穴の急斜面を苦もせずに這い上がって全容を現す。そして屈強の一言に尽きる戦車が最長に近づく。頭部のハッチが開くとＭＹ２８が顔を出す。

「ホーリーたちは？」
「四台の戦車に分乗しています。かなりの砂を呑みこんでいますが、無理矢理口から回復剤を流し込みました。しばらくすれば気を取り戻すはずです」
「それはよかった」
ＭＹ２８は上半身を最長に向けて深く頭を下げる。
「ありがとうございました。ホーリーに代わってお礼を申しあげます」
「なーに。ノロからの借りのほんの一部を返しただけだ」
ＭＹ２８は最長のかなり後方で赤黒く輝く球体を見つめる。その視線を追った最長がＭＹ２８の疑問の視線に応える。
「フォルダーそっくりのアンドロイドの成れの果てだ。しかし、強力なエネルギーを保有していた。かなり危険な敵だ」
「えっ！」
ＭＹ２８が大きな声でハッチの中に向かって大声をあげる。
「前方の球体の温度を計測しろ！それに内部の状態を分析しろ！」
ＭＹ２８の両耳が激しく点滅する。そして最長に向かって叫ぶ。
「離れてください！」
そのあとの声は冷静なトーンに戻る。

「あの球体に放水しろ」
　そのとき、赤黒い錆色に変化した球体がＭＹ２８の搭乗する戦車に向かって転がってくる。その瞬間カブト虫の角の形をした砲塔から勢いよく水がその球体に向かって放水される。すぐさまＭＹ２８はハッチを閉めて戦車内に身を隠す。球体が白い水蒸気に包み込まれると同時にブスブスという音をたてるとつんざくような大音響とともに爆発する。砂が舞い上がり、まったく何も見えなくなる。
　瞬間的に次元移動して巨大土偶の頭部の後ろに身を潜めた最長が驚く。
「アイツは死んではいなかった！」
　ハッチを開けて周りの様子を確認しながらＭＹ２８が応える。
「そのアイツは戦闘用アンドロイドです。彼は先祖返りして命を永らえたようです。恐るべきアンドロイドです」
「先祖返り？」
「推測です。アンドロイドは球体で生まれるのです」
「何！」
「つい先ほどそのことが分かりました」
　六次元の生命体の最長も絶句したままだ。
「ワタシの妻ＭＡ６０が出産しました。丸い可愛い赤ちゃんでした」

ここで最長が割り込む。
「やはり、アンドロイドに子を造る能力があったのか。私の布教に間違いはなかった（第三編第七〇章誘惑の布教）」
砂塵が消えた地表に最長が降り立つとＭＹ２８を見上げる。
「その話はいつか聞いたことがありますが、今データライブラリーを検索する時間はありません」
「しかし、自分の子の形を見た経験だけで丸くなった戦闘用アンドロイドの反撃を予想したのなら、人間以上の素晴らしい能力をＭＹ２８は持っていることになる。それに比べ……」
最長が巨大土偶を見上げる。
「しかし、巨大土偶はあなたを爆風から救ってくれた」
「そういうことにしておこう」
最長がぎこちなくＭＹ２８に微笑むと、ＭＹ２８も同じくぎこちなく微笑み返す。初めて六次元の生命体と三次元のアンドロイドの間に友情が生まれた瞬間だった。

＊＊＊

「これもノロが造った戦車か」
「分かりません。造船所に係留されていたホワイトシャークが頭上からの攻撃を受けて大破し

たとき、少し離れた地面から巨大なカブト虫が……」
ＭＹ２８の説明が続く。

＊＊＊

「船長は？」
ＭＹ２８にホワイトシャークの中央コンピュータから無線が入る。
「ワタシの子供が生まれたので祝宴を上げに居酒屋へ行った」
「アンドロイドに子供が生まれたというのは大事件だが、それをダシにして酒を飲むなんて……。いや、こんなことを言っている場合じゃない。空を見ろ」
ＭＹ２８が整備工場から外へ出て空を見上げる。
「なんだ！」
淀んだ薄気味の悪い紫色の雲に驚く。よく見ると崩れた五角形の紫色の座布団が重なりあうようにすべての空を覆い尽くしている。ノロの惑星に光を届ける太陽の光も五枚の絞り羽根を持ったレンズを通して見るようなだるい五角形に見える。
「こんな空を見たら人間は正常心を保てない」
まさしく黒板を爪で引っ掻いたような音以上の不快感を与える色で大空が覆われている。ＭＹ２８がホワイトシャークを見つめる。すべての主砲が天空に向う。

「中央コンピュータ」

ＭＹ２８が中央コンピュータに信号を送った瞬間、太陽から届く光の隙間に増幅した紫色の光線がホワイトシャークに向かう。同時にホワイトシャークの全主砲が火を吹く。

「中央コンピュータ！」

今度は絶叫に近い信号をＭＹ２８が発信する。ぴーんと張って鮫そのものの威厳を保っていたホワイトシャークが横倒しになる。そして中央コンピュータからの応答が途絶える。ＭＹ２８は中央コンピュータとの通信を諦めて整備工場に戻る。出会う海賊に「退避！退避！」と叫びながらＭＡ６０と赤ん坊の元に急ぐ。

中央コンピュータとおぼしき悲鳴の信号がＭＹ２８に届いたとき、強烈な震動が起こる。さすがのＭＹ２８も咄嗟に身を伏せる。

「地震か？いや、この震動は地震ではない」

ＭＹ２８は冷静に分析する。

「規則正しい」

ＭＹ２８の分析をあざ笑うかのように周りの地面が割れて黒光りした鋼鉄のような数えきれない物体が舞い上がる。空からの薄い光で透けて見える黒い羽を激しく震わせて、ホワイトシャークに攻撃を仕掛けた光の隙間に向かって上昇する。地上から出現した瞬間を目撃していればすぐに判断できたのかもしれないが、ＭＹ２８には後ろ姿だけしか見えないので、いったい

何が地下から舞い上がったのか分からなかった。
しかし、ホワイトシャークと比べればとても小さなもので不気味な光線を発するぼやけた五角形の集団に対して余りにも非力に見える。
ところがだ。ＭＹ２８からは見えないが、この黒い物体の前部には内側にノコギリのような歯を持つ歪曲した二本の角があった。その先端でスパークする目映い輝きが発生した途端あの正五角形の物体に強烈な光線が発射される。ノロの惑星を守ろうとしているのか、けなげにも紫色の大空に向かって上昇し続ける。やがて正五角形の集団の中に突入すると二本の角を器用に使って挟み付けては引き裂く。
「クワガタ虫？」
ＭＹ２８が両耳を赤く輝かせて中央コンピュータにアクセスする。
「クワガタ戦闘機？これもノロが造ったのか？」
「強力なレーザー光線を発射できます。レーザー攻撃がダメなら、どんなものでも食いちぎる力があります」
「でも数が多すぎる。かなう相手ではない！」
ＭＹ２８はホーリーを通じて瞬示から聞いた話を思い出して不安な気持ちになる。それは巨大コンピュータに巨大だといっても大きさからするとアリのような無数の巨大土偶が戦いを挑んで全滅した話だった（第二編第五〇章「ニューロコンピュータ」）。

＊＊＊

「造船所には戻れません」
ＭＹ２８が無念そうに報告する。
「えー！」
回復剤と驚異的な生命回復機能とが相まって元気になったサーチが叫ぶ。
「戦闘用アンドロイドに占拠されました」
「ＭＡ６０と赤ん坊は？」
「間一髪、戦車で地下に逃れました」
「住民は？」
「人間は時空間移動装置で地球に逃れました」
「アンドロイドは？」
「一部のアンドロイドは人間と一緒に逃げましたが、時空間移動装置で地球に逃れさせようとしたアンドロイド防衛隊は全滅しました」
「信じられない」
「防衛システムが作動する前に造船所を中心としたすべての施設が奇妙な生物にむしばまれました」

ここで初めてホーリーが質問する。
「奇妙な生物？」
「ヒトデです」
「ヒトデ？」
操縦席のモニターにあのコバルトブルーのノロの惑星の美しい海ではなくどす黒い紫色の海が映しだされる。大昔公害で海が汚染された光景を思い出させるねっとりとした波が海岸に打ち上げられている。
「まさかこれがノロの惑星の海だと言うんじゃ？」
ＭＹ２８は直接応じることなく、映像を見ながら説明を続ける。
「大量の大きなヒトデが上陸して造船所に向かいました」
「上陸？本来ヒトデは海でしか生活できないはず」
サーチが口を挟む。
「理屈抜きで聞いてください。実際に起こったことしか報告できません」
モニターにはヒトデが上陸したあとの砂浜が映しだされる。幾筋ものフォノグラフのような虹色の筋が残っている。ただし七色の虹色のうち紫色だけが欠けていることにホーリーが気付く。
「見るに堪えない色をしたヒトデなのに移動したあとに残した痕跡が虹色とは」

「まるでナメクジが這った跡みたいだわ」
ふたりの感傷的な言葉を遮ってＭＹ２８が解説を続ける。
「ヒトデは鋼鉄を好むようです」
画面は造船所に侵入したヒトデの荒々しい行動に替わる。ヒトデが造船所のクレーンをよじ登りながら、内側中央にある口で鉄をかじっている。
「鉄を食っている！」
ホワイトシャークもヒトデに包み込まれている。
「さすがにヒトデの歯も立たないのか、いや柔らかすぎるのか……」
「ホワイトシャークはなんとか持ちこたえている」
サーチとホーリーが感心しながらモニターを見つめる。
「ブラックシャークもそうですが、ホワイトシャークもトリプル・テンという特殊な物質で覆われています」
「ノロが発見した不思議な物質のことだな」
ＭＹ２８はホーリーの言葉を無視して続ける。
「でも経験したことがない攻撃を受けたホワイトシャークは検査中だったこともあってヒトデの侵入を許してしまいました。すべての隔壁を閉鎖すればなんとかなったかもしれませんが、対応が遅れたため内部にヒトデがあふれました」

「内部から崩壊したのか」
「そうです」
「ホワイトシャークの中央コンピュータは？」
「彼は軟体動物が苦手です。端末に自分自身をコピーしてから脱出しました」
「今、どこにいる？」
　ホーリーが突っ込む。
「ご存知のとおり、端末は素速い行動能力を持っていません。しかし、本体の中央コンピュータと違って端末は軟体動物に免疫を持っているようで、しかもトリプル・テンという特殊な物質で身体を覆っていたので脱出できたようです」
　そのとき、咳払いとともにホワイトシャークの中央コンピュータ？あるいはその端末からの通信が入る。
「二次元エコーを使って反撃する。それが失敗すれば、この星の軌道を変えてヤツラを消滅させる」
「具体的には？」
「取りあえず、ノロの家に集合！」
「ノロの家は造船所からそんなに離れていないぞ。大丈夫か」
「集合したら地下室へ！」

「何を言っているんだ。あの地下室には十人も入れないぞ」
端末が応じる前に最長からの次元通信が入る。
【あの地下室は六次元の広さを持つ。三次元の人間が一億人いても全員あの地下室に入ることができる】
「確認したいことがある」
ホーリーは肉声を出すと最長がそれをすくい上げる。
【なんだ。そのまましゃべり続けてくれ】
「次元通信は人間には届くがアンドロイドには？」
【残念ながら届かない。しかし、ＭＹ２８とＭＡ６０の間に生まれた赤ん坊には届く】
赤ん坊に次元通信が届いたところでなんの役にも立たないと思いながらホーリーは最長に渾身の力を込めて叫ぶ。
「分かった。最長の言葉、ＭＹ２８に伝える。そうすれば残ったアンドロイド間に周知されるはずだ」
【慎重にしろ。アンドロイド間の通信は戦闘用アンドロイドにも漏れるということを肝に銘じておけ。もうひとつ重要なことを伝えよう。ノロの惑星に侵入したのは戦闘用アンドロイドだ。そしてすべてフォルダーと瓜二つの姿をしている】
「そんな！」

一旦ホーリーは言葉を失うがすぐ気を取り直す。
「分かった。重大な情報だ。十分気をつけるよう周知させる」
【繰り返す。戦闘用アンドロイドは変装の名人だ。次はホーリーやサーチに変装して攻撃してくるかもしれない。このことを決して忘れるな】
「最長、ありがとう。でもなぜそこまで俺たちに……」
【ノロに恩を返したい。それだけのこと】

＊＊＊

「最長はノロの居所については何も応えてくれなかった」
「それより戦闘用アンドロイドの攻撃を防ぐことが先決よ」
「しかし、ホワイトシャークはもう動かない」
「この非常事態にノロの惑星の中央コンピュータは何をしているんだ？」

第九十四章　ビートルタンク

【時】永久０２９７年５月

【空】ノロの惑星

【人】ホーリー　サーチ　ミリン　ケンタ　住職　リンメイ　ＭＡ６０　（ノロ）

＊＊＊

戦車から降りたホーリーやサーチたちがその勇姿に驚く。
「まるでカブト虫だ」
「確かに大型だが、たった四台しかない」
「四台でノロの惑星を防衛するなんて不可能よ」
サーチの心配を無視してホワイトシャークの端末、いや、チューちゃんが解説を始める。
「ところでこの四台の戦車には愛称があります」
「ニックネームか？」
「そうです。ジョン、ポール、ジョージ、リンゴです」
「どこかで聞いたような」
「愛称はともかく、四台ではなあ」

ホーリーがサーチの不安を共有する。
「とにかくノロの家の地下室に」
全員、周りを見渡して首を傾げる。
「どこにノロの家があるんだ」
「ノロの家は攻撃を受ける直前に地下奥深いところに退避しました」
「さすがノロの家だな」
誰もが驚くと思っていたチューちゃんは少しがっかりする。
「どこからノロの家に入るんだ」
チューちゃんが移動すると腰を屈める。そして土を払うといかにも頑丈そうな扉が現れる。
「地下深いところに退避した割には地表に入口があるとは」
「この扉、見覚えがあるわ」
全員、首を縦に振る。
「これは本が一杯詰まった地下室に通じる扉と同じだ」
この反応にチューちゃんの方が驚く。
「知っていたのですか」
「大昔、ここで瞬示と真美と出会った」
ホーリーが赤茶けた鉄の輪っかを力強く引っぱると、ギーという音をたてて扉が開く。ため

らいもなくチューちゃんはハシゴを降りながら目をサーチライトのように輝かせる。すると部屋の様子がおぼろげながら浮かびあがる。チューちゃんがトンと床に足を着けるとホーリーが、そしてサーチが続く。

「あのときと同じだわ」

本が山積みされている。最後にケンタが扉を閉めて床に降りると、チューちゃんの目の輝きだけが唯一の明かりとなる。その光も届かない隅で蛍のような淡い緑の光が輝く。

「きれい」

ミリンがフラフラと光に向かうと何かにつまずいて前のめりになる。積まれた本の山に手を突くとバタバタと本が崩れる。

「ミリン！」

ケンタが素速く腕を掴もうとするが間に合わない。身体を支えるものを失ったミリンは何百冊の本とともに床に倒れる。

「大丈夫？」

近づくサーチにミリンは床に顔を付けたまま呟く。

「この下に何かあるわ」

黄色の光を受けたミリンの横に赤い輪っかがある。ミリンは立ち上がると引っぱろうとする。その輪っかが付いている扉は先ほどこの部屋に入ってきた地表の扉とまったく同じだ。

ミリンに替わってケンタが引っぱる。さっきと同じ音をたてて扉が開く。
「ノロ得意の冗談なのかしら」
サーチライトがわりのチューちゃんを先頭にハシゴを降りる。やはり先ほどと同じ部屋で本が山積みされている。
「チューちゃん。さっきから何もしゃべらないけど、これはどういうこと？」
サーチがチューちゃんの肩を叩く。
「うーん」
チューちゃんは唸ったまま周りを照らすように首を回す。今度はリンメイが薄い緑色の輝きを見つける。
「本の山を倒せば下から黄色い光が現れるはずよ」
ミリンが楽しそうに応えると意外にもリンメイが本の山を次々と蹴りとばす。
「リンメイ！はしたない！」
リンメイは構わず住職の手を取って叫ぶ。
「ストレス解消よ。あなたもどう？」
「本を蹴り倒すなど本末転倒じゃ」
ところが踏みだした足が本の山を崩してしまう。すると住職はリンメイを押しのけて次々と本の山を蹴りとばす。その姿を見たミリンがクスクス笑うと住職の足元から黄色い光が漏れて

くる。そしてその光の中に、またあの赤い輪っかが現れる。住職は屈むとその輪っかを握る。
「ちょっと待った」
ホーリーが住職の肩に手を当てるとチューちゃんを睨む。
「ゲームとしてはおもしろいが、何回同じことをすればゴールにたどり着けるんだ」
チューちゃんの目の輝きが薄くなる。
「それが分からないのです」
汗をかくはずがない、しかも顔色も変わるはずがないのにチューちゃんの顔は黄色い光が差しこんでいるのに青白い。
「ここはみっつ目のフロアーですね。ということはここは地下三階」
「何を言いたい」
「時間の次元がドンドン加算されています」
「どういう意味だ」
「びっくりするほど時間が進んでいるとか、戻っているとかということではありません。我々がいる空間の時間の方向が前進だけの時間から、後退の時間、そして左右に動く時間、もっと下の階に行けば上下に動く時空間に身を置くような気がします」
「ということはこれ以上輪っかを握って扉を開けるなと言うことか」
「いえ。もう一回は許されるでしょう。最長が言う広い地下室があるはずです。恐らく次の階

だと思います」
「分かった」
ホーリーが答え終わるとある本の山がぼーと黄色に輝き出す。そしてその山を崩そうと腕を払うが、崩れるどころか腕を引っ込める。
「イテ」
よく見ると一メートルはある分厚い十冊ほどの大判の本が寄りそうように置かれている。そして黄色い光を発している。
「蹴るしかないな」
「待って」
足を上げるホーリーをサーチが止める。
「やっぱり本を蹴るなんて抵抗感があるわ。それにいったいなんの本か、確認した方がいいわ」
「そうだな」
「ところでこの部屋には明かりがないの」
「あっ！あります。忘れていました」
チューちゃんはハシゴに戻って数段上ると扉横の天井を探ってスイッチを入れる。チューちゃんの目の輝きが消えて天井中央の裸電球が目も眩むような強い光を発する。暗い環境に慣れた全員がたまらず目を閉じる。

やがて目が慣れてホーリーから順番に本の題名を読み上げる。
「ブラックシャークのヘルプ」
「多次元エコーの使い方と注意事項」
「中央コンピュータとうまく付き合う方法」
『時空間移動装置は実はアンドロイドの赤ちゃんだった』という意見に関する論文。なんだ？
この本は」
「シャチを宇宙戦艦に改造する方法」
「カブト虫を戦車に変身させる手術」
「宇宙戦闘機クワガタの秘密」
ここでホーリーが大声をあげる。
「なんだ！なんだ！著者は全部ノロだ！」
「宇宙大学卒業論文『アンドロイドに細胞はあるのか』」
「宇宙大学博士論文『アンドロイドはオナラをするか』」
たまらずホーリーが表紙を開けて数ページめくる。
「序論に代えての前書」
そう言ったままホーリーは黙読する。そして大声を出して笑い出す。
「この論文は宇宙ノーベル賞を受賞することを意識して執筆したもので……」

つられてサーチもミリンもそして誰もが笑い出す。しかし、すぐにサーチが真顔になるとホーリーの横に立ってその本の表紙を閉じようとする。
「興味ある本ばかり。でも読む時間はないわ。とにかくこの分厚い本を移動させましょう」
「そうだな。永遠の命のまま、無人惑星に漂流しても死ぬまで読み切れないほどの本がある」
ミリンが笑顔でホーリーに同調する。
「ここの本、全部持って無人惑星に星流しの刑に処せられるのなら、私、喜んで刑に服すわ」
「何を言ってるの。それより本をどこに移動させようか」
サーチがミリンとホーリーを促す。
「ケンタ、手伝ってくれ」
「わしも手伝う」
若い住職も応じる。
「仏教のどの経典よりも分厚いのう」
「チューちゃんによれば次の部屋が最後になるらしいわ」
このサーチの言葉に全員の興味が目の前の本から床に向かう。本がなくなると今までと違って錆び付いていない金色に輝く丸い取っ手が現れる。頷くチューちゃんにホーリーとケンタがその取っ手を握る。少し開いた時点で眩しい光が視線を突く。

＊＊＊

ＭＡ６０がまるで卵を抱えるように毛布にくるまった赤ん坊を抱えたまま天井を見上げる。床からハシゴがその一角に伸びている。周りの海賊が一斉にライフルレーザーの照準を合わせる。その一角がギーという音をたてて全開する。誰かが降りてくる。

「誰だ！」

その誰かが途中で眼下を確認するように首を傾げる。

「ホーリー！」

歓迎の声が広い部屋にこだまする。ホーリーが一気に飛び下りる。

「サーチ！ミリン！みんな！安心して降りてこい。慌てるな！ゆっくりでいい」

歓声の中、次々と降りてくる。

「無事だったのね」

サーチがＭＡ６０に近づく。リンメイがアンドロイド工場長に抱きつく。ミリンはＭＡ６０の胸の中で毛布にくるまれた赤ん坊を覗く。丸い身体が少し膨らむとすぐに少し縮む。

「呼吸している」

「人間にはそう見えるのね」

ＭＡ６０が赤ん坊とミリンを交互に見つめる。そのとき「ドサッ」という音が聞こえる。チューちゃんがハシゴから落ちた音だ。手には分厚い本が握られている。ケンタがチューちゃん

の元に駆けよる。
「扉を閉めてください」
ケンタがハシゴを駆け上って扉を閉めると軽やかに床に飛び下りる。天井からミシミシという不気味な音が聞こえてくる。歓声は消えて誰もが天井に向かって耳を澄ます。
「安心してください。この部屋と上の部屋では時間の次元が違います。この空間には誰も侵入できません」
「そうか。……でもお前、何を持っているんだ」
慌ててチューちゃんは隠そうとするが、分厚い本など隠せる訳がない。
「なんだ」
ホーリーが本の表題を読み上げる。
「中央コンピュータとうまく付き合う方法」
チューちゃんがうなだれる。
「自分がどう思われているか、知りたかった？」
チューちゃんが赤面する。
「チューちゃんっていったい何者なの」
ミリンはノロそっくりのチューちゃんにこれまでと違った感情を持つ。
「今は単なる端末ではありません。中央コンピュータが世を忍ぶ仮の姿です」

「それじゃ、ヤドカリみたいなもんか」
ホーリーがしみじみとチューちゃんを見つめる。
「いい住みかがあったら教えてください」
「いい住みかってコンピュータのこと？」
「そうですね。量子コンピュータもいいですが、今度は光コンピュータを希望します」
「そう言えば、今まで中央コンピュータと端末を意識して区別したことはなかったわ」
「どちらも『チューちゃん』と呼んでいた」
「コンピュータを造ったのは人間なのに本体と端末の区別もできない。でもヤドカリコンピュータなんて聞いたことないわ」

＊＊＊

コバルト色の明るい海はなく、どこまでが海でどこからが空か分からない光景が広がる。単にどんよりと曇っているのではない。甲羅を覆う文様に空一面が五角形の物体で覆われているのだ。しかもその文様のひとつひとつが拡大したり縮小したり、隣の文様を呑みこんだり、重なったりしながら……眺め続けると船酔いして吐き気を催すような不快感がする。しかもその色は紫を基調としたねっとりとしたグレーで誰もが目を背ける。今にも雨が落ちてきそうな鉛色の空の方がどれだけマシなことか。

足元には更に不気味さを増したねっとりとした歪な反射光を放つ大小様々なヒトデで埋まっている。「シューシュー」という音をたてながら砂浜から内陸部へ移動する。海面には多数の魚の死体が所狭しと浮いている。しかも悪臭に満ちている。同じ悪臭が海辺からかなり離れたところまで侵入したヒトデの周りでもする。そうするとこの悪臭の元はヒトデに違いない。このヒトデの大群が居住区に侵入すれば、悪臭だけで人間は死ぬかもしれないがすでに脱出していた。もしスカンクがノロの惑星に生息していたら、すぐシッポを白旗に変更して左右に振るだろう。

こんなヒトデの大群に造船所はおろかホワイトシャークまでが覆い尽くされる。ホワイトシャークの外壁は特殊な物質トリプル・テンに覆われているので頑丈だが、内部はヒトデの攻撃に無力だった。船長のサーチやホーリーたちが居酒屋で泥酔している間に起こったヒトデの侵入にホワイトシャークののんきな中央コンピュータは対策を講じなかった。無策と言うより、誰がヒトデの大群に占領されると考えられようか。ましてやそのヒトデが鋼鉄を食いつぶすなんて想像を絶することだった。

しかし、現実は現実だ。ヒトデの大群の一部が造船所からノロの家に向かったとき、ぬめりのある紫グレーの空から同じ色のペンキのような大粒の雨、というより野球ボール大の大粒の液体が降ってきた。並木に当たると葉っぱや枝はもちろんのこと幹にも粘り着いて全体を覆う。そしてそのまま固まって不気味な姿となる。あの美しいノロの惑星は見る影もなくうっすらと

紫色に輝くグレーの世界に豹変する。草木はともかく金属性の物質はすぐ赤い粉を吹きだす。街路灯やエアカーは紫グレーからくすんだ赤いサビをまとったような塊と化す。建物の屋根や壁に筋のような赤茶けた線が現れると徐々に延びていく。

ノロの家はこの奇妙な雨が降る前にまるで生き物のように地面に沈んだので難を逃れた。残った広大な正方形の敷地がすぐに紫グレーのペンキのような雨に覆い尽くされると、その四隅が陥没する。その陥没したところから先が二股に分かれた黒光りした長い棒のようなものが現れる。よく見るとオスのカブト虫の角のように見える。すぐその角の根元から丸みを持ったやはり黒光りした本体が現れる。強力な粘着力を持つ大粒の紫がかったグレーの雨をものともせず、やがて全身を地上に露出させる。それは想像を絶する真っ黒な四台の戦車だった。その砲塔はまるでカブト虫の頭に見える。そして四台の戦車が揃って砲塔をまっすぐ空に向けると真っ黒な光線、いや光線と言うより黒い柱のようなものを放つ。かなり上空でその四本の黒い柱が合体すると光の塊に急変して四方に広がる。ペンキのような大粒の雨が急に止む。雨で見えなかった不気味な大小様々なグレーの五角形の物体で占有されていた空に驚くべき変化が現れる。

五角形の模様が次々と一辺あるいはひとつの角を失って四角形に変化する。正方形や長方形や台形や菱形や様々な四角形が膨らんだり縮んだりする。更に一辺あるいは一角を失って四角形は様々な三角形に変化する。

この様子を地下室でモニターを見つめていたホーリーたちはまったく理解できずに興奮する。
「空の色が紫がかったグレーから紫色に、そして紺色に変わった」
「見て！あれは」
「宇宙戦艦だ」
ホーリーが断定する。三角形の模様をした雲の合間にヒトデのような形をした物体が数えきれないほど見える。
「えー？あれが宇宙戦艦だなんて」
サーチの反論にホーリーが自信を持って答える。
「よく見ろ」
サーチはホーリーが指し示すヒトデ型の物体の五本の足に突起した無数の触手に注目する。
「レーザー砲だ」
「あんなにたくさんのレーザー砲を装備しているなんて」
「我々の宇宙戦艦が束になってかかったとしても一撃で全滅するだろう」
「ホワイトシャークなら？」
「その質問は『ブラックシャークなら』だろ」
「多次元エコーのことね。要は多次元エコーなら対処できるのかしら」

「分からない」
「なぜ？多次元エコーは無敵だわ」
「それは相手が無機質の物体の場合だ」
「そうだったわ。生物にはなんの影響もない不思議な兵器……」
ホーリーが頷くとサーチが弱々しく言葉を続ける。
「でもホワイトシャークに多次元エコーを搭載していない」
「ホワイトシャークに多次元エコーを搭載しなかった理由は、中央コンピュータの説明によれば多次元エコーの乱用を防止することだった。つまり、使い方を誤ると多次元エコーの影響で宇宙そのものが崩壊してしまうからだ」
「ホーリーの説明で多次元エコーを再認識したわ。実現しなかったけれど多次元エコーを製造してホワイトシャークに搭載できなかったのは、それはそれでよかったのかも」
「だと思う。しかし、ノロはなぜ最強の兵器、多次元エコーを造ったのか？一回限りではないにしろ、恐らく数回しか使用できない禁断の兵器をなぜ製造したんだ？」
「大昔、人間は原子爆弾を製造したことがあったわね。実際、その爆弾を使用したのは二回だけだった。三回目は人類の、いえ地球の終末になるのではとの危機感から回避された」
「それは複数の国が原子爆弾を保有していたからだ。多次元エコーはノロだけが所持する武器だ」

「ノロでよかった。独裁者が持っていたら、この宇宙は消滅していたかも」
「俺はノロがなぜ多次元エコーのような使い勝手の悪い武器を造ったのか？これが問題だ……と思う」
「なぜ奥歯にものを挟むの？」
「むしろノロは武器以外の素晴らしいものを造ってきた。エアカー、時空間移動装置、アンドロイド、そしてノロの惑星。武器は多次元エコーだけ」
「まだ奥歯にものが挟まっているわ」
「ここまで言えば分かるだろ」
　サーチがキョトンとするとミリンが割って入る。
「夫婦間の会話に割り込むのは非常識だと思う。でも娘だから許して。お父さんは多次元エコーを補う武器をノロが造った可能性が高いと言いたいのよ」
「さすが、俺の娘だ」
　サーチが機嫌を損なうが、まだ理解できていない。
「多次元エコーを補う武器？」
　ミリンが説明する。
「多次元エコーは強力な武器だわ。人畜無害だと言われているけれど、あらゆる次元に影響を与える膨大なエネルギーを発する最終兵器」

ホーリーは口を挟まずに、そしてサーチも不満顔を改めて真剣にミリンの説明を聞く。
「そんな兵器を乱発する訳にはいかない。低次元の世界のことはよく分からないけれど……」
意外な説明にホーリーが表情を引き締める。サーチは驚きを通りこして瞬きもせずにミリンの言葉に集中する。
「……三次元以上の世界に多次元エコーが強烈な影響を与えるなら、その影響を受ける高次元の世界の次元を下げればいいと考えたはずだわ」
「ミリン！そのとおりだ。ビートルタンクがヒントだ」
ホーリーの言葉を仕舞いこむとミリンは目を閉じて思い出すように言葉を探す（第三編第六十五章わがままな人質事件）。
「ノロがこんな話をしていたわ」

＊＊＊

ブラックシャークの艦橋の隅でノロとミリンが談笑している。
「ブラックシャークで恐竜時代に時空間移動したとき、無数の巨大土偶に攻撃された。俺は思わず初めて多次元エコーを発射した」
「どうしてそんな話を私にするの」
ミリンは気軽な会話を望んでいたのに、いつの間にかノロの話がむずかしい科学的な内容に

なったことに異議を唱える。しかし、ノロはお構いなしに続ける。
「巨大土偶は土でできていたから、多次元エコーの攻撃で粉々になってすべて分子レベルまで破壊された。でも有機物の恐竜は耳を押さえてはいたが、ピンピンしていた」
「本当に耳を押さえていたの？」
「もちろんだ。多次元エコーの『キーン』という強烈な音には誰も耐えられない」
「分かりました。要は巨大土偶は粉々になったけれど、恐竜は耳以外ピンピンしてたのね」
「ミリンはのみ込みが早いな。多次元エコーの秘密を話するのが楽しくなる」
ノロは両手両足をバタバタさせると大きな口をニーッと広げる。
「そのときまったく気付かなかったが、巨大土偶は六次元の世界のアンドロイドだったのだ。宇宙大学で論文にしたんだが、この宇宙は三次元の世界ではない。様々な次元の世界が同居している世界だ。でも誰も認めてくれなかった。俺の論文は俺をキチガイ扱いする証拠になってしまった」
鉄砲玉のようにしゃべるノロに一瞬悲しみの表情が横切る。
「そりゃそうだ。俺たちには高次元の、たとえば六次元の世界は見えない。いや、三次元部分が見えるだけで、仮に六次元の物体が目の前に置かれていてもその三次元部分を見ているだけなんだ」
勇気を出してミリンが尋ねる。

「目の前に石があっても三次元の物体とは断定できない。その石は六次元の物体の三次元部分で私たちは勝手に三次元の石と思っているだけって言うこと？」

ノロが大声を出す。

「そのとおり！宇宙大学の教授連中の誰ひとり理解できなかったのに、ミリンが理解してくれたなんて！俺は幸せ者だ！」

ノロの口が裂ける。いくらノロが大好きなミリンでも身を引く。

「そこで考えた。目の前の石が三次元の物体なのか六次元の物体なのか。次元を間引く装置を造れないかと毎日考えた。次元の圧力を抜けば六次元の物体は五次元の物体に、五次元の物体は四次元に……」

ノロの目が輝くがミリンはただ頷くだけ。

「三次元まで次元を降下させれば、多次元エコーは有機物には作用することなく無機物にだけ作用して分子レベルまで分解できる。残った有機物には通常の武器でも攻撃が可能になる。つまり、高次元の生命体からの攻撃を防ぐことができる。分かるか？」

「分からないわ。でもそんな武器はできたの」

「もちろん。でも実験したことがない。試作品を俺の家の敷地に埋め込んだままだ」

「なぜ敷地に」

「いつでも実験できるように」

「実験したの」
「いや、忘れていた」
「試作品っていったい何なの」
「戦車だ」
「戦車？」
「とってもかっこいい戦車だ」
そのときイリがノロに近づいてふたりの会話が中断する。

＊＊＊

ミリンの思い出話が終わるとサーチに笑顔が戻る。
「その戦車がビートルタンクなのね」
ここでチューちゃんの咳払いが地下室にこだまする。
「ゴホン」
「遠慮せずに発言しなさい」
サーチが促す。
「お言葉に甘えて、ミリンの思い出話の解説をします。その前に……どうやら戦闘用アンドロイドはどこかで巨大コンピュータの演算能力とデータを活用して五次元の世界を理解したよう

です」
「想像ね」
「推定です」
「どちらでもいいわ。それで」
「大量の戦闘用アンドロイドが我々を攻撃しても多次元エコーで排除するのは簡単です」
「でも多次元エコーはホワイトシャークに搭載されていないし、製造する前にヒトデにやられたわ」
「そのとおりです。ところでそのヒトデについてですが、生命体ですから多次元エコーは無力です」
「それは承知したわ」
「サーチ。黙ってチューちゃんの話を聞こう」
「復習になりますが、あの巨大コンピュータにも多次元エコーは無力でした」
「そら、そうだ。巨大コンピュータの正体は脳だった。脳は生命体そのものだ」
「ホーリー！黙って聞くと言ったのは誰なの」
「発言は自由です。適当な合いの手がある方がしゃべりやすいので大歓迎です。しかし、多次元エコーの攻撃で巨大コンピュータはその機能を停止して死にました」
「それは巨大な脳へエネルギーを供給できなくなったからじゃ」

今度は住職が割り込む。
「そのとおりです。巨大な脳にエネルギーを供給していた火炎土器をすべて多次元エコーが破壊したからです（第二編第五十一章多次元エコー）」
「壮烈な戦いだった」
全員、巨大コンピュータとの激戦を思い出してため息をつく。
「今回の戦闘用アンドロイドの攻撃に対して、仮に多次元エコーで対抗しても無機物の彼らを葬ることはできません」
ホーリーが疑問を投げかける。
「なぜだ！ヒトデは生命体だからどうしようもないが、戦闘用アンドロイドはすべてチリになるはずだ」
「恐らく五次元の生命体で構成された戦艦に乗り込んでいるからです。限界城も同じで五次元の生命体で構成されていると考えられます」
サーチが反論する。
「金の入れ歯をした人間を多次元エコーで攻撃すれば人間は何ともないけれど、金歯は消滅するはずよ」
「確かに。しかし、どう経過をたどったかは分かりませんが、戦闘用アンドロイドは巨大コンピュータから多次元エコーの弱点を学び取ったようです」

誰もが驚いて口をつぐむ。
「でも、ノロがそういう欠点を知らないはずはありません」
「！」
ここでチューちゃんが大きな口を精一杯開く。よく見ると口の中は金歯で一杯だ。
「オール入れ歯か」
「そうです。ワタシはブラックシャークのアル中のチューちゃんとは違って下戸です」
「？」
「ワタシの好物はチョコレートです」
「ちょっと待て」
ホーリーが両手を広げてからその手で顔面を叩く。
「そうだったな。ノロはコンピュータにもアンドロイドにも人間味を持たせることが趣味というか、クセだった」
「そんなことどうでもいい。ぜんぜん話が進まないわ。なぜ金歯の話が重要なの」
「要はチョコレートを食べすぎて虫歯になったのですべて金の入れ歯にしたのですが、人間の場合、きっちり口を閉めれば多次元エコーを浴びても金歯は無事です」
「きっちり閉めればか」
「戦闘用アンドロイドはヒトデという生命体、しかも五次元の生命体の中にいれば多次元エコ

ーの攻撃から身を守ることができるのです」
「ふーん」

＊＊＊

「仮に多次元エコーで戦闘用アンドロイドと戦っても勝ち目はないということじゃな」
住職が諦めたような結論を口にする。
「多分。ヒトデ戦艦や限界城に穴を開けることができれば多次元エコーで戦闘用アンドロイドを全滅させることはできます」
チューちゃんの言葉にヒントを得たホーリーがアイデアを出す。
「と言うことは、ビートルタンクの砲塔をドリルに変えればいいのか」
「さすが、ホーリーですね」
全員が色めく。
「ビートルタンクの砲塔は取替自由です。ビートルタンクは宇宙空間でも活動可能な戦車です」
「そうか。限界城やヒトデ戦艦に穴を開けて多次元エコーで攻撃するんだ」
「ちょっと待って」
サーチが横槍を入れる。
「限界城は巨大よ。それにヒトデ戦艦は数えきれないほどの大群だわ。たった四台のビートル

タンクでは……」
チューちゃんがサーチを支持する。
「サーチの言うとおり、まず無理でしょう。それに多次元エコーを製造したとしてもそれを搭載する宇宙海賊船がありません」
ホワイトシャークがヒトデの餌になってしまったことを思い出すとホーリーが落胆する。
「俺たちには四台の戦車しかないのか」
ここでチューちゃんが軽く咳払いをするとニーッと口を広げる。
「この四台で十分なのです。この四台が結束するとすごい力を発揮するのです。もちろん単独でもすごい武器を持っていますが」
ホーリーがヒザを乗り出す。
「多次元エコーか！」
「残念ながら多次元エコーは装備していません。多次元エコーを発射するには巨大なエネルギーが必要です。もっとも太陽エネルギーと比べると微々たるものですが」
「じゃあ、どんな武器なんだ」
「二次元エコー」
「えー！二次元エコー？なんだか頼りないな」
「ふふふっ」

チューちゃんが口を閉じたまま薄気味悪い笑い声をあげる。
「場合によっては次元を更に下げて一次元エコーも発射できます」
チューちゃんの表情が真顔に戻るとホーリーが怒鳴る。
「分かるように説明しろ」
「二次元エコーは、たとえば三次元の物質に向かうとその物質の一次元部分だけを残して二次元部分を消去します。えーと、何ページだっけ」
「何をぶつぶつ言っているんだ」
チューちゃんが部屋の隅の机に向かう。そこには何冊もの分厚い本が山積みされている。
「なんだ。その本は？」
「すべてノロが書いた本です。本にせずにデータで保存してくれれば探すのが楽なのに。ブツブツブツ……」
「あの部屋にあった本だ。いつの間にここへ」
次々と分厚い本を手にするとぼやきが大きくなる。
「これでもない。えーとこれでもない」
「なんの本を探しているんだ」
「えーと、えーと」
そのとき部屋の床の中央部から大きな咳払いが聞こえる。

「ゴホン！」
「誰だ！」
「ノロ！」
「あーあーよく寝た」
急に床全体が虹のように輝く。そしてその中央部が盛り上がる。
「ノロ！やっぱりノロだわ」
ミリンが床に現れた人影に突進する。
「わー！止めてくれ」
ミリンが抱きしめる。まさしくノロそのものが悲鳴を上げる。
「ワタシはノロの惑星の中央コンピュータの端末です」
「えー！」
「ノロそっくりの端末はいったい何台あるんだ」
「失礼な！何人いるかだろ！」